長崎県埋蔵文化財センター調査報告書　第24集

諫早農業高校遺跡

平成29年度諫早農業高校
草花管理室・収納室改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１８

長崎県教育委員会

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書　第 24 集

諫早農業高校遺跡

平成 29 年度諫早農業高校
草花管理室・収納室改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１８

長崎県教育委員会

写真１　遺跡遠景（東から。小野干拓地より大村湾方面を望む）

写真２　遺跡近景（東から。船越丘陵を望む）

なだらかな丘陵の奥に城山と高城からなる低山地が横たわる。その向こうの小船越を抜けると大村湾へとつながる。この丘陵に、弥生時代には拠点的な集落が栄え、古代には官道が南北に貫いていたのであろう。中世～戦国期には、船越氏や伊佐早氏、西郷氏らが館を構えていたと考えられている。

写真 3　調査区北壁土層断面状況（東から）

写真 4　調査区東壁土層断面状況（北から）

写真 5　甕棺墓 ST04 検出状況（北から）

写真 6　土器埋設ピット SP81（左）・218 検出状況（北東から）

写真 7　火葬土坑 ST01 完掘状況（北から）

写真 8　掘立柱建物跡 SB03 完掘状況（東から）

写真 9　遺構完掘状況（上が東）

写真 10　伝・明治 39 年出土銅剣　（長崎県埋蔵文化財センター所蔵）

刊行にあたって

本書は、平成 29 年度諫早農業高校草花管理室・収納室改築工事に伴い実施した諫早農業高校遺跡の発掘調査報告書です。

諫早農業高校の前身である長崎県立農学校は明治 40（1907）年に開校しました。その用地造成時には弥生時代の甕棺と銅剣が発見されたと伝えられており、現在も残る銅剣は県指定の有形文化財となっています。

また、遺跡のある立石町・船越町の一帯は、古代の駅家である船越駅があったと考えられています。さらに後の時代では、正応元（1288）年に船越氏が築城し、南北朝期には伊佐早氏が居城した船越城の比定地となっています。

この度の発掘調査では、弥生時代の甕棺や古代の緑釉陶器の小片が見つかったほか、室町時代の建物跡及び火葬土坑を検出しました。弥生時代の集落範囲の一端が分かったことや、船越駅及び船越城を考えるうえでの資料を得たことなど、大変意義深いものとなりました。

この発掘調査にあたって御協力いただいた諫早市政策振興部文化振興課をはじめ諫早市美術・歴史館、諫早市立図書館など多くの皆様方に深く感謝を申し上げますとともに、この調査成果が学術的に広く活用され、さらには地域の方々の郷土を理解する資料として役立てていただければ幸いです。

平成 30 年 3 月

長崎県教育委員会教育長

池松　誠二

例　　言

１．本書は、平成 29 年度諫早農業高校草花管理室・収納室改築工事に伴い実施した諫早農業高校遺跡の発掘調査報告書である。

２．本書は平成 29 年度諫早農業高校草花管理室・収納室改築工事に伴う諫早農業高校遺跡発掘調査報告書作成費にもとづいて発行した。

３．本事業は長崎県教育庁教育環境整備課が事業主体となり、発掘調査主体は長崎県教育委員会が、発掘調査は長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センターが担当した。発掘調査の長崎県遺跡調査番号は INK201701 である。

４．発掘調査のうち基準点測量・空中写真撮影・放射性炭素年代測定はそれぞれ業務委託を行った。

基準点測量：扇精光コンサルタンツ株式会社　　空中写真撮影：株式会社大信技術開発

放射性炭素年代測定：株式会社パレオ・ラボ

５．平面直角座標は世界測地系を、方位は座標北を用いている。

６．発掘調査に係る現地指導、情報・資料提供など以下の方々に御指導・御協力いただいた（敬称略、所属順）。

野澤哲朗・前田加美（諫早市政策振興部文化振興課学芸員）、古賀力・秀島貞康（諫早史談会）、川畑敏則・堀内和宏（長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所）、安樂勉（長崎市出島復元整備室）

７．本書に収録した遺物の実測および製図は、長崎県埋蔵文化財センターが行った。

８．金属製品の透過エックス線撮影及び保存処理は、長崎県埋蔵文化財センター調査課片多雅樹係長、鮫島葵文化財調査員が行った。

９．本書収録の遺物・図面・写真類は長崎県埋蔵文化財センターに保管している。

10．本書収録の 3 桁の遺物番号は収蔵登録 ID「INK201701-□□□」の枝番号部分と一致する。また、収蔵登録 ID は遺物へ注記し収蔵台帳に記載している。

11．巻頭図版 6 の銅剣は長崎県埋蔵文化財センターに保管している。また写真及び 3D レプリカ復元は長崎県埋蔵文化財センターが行った（片多・吉井・白石 2014）。

12．本書に掲載した地質図は、地質図幅「北部（縮尺 1:200,000）」『九州地方土木地質図』（九州地方土木地質図編纂委員会 1985）を使用し作成したものである。

13．本書に掲載した周辺遺跡分布図は、国土地理院コンテンツの標準地図・色別標高図・傾斜量図タイルを使用し加工して作成したものである。引用元 URL：国土地理院ウェブサイト https://maps.gsi.go.jp/#5/35.362222/138.731389/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0l0u0f0&d=v

14．本書の執筆･編集は松元が行った。なお、第Ⅳ章第 2 節第 2 項中の剥片石器及び第Ⅸ章第 1 項「石器」についての執筆・分析・実測図作成は川道寛が行った。

本文目次

Ⅰ. 遺跡の環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
1．地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
2．歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
（1）弥生時代
（2）古代
（3）中世
Ⅱ. 調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
1．調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
（1）学校用地造成と遺跡の発見、周知化
（2）これまでの範囲確認調査
（3）平成 27 年度諫早農業高校野菜温室改築計画
2．範囲確認調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
（1）調査期間と面積
（2）調査体制
（3）調査内容
Ⅲ. 調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
1．調査期間と面積 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
2．調査体制 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
3．発掘調査の流れ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
（1）工事事業計画
（2）発掘調査の流れ
4．層序と地形 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
（1）基本層序
（2）旧地形の推定
5．調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
6．整理作業・報告書作成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
Ⅳ. 縄文・弥生時代の遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
1．遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
（1）甕棺墓　ST04
（2）焼土を伴う遺構　SL03
（3）土器集中　SU01 ～ 03・04
2．遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
（1）石器
（2）土器
Ⅴ. 古墳時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
1．遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
（1）土器埋設ピット　SP81・218
2．遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
（1）土師器
（2）須恵器
Ⅵ. 古代・中世の遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
1．遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
（1）掘立柱建物跡　SB03
（2）ピット群
（3）葬送関連遺構　ST01
（4）土坑　SK02・03
（5）焼土を伴う遺構　SL02
2．遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
（1）黒色土器
（2）土師質土器
（3）瓦質土器
（4）その他
Ⅶ. その他の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
1．遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
（1）土坑　SK01・SC01
（2）焼土を伴う遺構　SL01
2．遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
Ⅷ. 自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
Ⅸ. 総括 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
1．石器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
（1）黒曜石製剝片石器群の分析
（2）黒曜石製剝片石器群の位置づけ
（3）蛍光Ｘ線分析による原産地分析
2．甕棺墓と集落 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
3．中世 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
（1）掘立柱建物跡
（2）火葬土坑
（3）小結
【引用・参考文献】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50

図目次

図 1　表層地質図 (S=1/100,000) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
図 2　弥生時代長崎県本土域の拠点集落・・・・・・・・・・・ 2
図 3　古代駅路の概念図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
図 4　周辺遺跡分布図 (S=1/50,000) ・・・・・・・・・・・・・・・ 5
図 5　過年度の調査箇所位置図 (S=1/6,000) ・・・・・・・・ 7
図 6　トレンチ土層断面図 (S=1/40) 及び
出土土器実測図 (1/4) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
図 7　調査区土層断面図 (S=1/80)・・・・・・・・・・・・・・・・・11
図 8　遺構分布図 (S=1/80) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
図 9　ST04 実測図 (S=1/20) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
図 10　SL03 実測図 (S=1/20) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
図 11　遺物実測図［縄文・弥生時代石器］(S=2/3) ・・・16
図 12　遺物実測図［弥生時代石器］(S=1/3・1/1) ・・・・17
図 13　ST04 出土土器実測図 (S=1/4) ・・・・・・・・・・・・・・・18
図 14　遺構・包含層出土
遺物実測図［弥生土器］(S=1/4) ・・・・・・・・・・・・・19
図 15　SP81･218 実測図 (S=1/20) ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
図 16　SP81･218 及び遺構・包含層出土
遺物実測図［古墳時代土器］(S=1/4) ・・・・・・・・ 21
図 17　SB03 実測図 (S=1/80) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
図 18　ST01 実測図 (S=1/20) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
図 19　SK02・SL02 実測図 (S=1/20) ・・・・・・・・・・・・・・・ 25
図 20　SB03・その他ピット・遺構・包含層出土
遺物実測図［古代・中世土器］(S=1/4) ・・・・・・ 27
図 21　SK01・SL01 実測図 (S=1/20) ・・・・・・・・・・・・・・・ 28
図 22　黒曜石製剝片石器 (蛍光Ｘ線分析測定資料) ・・ 43
図 23　弥生時代中期前半の黒曜石製剝片石器群 ・・・・ 44
図 24　九州黒曜石原産地判別図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
図 25　スタンプ文瓦質火鉢の類例 (S=1/4) ・・・・・・・・・・47
図 26　火葬土坑・木棺墓類例 (S=1/40) ・・・・・・・・・・・・ 49

表目次

表 1　周辺遺跡一覧 ･････････････････････････ 4
表 2　諫早農業高校遺跡の発掘調査等の履歴 ･････ 6
表 3　ピット一覧 1･････････････････････････ 30
表 4　ピット一覧 2･････････････････････････31
表 5　ピット一覧 3･････････････････････････ 32
表 6　ピット一覧 4･････････････････････････ 33
表 7　遺物一覧 1（土器・陶磁器）･････････････ 34
表 8　遺物一覧 2（土器・陶磁器）･････････････ 35
表 9　遺物一覧 3（土器・陶磁器）･････････････ 36
表 10　遺物一覧 4（土器・陶磁器）･････････････ 37
表 11　遺物一覧 5（石器）･････････････････････ 38
表 12　黒曜石蛍光X線分析資料一覧 ･･････････････ 46

写真目次

【巻頭図版】
巻頭図版 1
写真 1　遺跡遠景（東から。小野干拓地より大村湾方面を望む）
写真 2　遺跡近景（東から。船越丘陵を望む）
巻頭図版 2
写真 3　調査区北壁土層断面状況（東から）
写真 4　調査区東壁土層断面状況（北から）
巻頭図版 3
写真 5　甕棺墓 ST04 検出状況（北から）
写真 6　土器埋設ピット SP81･218 検出状況（北東から）
巻頭図版 4
写真 7　火葬土坑 ST01 完掘状況（北から）
写真 8　掘立柱建物跡 SB03 完掘状況（東から）
巻頭図版 5
写真 9　遺構完掘状況（上が東）
巻頭図版 6
写真 10　伝・明治 39 年出土銅剣

【本文写真】
写真 11　その他の遺物

【写真図版】
写真図版 1
写真 12　平成 27 年度範囲確認調査トレンチ土層断面状況（東から）
写真 13　表土掘削状況（西から）
写真 14　遺構調査状況（西から。金比羅岳方面を望む）
写真図版 2
写真 15　北東半 1 遺構検出状況（南から）
写真 16　北東半 2 遺構検出状況（南から）
写真 17　北西半 1 遺構検出状況（南から）
写真図版 3
写真 18　南東半 1 遺構検出状況（北から）
写真 19　南東半 2 遺構検出状況（北から）
写真 20　南西半 2 遺構検出状況（北から）
写真図版 4
写真 21　SU06(ST04) 検出状況（西から）
写真 22　ST04 骨片・焼土粒検出状況（西から）
写真 23　ST04 完掘状況（北から）
写真図版 5
写真 24　SU03 検出状況（南から）
写真 25　SU04 検出状況（南から）
写真 26　遺物出土状況（南東から）
写真図版 6
写真 27　SL03 断割状況（西から）
写真 28　SP218 半裁状況（南から）
写真 29　ST01 検出状況（東から）
写真 30　ST01 半裁状況（南東から）
写真 31　SK02 半裁状況（南から）
写真 32　SK02 底面検出状況（南から）
写真 33　SK01 完掘状況（南から）
写真 34　SK03 検出状況（北から）
写真図版 7
写真 35　SL01 検出状況（北から）
写真 36　SL01 断割状況（南から）
写真 37　SL02 検出状況（北から）
写真 38　SL02 半裁状況（東から）
写真 39　SP01(SB03) 半裁状況（南から）
写真 40　SP150(SB03) 半裁状況（西から）
写真 41　SP150(SB03) 完掘状況（北から）
写真 42　SP11(SB03) 半裁状況（東から）
写真図版 8
写真 43　SP159(SB03) 半裁状況（西から）
写真 44　SP159(SB03) 礎板石出土状況（北西から）
写真 45　SP137(SB03) 礎板石出土状況（東から）
写真 46　SP226(SB03) 半裁状況（南から）
写真 47　SP226(SB03) 遺物出土状況（南から）
写真 48　SP226(SB03) 完掘状況（北から）
写真 49　SP225(SB03) 礎板石出土状況（北から）
写真 50　SP225(SB03) 完掘状況（北から）
写真図版 9
写真 51　SP63(SB03) 半裁状況（南から）
写真 52　SP22(SB03) 礎板石出土状況（北西から）
写真 53　SP107(SB03 庇) 半裁状況（南から）
写真 54　SP69(SB03 庇) 半裁状況（南から）
写真 55　SP48 遺物出土状況（南から）
写真 56　SP03 遺物出土状況（南から）
写真 57　SP195 半裁状況（西から）
写真 58　SP117 半裁状況（北から）
写真図版 10
写真 59　甕棺墓 ST04 出土土器 1
写真図版 11
写真 60　甕棺墓 ST04 出土土器 2
写真 61　土器集中・包含層出土土器（弥生時代）
写真図版 12
写真 62　SP81・218 出土土器、包含層出土土器（古墳時代）
写真 63　SB03 出土土器・陶磁器（中世）
写真図版 13
写真 64　ピット SP 出土土器（古代・中世）
写真 65　包含層出土土器・陶磁器（古代・中世）1
写真図版 14
写真 66　包含層出土土器・陶磁器（古代・中世）2
写真 67　遺構・包含層出土石器（弥生時代）

Ⅰ．遺跡の環境

１．地理的環境

諫早農業高校遺跡の所在する諫早市は長崎県本土部の南央に位置する。東の島原半島、西の長崎半島と北の多良山系を繋ぐ諫早地峡にあたり、東に有明海、西に大村湾、南に橘湾と面する地理的結節点である。一帯の基盤は新生代古第三紀（4 ～ 5,000 万年前）に形成された砂岩・泥岩よりなる諫早層群で、その上に新第三紀～第四紀更新世の火山性堆積物が載っている。遺跡より南側には有喜火山岩類（160 万年前）の火山性岩石及び砕屑物が広がる。北側は古期多良岳火山岩類（100 万年前）の火山麓扇状地堆積物にあたる。凝灰角礫岩からなる火山性岩石及び砕屑物は地元でドンク盤と呼ばれる地盤となっている。

これら主として火山岩類に由来する地形を大小の河川が開析し、裾野へ向かい八つ手状に長く伸びる丘陵を形成している。市内を東流する一級河川・本明川は多良岳火山麓扇状地に端を発し有明海に

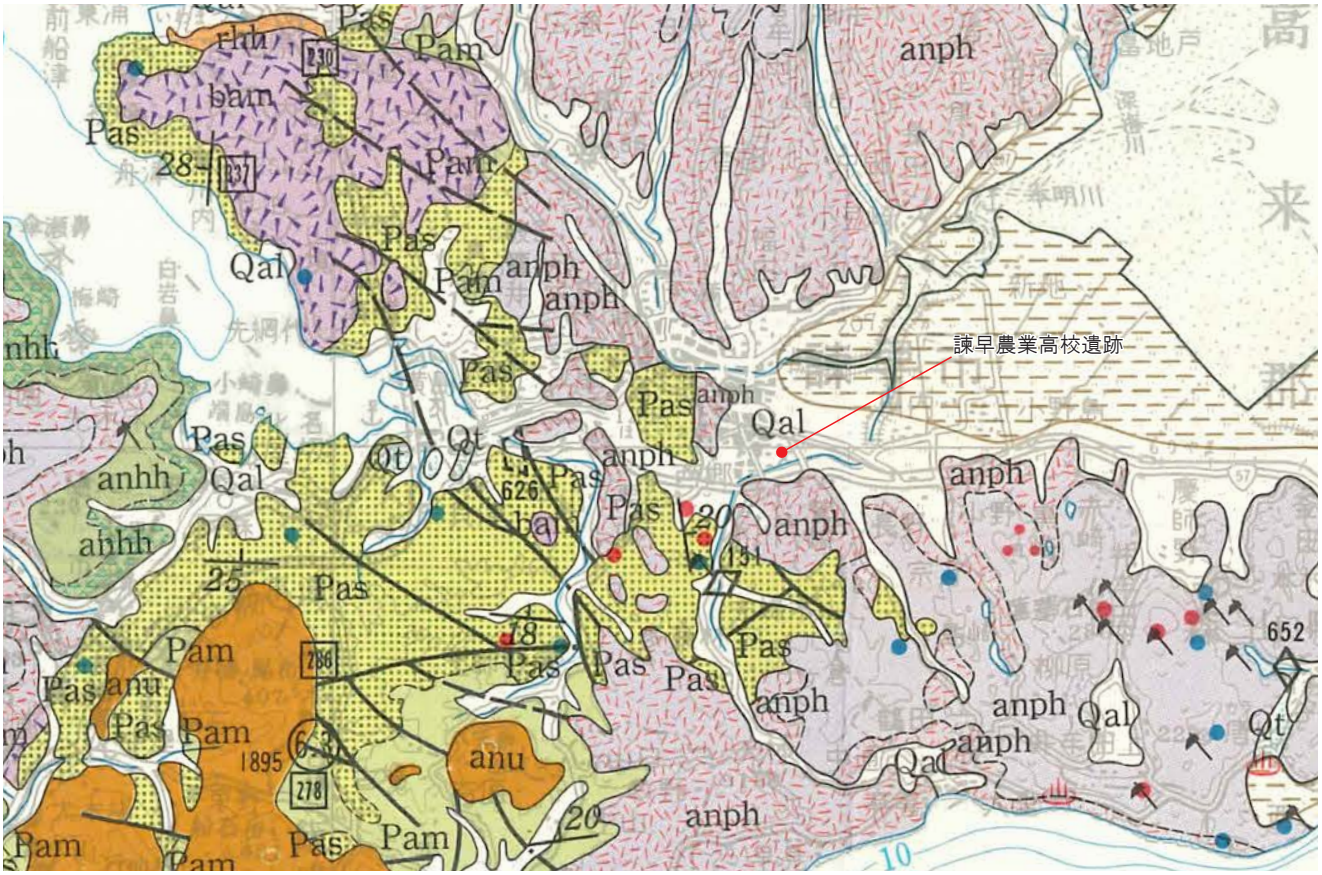


図１　表層地質図（S=1/100,000）

地質図幅「北部（縮尺 1:200,000）」『九州地方土木地質図』（九州地方土木地質図編纂委員会 1985）をもとに作成

【堆積岩類】

- 第四紀
  - 完新世 ― 沖積層 ― Qal 礫・砂・粘土
  - 更新世 ― 扇状地堆積物 ― Qt 礫・砂・粘土
- 古第三紀 ― 始新世 ― 諫早層群
  - Pas 礫岩・泥岩、等
  - Pam 頁岩・砂岩、等

【噴出岩類】

- 第四紀 ― 完新世～更新世 ― 雲仙・多良火山岩類 ― anu 角閃石安山岩・輝石安山岩・玄武岩
- 新第三紀 ― 更新世～中新世
  - 松浦玄武岩類 ― bam 玄武岩(アルカリ・ソルアイト質、等)
  - 豊肥・瀬戸内火山岩類
    - anph 輝石安山岩・玄武岩
    - 〃[縞] 凝灰角礫岩
    - anhh 角閃石安山岩
    - 〃[縞] 凝灰角礫岩
    - rhh 流紋岩・石英安山岩

流入する。近隣の低位山地・御館山付近に始まる半造川も同様に東流し現在では本明川に合流している。遺跡は地峡部の東端にあたり、北の本明川と南の半造川に挟まれた低位丘陵の東端に位置する。この船越丘陵の表層地質は、西の根元付近で諫早層群が露出するが、東の中位面は火山麓扇状地堆積物で覆われ、さらに東端は礫・砂・泥からなる沖積層で形成される。干潟の陸化以前、船越丘陵は有明海に突き出す舌状の地形を呈していたと考えられる。

一方、丘陵の西側には八天岳北麓を源とする東大川が北西に流れ大村湾の支湾である津水湾へと注いでいる。半造川を上流に遡ると小船越町あたりで東大川と近づき直線距離で600 mほどとなる。地勢的には、遺跡に南接する半造川を伝い大村湾へと抜けるルートにおける有明海側の玄関口にあたる。かつ本明川沿いで大村方面へと抜けるルートにもアクセスできる好位置にある。

2．歴史的環境

（1）弥生時代

弥生時代の遺跡では墳墓遺跡と遺物包含地が諫早湾沿岸部及び津水湾奥部に認められる。小栗A～C遺跡の位置する鷲崎丘陵先端部では、弥生時代中期前半から後期にかけての甕棺墓・箱式石棺墓からなる墓域が広がる。津水湾奥部では、滑川遺跡で中期の甕棺墓・石棺墓が、化屋大島遺跡（消滅）で弥生時代前期末から中期初頭の箱式石棺墓群、貝津横島A遺跡で弥生・古墳時代の箱式石棺墓が検出されている。

前期の支石墓を除く中期以降の墳墓遺跡は、半造川河口両岸にあたる船越丘陵・鷲崎丘陵の先端部及び津水湾奥部に多く、それぞれ諫早湾と大村湾を繋ぐルートの出入り口であることは興味深い。一方で居住域等を示す集落遺跡の様相は判然としない。遺物包含地遺跡における弥生土器は中・後期が多く、中期では北部九州系が主体であるなかで肥後系が認められる。後期では台付甕等の有明海系土器が目立ち始める傾向にある。

近年、台付甕や肥前型器台等を有明海系の文化要素とする議論が活発であり、そうした中で拠点集落の盛衰や役割が論じられている（宮﨑 2015）。弥生時代中・後期における長崎県域の拠点集落に目を向けると、青銅製武器の出土した遺跡は壱岐・対馬を除き県土南半の遺跡である。細形銅剣の出土した当遺跡の他に、島原市景華園遺跡では多数の甕棺墓と細形銅剣・中細形銅矛が出土している。南島原市北岡金比羅遺跡では甕棺から銅剣が出土したとの伝聞が

図2　弥生時代長崎県本土域の拠点集落

ある。また鉄製武器では、大村市富の原遺跡の甕棺から出土した鉄戈がよく知られている。宮﨑氏は、佐世保市門前遺跡や東彼杵町白井川遺跡等の拠点集落も含め、有明海から大村湾・外洋へ、あるいは早崎瀬戸から橘湾・外洋へという、水上交通を前提としたルートを想定している。

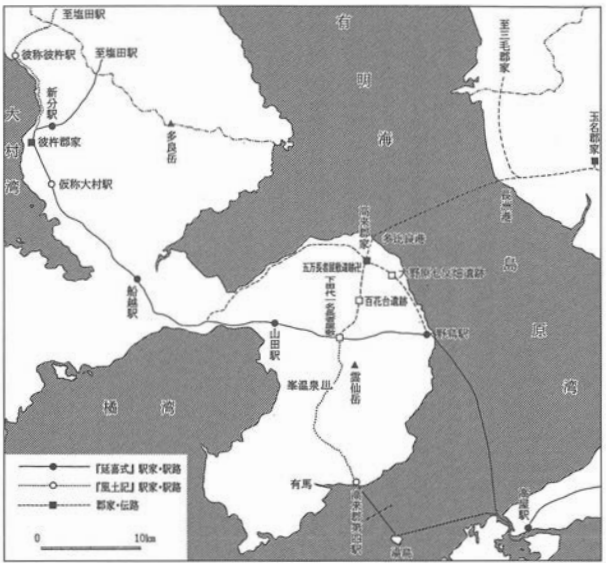


図３　古代駅路の概念図（木本 2011）

（２）古代

古代における当地域は西海道肥前国に属し、駅制や条里制等の律令的支配体制が敷かれる。『延喜式』（延長５（927）年）に記載されている肥前国の駅家のうち、長崎県内では「新分」・「船越」・「山田」・「野鳥」の４駅が該当する。このうち「船越駅」の比定地として有力視されているのが遺跡のある船越丘陵である。

木下良氏は船越丘陵界隈での駅路について、現在の立石町と西郷町の大字界となっている直線道路を想定している（木下 1994）。現在は主要地方道有喜本諫早停車場線となっており、かつては上野馬場と呼ばれた一帯である。木本雅康氏はこのルートを踏襲しているが、直線道路が鷲崎の丘陵にさしかかる地点より以南について別のルートを提示している。木下ルートが鷲崎と長野の丘陵間を流れる川床川沿いであるのに対し、木本ルートは鷲崎丘陵の尾根伝いの道となる。このルート沿いには安徳碑とされるものがあり、後の島原街道と長崎街道を結ぶ宇喜往還にもなっている。また、田井原や小野の一帯では「二の坪」・「三の坪」等の土地区画を示す小字名が残っており、条里遺跡として周知されている。特に田井原は船越駅の駅田である可能性が考えられている。

（３）中世

平安時代末期には、現在の市域にあたる範囲が「伊佐早村」という名で荘園として宇佐神宮に寄進されている（建久８（1197）年『宇佐大鏡』）。この伊佐早庄はのちに仁和寺仏母院領となるが、実質的には地方豪族の船越氏が管理していたという（正和３（1314）年『深江文書』）。船越又次郎入道如覚が正応年間（1288 年頃）に居城として築いた船越城の比定地が船越町の一帯である。船越氏を確認できる文献は深江文書が最後となる。以降は伊佐早氏が市域北部を支配するようになるが、南北朝期には領地をめぐる争いへと発展していく。北朝方の伊佐早氏は船越城を居城に半造川より北側を拠点とし、宇木城を居城に南側をおさえる南朝方の西郷氏と対立する。明徳３（1392）年の南北朝合一より後は西郷氏が諫早を治めることとなる。西郷氏は高城に居を移して沖城や真崎城等の支城を築き、干拓や農地の整備等を行いながら、近世まで諫早の地を治めていくことになる。

天正 15（1587）年、西郷信尚が豊臣秀吉の九州平定に参陣しなかったため、領地は没収され筑後柳河の龍造寺家晴に与えられる。信尚は肥後国人一揆の際に高城を一時奪回するものの、秀吉の命令を受けた小早川隆景の指揮のもと家晴や鍋島氏、有馬氏により討伐され敗走する。一方の佐賀藩では慶長 12（1607）年、龍造寺氏に代わって鍋島勝茂が藩主となる。西郷氏に取って代わった龍造寺氏は２代・直孝のときに姓を「諫早」に改め、鍋島氏の「御親類同格」として明治時代に入るまで「佐賀藩諫早領」を治めていく。

表１　周辺遺跡一覧　　時代略称（旧：旧石器、縄：縄文、弥：弥生、墳：古墳、古：古代、中：中世、近：近世、不：時期不明）

遺跡名	種別	立地	時代	備考
遺構／遺物				
赤島	散布地	丘陵	縄	
阿蘇前	散布地	平地	縄	
伊賀峰城	城館跡	山頂	中	大村氏。戦国初期
主郭・帯曲輪・空堀・土塁(虎口か)				
諫早家御屋敷	屋敷跡	平野	中・近	
礎石立建物跡・石組側溝・井戸・胞衣壷／土師質・瓦・近世陶磁				
諫早農業高校	**散布地・墳墓**	**丘陵**	**弥・墳・中**	
甕棺・掘立・中世墓／銅剣・貿易陶磁				
一里松	散布地	沖積地	縄	
井手	散布地	丘陵	中	
上阿蘇	墳墓	台地	弥	
箱式石棺／黒曜石剥片				
上野町	散布地	丘陵	弥・墳・中	
環濠(墳)、掘立(中)／弥生土器・貿易陶磁・土師質・滑石製品				
永昌	散布地	丘陵	縄	
沖城	城館跡	平野	中・近	西郷氏
溝状遺構・道路遺構・鋳造関連土坑・杭列／国産陶磁・貿易陶磁・土器・木製品				
尾首鬼塚	古墳	台地	墳	
小栗A	墳墓	丘陵	弥	
小栗B	墳墓	丘陵	弥	
甕棺・箱式石棺・土坑墓／土器(中期前葉～後期後葉)				
小栗C	散布地・墳墓	丘陵	弥・中	旧・林ノ辻遺跡
甕棺・箱式石棺・中世墓・溝状遺構・ピット／土器(中後期・台付甕)・貿易陶磁				
尾野大久保	散布地	丘陵	縄	
小野貝塚	貝塚	丘陵	弥	
小野城	城館跡	丘陵	中	西郷氏
主郭・空堀／六地蔵塔				
小野条里	条里跡	平野	縄・弥・中	
杭列／土器				
折山頭	散布地	丘陵	不	
尾和谷城	城館跡	丘陵	中	
掘立・池・溝・土坑／貿易陶磁・土師器・陶磁器・鉄滓・鋳造製品				
貝津横島A	墳墓	丘陵	弥・墳	
箱式石棺				
貝津横島B	散布地	丘陵・平野	縄	
柿崎	散布地	丘陵	旧・縄	
笠原	散布地	丘陵	縄	
梶原	散布地	丘陵	旧・縄	
合戦場	散布地	山裾	旧・縄	
金谷	石造物	平地	中・近	
神上げ	散布地	丘陵	旧・縄	
上打越	散布地	丘陵	旧	

遺跡名	種別	立地	時代	備考
遺構／遺物				
上峰原	散布地	丘陵	旧・縄・近	
上薬師下	石造物	台地	中・近	
上横址	散布地	丘陵	不	
木秀古墳	古墳	丘陵	墳	円墳(7世紀)
横穴式石室2／須恵器				
窪ン谷	散布地	丘陵	弥	
久山古墳	古墳	丘陵	墳	
久山城	城館跡	丘陵	中	
主郭・馬場				
化屋B	散布地	丘陵	旧・縄	
源内谷	散布地	丘陵	縄	
高天	散布地	台地	縄	
古場関	散布地	丘陵	不	
崎田	散布地	丘陵	弥	
迫ノ山	散布地	台地	旧・縄・弥	
猿崎	散布地	丘陵	縄・弥	
鹿越	散布地	丘陵	旧・縄	
下後古場	散布地	丘陵	縄	
下峰原	散布地	丘陵	旧・縄	
下峰原高場	散布地	丘陵	旧・縄	
十仙平	散布地	丘陵	縄	
正津	散布地	丘陵	不	
城間ノ辻	散布地	台地	旧・縄	
城山城（大村市）	城館跡	山林	中	
切岸・曲輪				
新立	散布地	丘陵	不	
菅牟田池	散布地	丘陵	縄	
善福寺	散布地	平野	旧・縄	
田井原条里	条里跡	平野	古・中・近	
高城	城館跡	丘陵	中	西郷尚善
主郭・馬場・井戸				
田尻	散布地	岬	旧・縄	
多々良川A	散布地	台地	縄	
多々良川B	散布地	台地	旧・縄	
駄森積石塚	墳墓	丘陵	不	
太郎丸	散布地	平野	弥	
蔦川内	墳墓	丘陵	中・近	
堤の端	散布地	丘陵	縄	
鶴田城	城館跡	丘陵	中	
中下	散布地	丘陵	旧・縄	

遺跡名	種別	立地	時代	備考
遺構／遺物				
中嶋	散布地	台地	中	
中田・専岩	散布地	沖積地	弥・墳	
中前後谷	散布地	丘陵	旧・縄	
長牟田	散布地・城館跡	丘陵	縄・中	
中山（諫早市）	散布地	丘陵	不	
中山（諫早市）	散布地	丘陵	中・近	
滑川	墳墓・散布地	丘陵	縄・弥・墳	
甕棺・箱式石棺(中期前半)				
西佐竹	散布地	丘陵	縄	
西里	散布地	丘陵	縄・弥	
西常盤	散布地・貝塚	平野	縄・弥	
西輪久道	散布地	丘陵	旧・縄	
野添	散布地	丘陵	旧・縄	
土師野尾	散布地	丘陵	縄	
土師野尾窯	窯跡	丘陵	近	
土師野尾古窯	散布地	丘陵	近	
八天下	散布地	丘陵	旧・縄・弥	
東大久保	散布地	丘陵	旧・縄	
東長田貝塚	貝塚	台地	弥	
平松城	城館跡	丘陵	中	南北朝期
主郭・石塁・土塁・空堀・矢通・棚状切岸				
平山A	散布地	丘陵	縄	
風観岳支石墓群	墳墓	丘陵	弥	
支石墓（下部は箱式石棺）／山の寺式土器				
船蔵石	墳墓	丘陵	不	
本明B	墳墓	丘陵	墳	
箱式石棺1				
本明石棺群	墳墓	丘陵	墳	
箱式石棺10／鉄剣・鉄鎌・刀子・鉋・人骨・弥生土器・土師器				
真崎城	城館跡	丘陵	中	西郷氏。戦国初期
主郭・空堀・虎口・土塁・石塁・集石				
水の手	散布地	丘陵	墳	
溝陸	散布地	丘陵	旧・縄	
宮崎館	散布地	丘陵	旧・縄・弥・墳・中	
ナイフ形石器・石鏃・土器・貿易陶磁				
宮園城	城館跡	丘陵	中	
主郭・堀切・切岸				
宗方城	城館跡	丘陵	中	
宗方筒井	散布地	平野	縄・弥・墳・古・中・近	
貝塚				
山中（大村市）	墳墓	丘陵	中	
中世土坑墓か(石蓋あり)				
横野	散布地	丘陵	旧・縄	

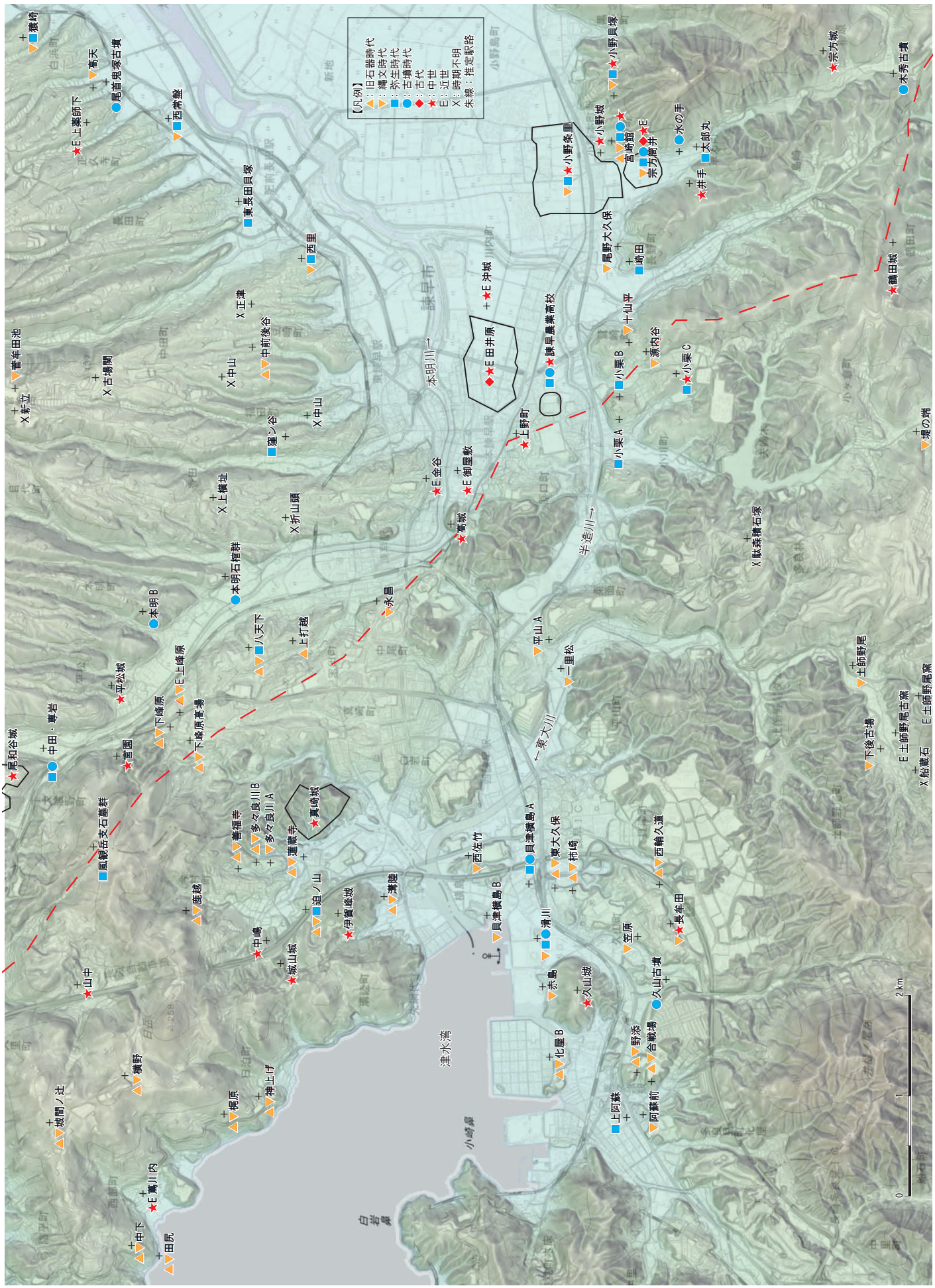


図４　周辺遺跡分布図（S=1/50,000）　「標準地図及び傾斜量図データ」（国土地理院）をもとに作成

Ⅱ．調査に至る経緯

１．調査に至る経緯

（１）学校用地造成と遺跡の発見、周知化

明治 40（1907）年に開校した諫早農業高校の前身「長崎県立農学校」の用地造成時に、弥生時代の甕棺と細形銅剣が発見されたと伝えられている。発見された銅剣は時を経て、昭和 46（1971）年に地元の古老・森多三郎氏により長崎県立美術博物館に届け出られた。森多氏は発見時に居合わせたわけではなく詳細は不明とのことだが、甕 32 個が出土しその 1 つから銅剣が出土、甕は全て廃棄されたという（正林 1971）。その後しばらくは「立石遺跡」と呼称されていたが、昭和 51（1976）年 3 月に文化庁が刊行した『全国遺跡地図　長崎県』には「農業高等学校遺跡」の名称で登載され周知が図られた。のちの『長崎県遺跡地図』には現在の名称である「諫早農業高校遺跡」として登載されている。

（２）これまでの範囲確認調査

学校用地造成・建設以降も校内における施設設置・改修等に伴い何度かの範囲確認調査が行われている（表２・図５）。総じて、近現代の掘削や造成による撹乱が著しいものの、その中からは弥生土器片や中世の土師質土器・陶磁器が多く出土している。また、地点によってはこれらを含む中世の包含層の残存が認められている。

表 2　諫早農業高校遺跡の発掘調査等の履歴

【調査年】	【調査期間】	【調査面積】	【調査要因】
【遺構】	【遺物】		【備考】
明治39(1906)	―	―	【要因】学校建設
【遺構】伝・甕32個	【遺物】細形銅剣1振		【備考】以降、立石遺跡の呼称
昭和42(1967)	【備考】文化財保護審議委員会『全国遺跡地図　長崎県』に「農業高等学校遺跡」の名称で登載、周知が図られる。		
昭和46(1971)	【備考】正林護「諫早市出土の銅剣」『九州考古学』41～44。前年に細形銅剣1振の届け出があり正林氏が聞き取りを行う。		
昭和51(1976)	【備考】文化庁『全国遺跡地図　長崎県』に「農業高等学校遺跡」の名称で登載、周知が図られる。		
平成 6(1994)	【備考】長崎県教委『長崎県遺跡地図』に現在の名称「諫早農業高校遺跡」として登載、周知が図られる。		
平成 3(1991)	【期間】7.17～7.18(範囲確認調査)	【面積】 10㎡	【要因】管理棟改築工事
【遺構】なし	【遺物】弥生土器片65点、黒曜石・安山岩製石器12点、中・近世陶磁器片32点、鉄浮、ふいご羽口等		【備考】遺物は全て撹乱層からの出土
平成12(2000)	【期間】9.19～9.22(範囲確認調査)	【面積】 18㎡	【要因】草花温室改築実習地整備
【遺構】偽ピット2基	【遺物】貿易陶磁器片、土師質土器片		【備考】中世の包含層あり
平成14(2002)	【期間】2.4～2.8(範囲確認調査)	【面積】 19㎡	【要因】草花温室改築実習地整備
【遺構】なし	【遺物】弥生土器片、中世陶磁器片		【備考】局所的に中世の包含層あり
平成17(2005)	【期間】1.13(工事立会)	【面積】 18㎡	【要因】運動場排水改良事業
【遺構】溝状遺構1条	【遺物】		【備考】溝状遺構は幅1.5m・深さ0.4mで時期不明
平成27(2015)	【期間】10.26～10.30(範囲確認調査)	【面積】 10㎡	【要因】野菜温室改築工事
【遺構】ピット10基	【遺物】コンテナ1箱分(石器約20点、土器・陶磁器約350点)弥生土器片多数、黒曜石製石器剥片、土師質土器片、擂鉢片等陶器		【備考】
平成29(2017)	【期間】5.8～6.9(本調査)	【面積】 200㎡	【要因】草花管理室・収納室改築工事
【遺構】遺構総数約240基(甕棺墓1基・土器埋設ピット2基・焼土坑3基・掘立柱建物跡1棟・火葬土坑1基・土坑3基・ピット多数)	【遺物】弥生土器片多数、黒曜石剥片多数、須恵器片、土師質土器片多数、貿易陶磁器片少数		【備考】緑釉細片1点、瓦質火鉢片、掛仏

（３）平成 27 年度諫早農業高校野菜温室改築計画

平成 27 年 10 月、翌年度に計画されていた野菜温室改築工事に係る諫早農業高校遺跡の取り扱いについて、県建築課、教育環境整備課、諫早農業高校事務局と県学芸文化課の間で協議がなされた。工事対象範囲は弥生時代の墳墓を含む集落跡や中世城館跡の可能性があり、遺跡の詳しい内容を把握するために範囲確認調査を実施することとなった。

２．範囲確認調査

（１）調査期間と面積

期間：　平成 27 年 10 月 26 日～平成 27 年 10 月 30 日

面積：　10 ㎡

（２）調査体制

所長	山本忠敬
総務課長	小島克孝
調査課長	川道　寛
調査課　主任文化財保護主事	松元一浩
調査課　文化財調査員	前田加美

（３）調査内容

① 調査方法

新築建物の予定範囲に改築前の建物やビニールハウスがあったため、改築前の建物基礎部分への接触やバックホウの導線を考慮し、予定範囲に接する位置に 2m × 2.5m のトレンチを 2 箇所設定した。過年度の範囲確認調査では表土及び撹乱層の厚いことが分かっており、バックホウによる表土掘削を行ったのち、その下の土層について人力による遺構検出等の作業を行った。

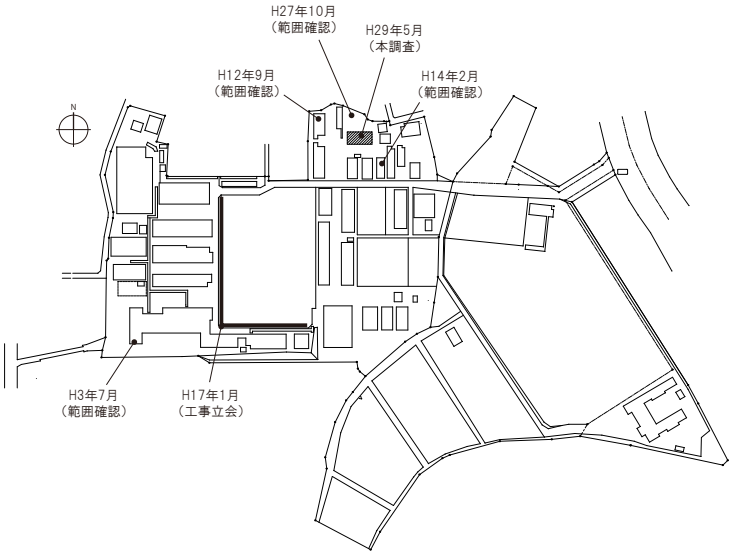


図 5　過年度の調査箇所位置図（S=1/6,000）

② 層序

1 層　黄褐色砂質土。しまりは弱い。2cm 程の角礫を多量に含む。現表土。客土。

2 層　暗褐色粘質土。しまりはある。礫・遺物等は含まない。客土。

3 層　暗褐色土。現代遺物を含む造成土。1 ～ 3 層の最大層厚 0.8m。

4 上層　暗褐色粘質土(Hue10YR3/4)。しまりはある。2 ～ 6cm 大の円礫を少量含む。炭が少量混じる。遺物は中・近世の陶磁器と弥生土器の小片を多く含む。

4 下層　暗褐色粘質土（Hue10YR2/3）。しまりはやや強い。2 ～ 10cm の円礫を 2 割程度含む。遺物は弥生土器片を含む。

5 層　褐色粘質土（Hue10YR4/4）。しまりは強い。2 ～ 20cm 大の礫を 5 割程度含む。岩盤の風化層か。遺物は含まない。

③ 遺構

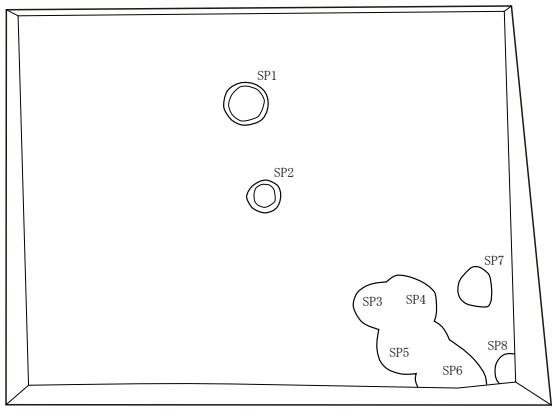
4 下層検出面において、TP 1 でピット 8 基、TP2 でピット 2 基が検出された。うち TP1 のピット 1 基からは、弥生時代後期の肥前型器台片が出土した。

④ 遺物

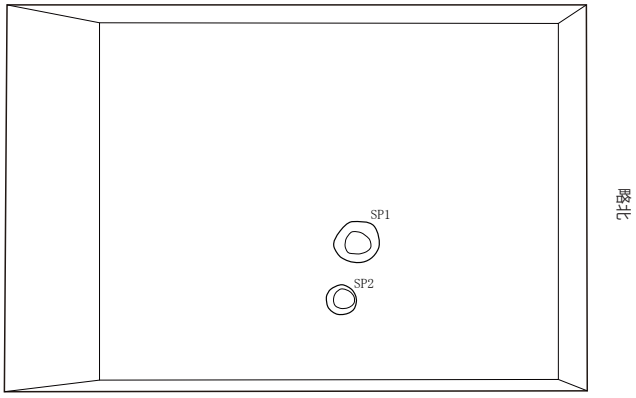
コンテナ 1 箱分（石器約 20 点、土器・陶磁器約 350 点）の遺物が出土した。内訳は弥生土器片多数、黒曜石製石器剥片、中世の土師質土器片、擂鉢等であり、弥生土器片は中期土器がほとんどである。

⑤ 処置

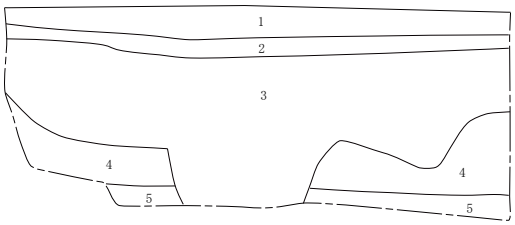
調査結果から工事による遺構や遺物包含層等の埋蔵文化財への影響があると判断され、取り扱いに関する協議が必要となった。

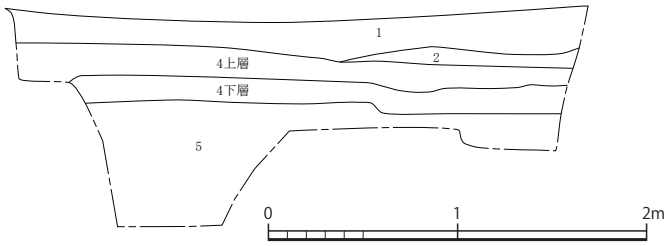


TP1



TP2





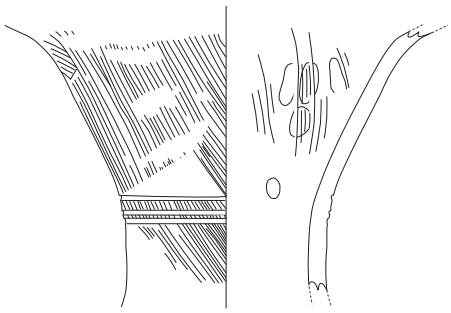


図 6　トレンチ土層断面図（S=1/40）及び出土土器実測図（1 ／ 4）

Ⅲ．調査の概要

１．調査期間と面積

期間：　平成 29 年 5 月 8 日（月）～平成 29 年 6 月 9 日（金）

面積：　200 ㎡

２．調査体制

所長	岩永正弘
総務課長	田川正明
調査課長	川道　寛
調査課　主任文化財保護主事	松元一浩
調査課　文化財保護主事	宮木貴史
調査課　文化財調査員	千原和己

３．発掘調査の流れ

（１）工事事業計画

平成 27 年度の範囲確認調査の結果を受け本調査の期間として 5 週間が見込まれた。当初は平成 28 年度の事業計画であったが熊本震災の影響もあり平成 29 年度事業として再始動となった。平成 29 年 3 月に工事委託業務が始まり関係機関の間で協議が行われた。その中で、埋蔵文化財調査は 4 月の解体工事終了後の 5 月 8 日から 6 月 9 日にかけて行い、調査後すぐに新築工事に着工することが決定した。

（２）発掘調査の流れ

新築建物の計画範囲全体 170 ㎡を対象に発掘調査を行い、検出した掘立柱建物跡の広がりを確認するため調査区北辺を 30 ㎡ほど拡張した。表土をバックホウにより掘削したのち、調査区北東隅にトレンチを掘削して層位を把握した。発掘作業員 22 名による遺構検出・遺構調査・遺物包含層掘削作業と並行して図化・写真撮影等の記録作業を行った。

４．層序と地形

（１）基本層序

1 層　淡黄色砂質土（2.5Y8/4）　しまりは強い。粘性は弱い。層中位に 2cm 程の角礫からなるバラス層を挟む。水捌けが頗る良い。層厚は 0.3 m程度。現表土（客土）。

2 層　褐灰色極細砂質シルト土（10YR5/1 ～ 4/1）　しまりはやや強い。粘性はやや強い。層厚は 0 ～ 0.2 m。造成土。

3 層　暗灰黄色～オリーブ褐色砂質土（2.5Y4/2 ～ 4/4）　しまりはやや弱い。粘性はやや弱い。ガラスやレンガが混じる。層厚は 0.1 ～ 0.3 m。明治期の造成土。明治 39 年の学校用地造成によるものと考えられる。

4 層　黒褐色～暗褐色細砂質シルト土（10YR2/3 ～ 3/3）　しまりはやや強い。粘性はやや強い。

5cm 長未満の礫を 1%未満含む。1cm 長未満の炭化物・焼土粒を 3%未満含む。弥生時代中期及び中世を主とした土器片を多く含み、4 層下位から 5 層上位にかけて弥生時代中期の単純層となる。4 層上位は部分的に大ぶりの土器片集中部があるものの全体的には小片が混在する土層であり、原位置を保つ遺物はほとんどないと考えられる。弥生時代中期より後、特に中世における営為により撹乱を受けている可能性が高い。中世の遺構は 4 層削平面で検出されている。層厚は 0.2 ～ 0.5 mで平均 0.3 m程度。範囲確認調査時の 4 上層。

5 層　褐色粗砂質シルト土 (Hue10YR4/4)　しまりは強い。粘性は強い。5cm 長未満の礫を 3%含む。層下部ほど礫が多い。4 層との層界は漸移的で 5 層上位 15cm ほどは弥生土器小片を含む。5 層中位以下では遺物は出土していない。層厚は 0.2 ～ 0.5 mで平均 0.4 m程度。調査区の西側では 6 層を含め明治期の削平を受けており削平面に 1 ～ 3 層の造成土が載っている。範囲確認調査時の 4 下層。

6 層　黄褐色礫質土 (Hue2.5Y5/4)　しまりは非常に強い。粘性は弱い。15cm 長未満の円礫を 4 割ほど含み遺物は認められない。沖積層。範囲確認調査時の 5 層。

（2）旧地形の推定

近代・現代の造成面である 1 ～ 4 層間の各層界は明瞭でおよそ水平をなしているが、4 ～ 6 層の層界はわずかなから西高東低・南高北低となっており、およそ南西から北東に下る緩斜面の地形を呈している。5 層上面の標高は 5m 前後である。第 I 章で述べた船越丘陵の先端部にあたり、陸化以前は半造川河口にほど近い地点であったと推定される。

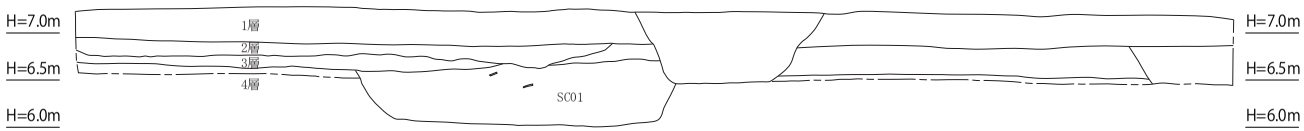
5．調査の概要

検出した遺構総数は約 240 基で、内訳は掘立柱建物跡 1 棟・土坑 3 基・焼土坑 3 基・土坑墓 1 基・甕棺墓 1 基・ピット多数からなる（図 8)。ほか、調査区北東半で複数の土器集中箇所（一部は甕棺）を検出した。なお、遺物包含層の 4 層は、上位 0.2 mほどは全面的に掘削、それより下位については調査区北辺・東辺に幅 1 mのトレンチを掘削したのみとなった。ただ、調査区全面にわたるピットの掘削調査において、ピットが同様の土器集中箇所を切る箇所は認められず、甕棺やその他の埋葬遺構が密集するような墓域である可能性は低いと考えられる。

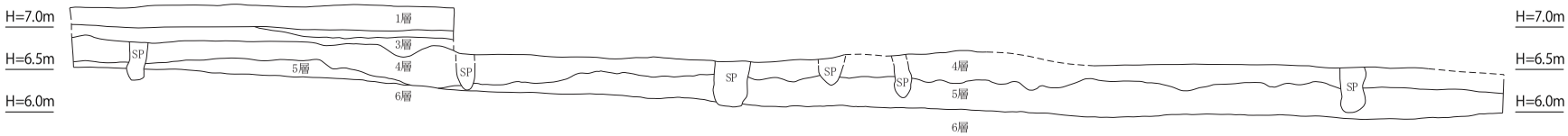
遺物では、客土の1･2層ではほとんど遺物は見られなかったが、明治時代の造成土である3層中では、近代遺物に混じって弥生時代中期の土器小片を主とした遺物が出土した。遺物包含層である 4 層～ 5 層上位で弥生時代中期土器の小片が多量に出土、大ぶりの中期土器片が集中する箇所もあった。同層ではまた、石製垂飾 1 点や多量の黒曜石剥片、須恵器片、中世を主とした土師質土器小片が出土した。また、掘立柱建物跡の柱穴を含むピットで炭化材が出土しており、建物やピット群の年代を推定するため放射性炭素年代測定を行った（第Ⅷ章)。

6．整理作業・報告書作成

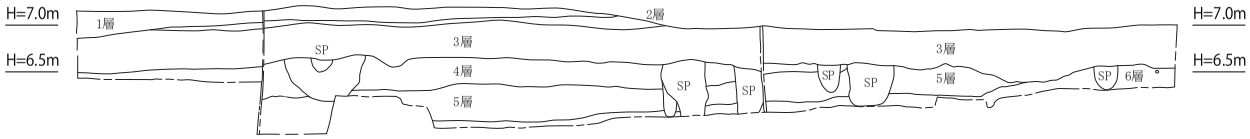
平成 29　年 7 月から翌年 2 月にかけて、埋蔵文化財センターにおいて報告書作成に向けた整理作業を実施した。遺物の整理は、水洗、接合、実測、ID 番号付与、デジタルトレースの流れで行った。金属製品の保存処理は、透過エックス線撮影後にメスを用いて錆取りを行いベンゾトリアゾール溶液に数秒浸した。処理完了後はチャック袋に収納しデシケータ内で保管している。



拡張部北壁



北壁



東壁

1 層　淡黄色砂質土（2.5Y8/4）　現表土（客土）。
2 層　褐灰色極細砂質シルト土（10YR5/1 ～ 4/1）　造成土。
3 層　暗灰黄色～オリーブ褐色砂質土（2.5Y4/2 ～ 4/4）　明治期の造成土。
4 層　黒褐色～暗褐色細砂質シルト土（10YR2/3 ～ 3/3）　弥生時代中期・中世の包含層。
5 層　褐色粗砂質シルト土（Hue10YR4/4）　層上位 15cm ほどは弥生時代中期の包含層。
6 層　黄褐色礫質土（Hue2.5Y5/4）　無遺物層。沖積層。

図 7　調査区土層断面図（S=1/80）

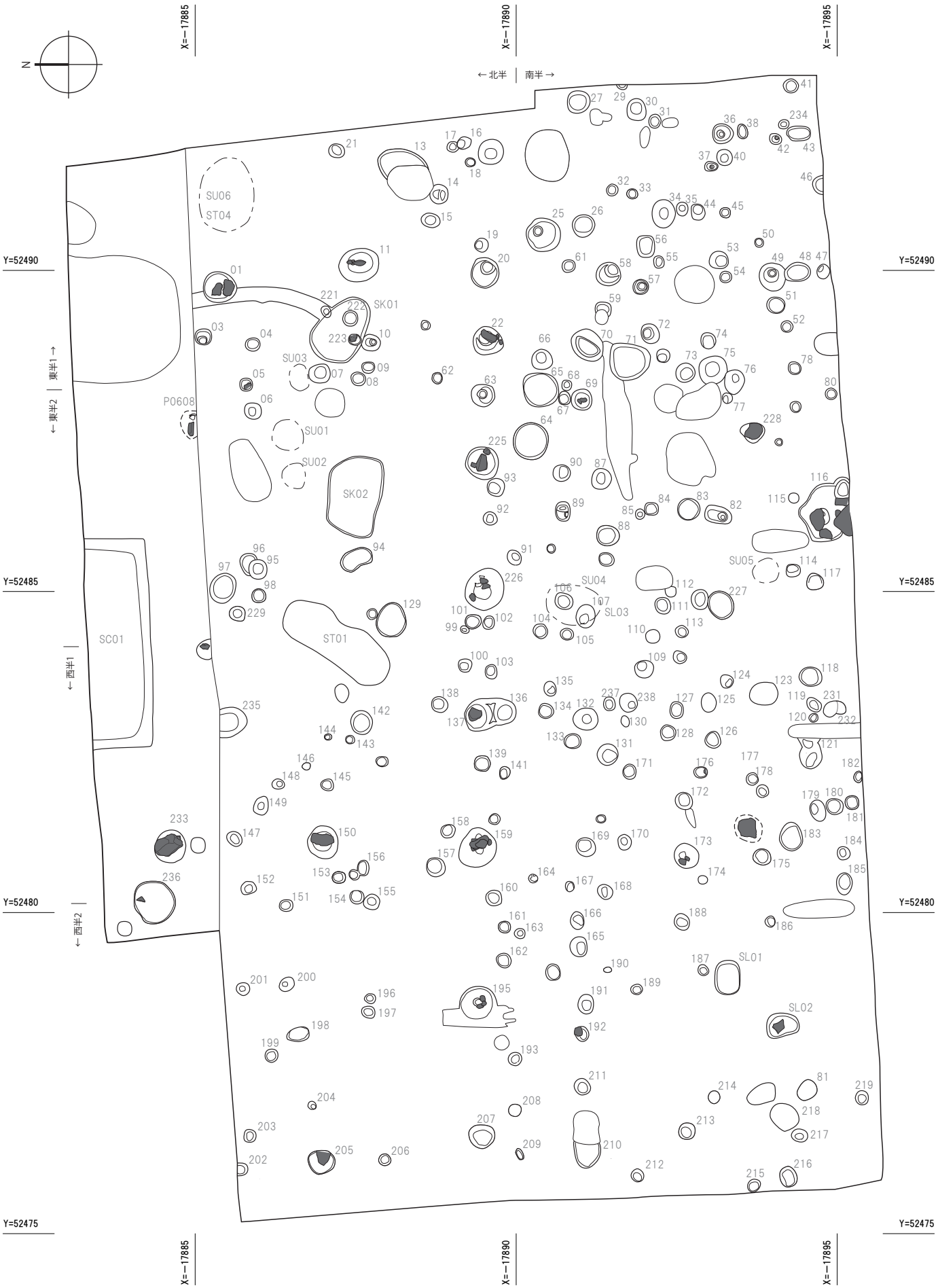


図 8　遺構分布図（S=1/80）

遺構番号のうちピットの SP は省略している。撹乱（近現代の土坑等）は灰色の上端ラインのみで示す。

Ⅳ．縄文・弥生時代の遺構と遺物

１．遺構

（１）甕棺墓（ＳＴ）

① ＳＴ０４

調査区北東隅に位置し、調査区の北辺と東辺にそれぞれ掘削したトレンチの狭間にあたる。先に 4 層中で検出していた土器片・石器剥片の集中する SU06 を掘り下げ中に甕の胴部片がまとまって出土した。また、径 5mm 程の焼土粒が多く、骨片とみられる白色粒が少量混じっていた。周辺を精査したところ掘方の平面プランが検出された。一部の土器片は ST04 よりやや離れた SU01 と接合する。

掘方の平面プランは略円形が二つ重なるような形態で切り合いは認められない。全長 121cm・幅 75cm 以上・深さ 0.4 mを測る。掘方の東側から中央にかけて、004 と 009 の壷が検出された。どちらも口縁部は出土していない。009 の破片は散乱しており、一部は 001 と 003 の間に挟まれていた。また掘方の西側で、001 と 003 の甕がともに口縁を西に向けた横位で潰れたような状態で検出された。

いずれも日常土器であり、棺としての原位置にあるとは見なし難く、甕棺墓であるかも即断できないような出土状況であった。埋土を全て回収し乾燥フルイ法で微細遺物の抽出を行ったところ、18mm 以下の人骨とみられる骨片を少量検出した。よって、日常土器を転用した甕棺墓が後世の損壊を受けたものと判断した。

平面プランからみて、2 基の甕棺が同時に接するように構築されたと考えられる。おそらくは、東側の墓坑に 004・009 の壷が合わせ口棺として、西側の墓坑に 001・003 の甕が合わせ口棺として埋置されていたのであろう。いずれもサイズからみて小児用と考えられる。

損壊時期の推定は難しいが一つの見立てとして中世が挙げられる。4 層上半では多量の弥生土器片とともに中世の土師質土器片が多く出土している。この時期に後述の掘立柱建物跡 SB03 等を含めた土地利用・改変があり、弥生時代の遺構群が損壊を受けた可能性がある。ただ、ST04 内には弥生時代中期後葉以降の土器は出土しておらず、損壊は中世以前の甕棺墓構築に近しい時期である可能性も否定できない。

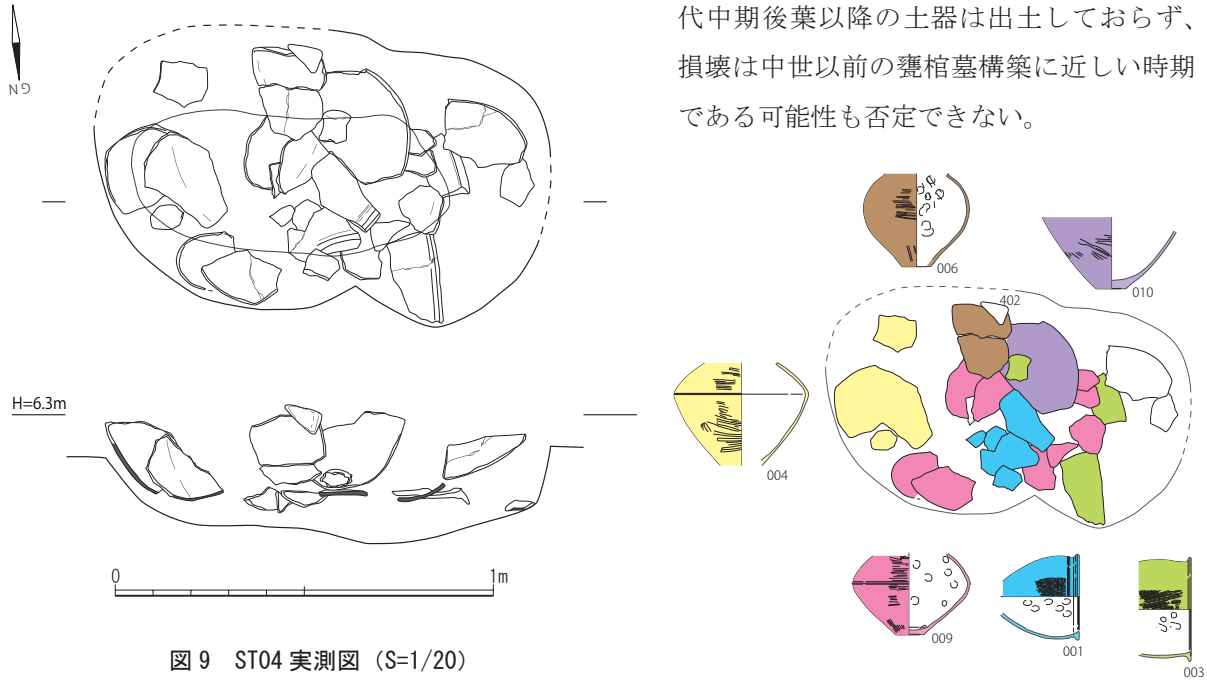


図 9　ST04 実測図（S=1/20）

004 は城ノ越式から須玖Ⅰ式古段階に相当する壷で、底部から頸部までの復元高は 30cm 程度・胴部最大径は推定で 34cm 程度の中型である。底部付近までは残るが底部はない。全体的に風化しているものの部分的に横方向のヘラミガキが認められる。特徴的な点として胴部最大径に施された沈線がある。突帯を貼り付ける際のアタリとも考えられたが、突帯の剥離した痕跡は全く認められない。類例は見受けられないが、装飾として施されたものであろう。

009 も城ノ越式から須玖Ⅰ式古段階の壷で、底部から頸部までの高さは 22cm 程度・胴部最大径 31cm の中型である。明瞭な穿孔痕跡とは認めづらいが底部を 1 ／ 2 ほど残し直径 8cm ほどの欠損がある。全体的に横方向のヘラミガキが施されており若干の光沢感がある。004 よりも寸詰まりで底部から胴部の開きが大きい。

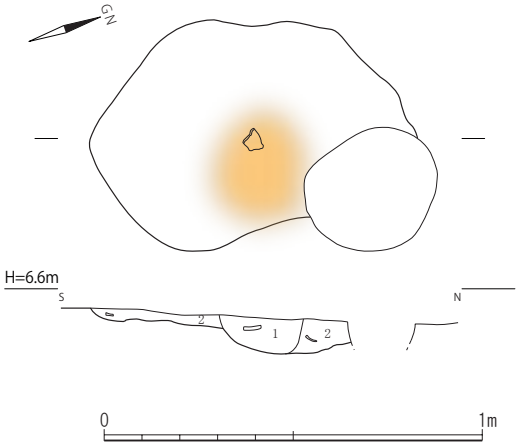
001 は城ノ越式の甕で、口縁部径は 22.7cm・胴部最大径は 21.8cm の小型である。口縁部の内外面に頸部と口縁部を合わせ作りした際の接合痕が線状に残る。003 は須玖Ⅰ式古段階の甕で、口縁部径は 27.4cm・胴部最大径は 26.0cm の中型である。その他、006 の壷胴部片や 010 の壷底部・005 の甕底部等が出土している。

石器では、墓坑内で台石及び敲石（401・412 及び 402）並びに安山岩及び黒曜石製の石器剥片（403・404 及び 407・408）が出土している。石器剥片は上位の SU06 や後述の SU01 ～ 03 の内部でも目立って出土しており、なかには 409 の石鏃もある。台石・敲石は甕棺墓に伴っていた可能性もあるが、いずれにしろこれら石器は弥生時代中期の生活層に伴っていた可能性があり当該期の石器として注意を要する。

（２）焼土を伴う遺構（ＳＬ）

① ＳＬ０３

調査区南半に位置する。4 層掘削中に検出された。土器片集中部 SU04 と重なっており SP107 に切られる。SL01・02 と比べ平面プランは不明瞭で、長軸約 86cm・幅約 60cm の範囲に焼土が疎らに混じる。中央付近には掘り込み状の焼土密集部が認められ、径 24cm・深さ 8cm を測る。埋土中では少量の弥生土器片が出土しており、弥生時代中期の SU04 と重なることからも同時期の遺構と考えられる。



SL03 土層
1 層　被熱強い。焼土が多く混じる。土器片を含む。
2 層　焼土粒の混じり硬化している。土器片が混じる。

図 10　SL03 実測図（S=1/20）

（３）土器集中（ＳＵ）

弥生時代中期の土器片の集中する箇所が認められた。土器片は多量ではないがそれぞれ数個体分があったものとみられる。

① ＳＵ０１～０３

調査区北東半に位置し、4 層削平面で検出された。SU01 の 016・022 甕口縁部は甕棺墓 ST04 と接合する。先述したように ST04 とは 3m ほど離れており、ST04 が損壊された際に動かされたものと考えられる。甕や壷の口縁部片があり、城ノ越式から須玖Ⅰ式におさまる。

② ＳＵ０４

調査区中央に位置し、4 層中で検出された。SP106・107 に切られる。城ノ越式や須玖Ⅰ式にあたる甕の破片 028・029 等が出土した。台石状の 435 は明確な使用痕は認められないが、土器片や焼土を伴う SL03 との関連性を窺わせる出土状況であった。竪穴建物跡の炉跡等の可能性も考えられたが、柱穴として認定できるようなピットは確認できなかった。

２．遺物

（１）石器

１～４は石鏃である。１は幅広の凹基で基部の抉りは明瞭で、薄手の精巧な作りである。脚部の丸まる特徴があり、早期の押型文土器に伴うものであろう。淀姫系黒曜石を素材とする。２は浅い凹基の石鏃で先端と左脚部を折損する。素材となる石材は安山岩である。３も浅い凹基の石鏃で、先端と右脚部を折損する。胴下半部より先端部が薄く作られている。石材は白い粒子を僅かに含む良質の黒曜石である。４は幅広で浅い凹基の石鏃である。先端と両脚部を折損する。安山岩を素材とするが薄手に仕上げられているものの調整はやや粗い。５は分厚い剥片を素材とする両面加工石器である。一部に礫面を残し、上下両端から剥離が入っており楔形石器の可能性もある。良質の漆黒色の腰岳系黒曜石を素材とする。６は厚手の剥片の上端を打面として両面に細石刃様の剥離を施した石器である。一部に平坦な礫面を残す。素材は漆黒色の良質な腰岳系黒曜石である。７は厚手の剥片を素材とする両面に加工を施した石器である。正面には求心的な調整剥離が認められるが刃部を意識したものではない。背面にはヒンジフラクチャー状の大きな剥離が看取される。背面には一部に礫面を残す。安山岩を素材とする。８は横剥ぎの幅広の剥片を使用した石器で背面に使用痕のある剥片である。安山岩を素材とする。９は礫面を打面とする縦長の剥片である。側縁の一部に使用痕のある剥片で、良質の腰岳系黒曜石を素材とする。10 は打点部を折損するやや幅広の縦長剥片である。器体下部に調整加工を施した加工痕のある剥片である。ガラスの質感に乏しい針尾Ⅲ群の黒曜石を素材とする。11 は分厚い縦長の剥片である。腰岳系黒曜石を素材とする。12 は礫面を打点とする横長剥片である。安山岩を素材とする。13 は幅広の不定形な分厚な剥片である。礫面を一部に残している。素材は良質なガラス質に富む腰岳系黒曜石である。14 は 13 と同様の不定形剥片である。白い粒子を若干含む 13 よりは質的に劣る腰岳系黒曜石を素材とする。15 は礫面を大きく残した不定形剥片である。良質の腰岳系黒曜石を素材とする。16 は亜角礫の原石を素材とする石核様の石器である。石質は白粒子を多く含むもので劣悪である。素材の原産地は腰岳系である。17 は安山岩を素材とする石核様の石器である。側面の一つが礫面で構成される。二重パティナが看取される。

黒曜石の原産地について、１・６・９～ 11・13・14・16 は蛍光Ｘ線分析による判別に基づいている。

401・402 は甕棺墓 ST04 の内部で出土した台石・敲石である。401 は扁平な流紋岩の板石で直角三角形状を呈し最長部で 12cm 弱を測る。短辺寄りの両面に径 2cm 程度の敲打による窪みが認められる。また直角部の両面は被熱により赤化している。402 はやや厚みのある流紋岩で直角三角形状を呈し最長部で 12.4cm を測る。直角部から短辺にかけて打ち欠きが認められる。412 は砂岩の板石で径 5cm 程度の敲打痕がある。

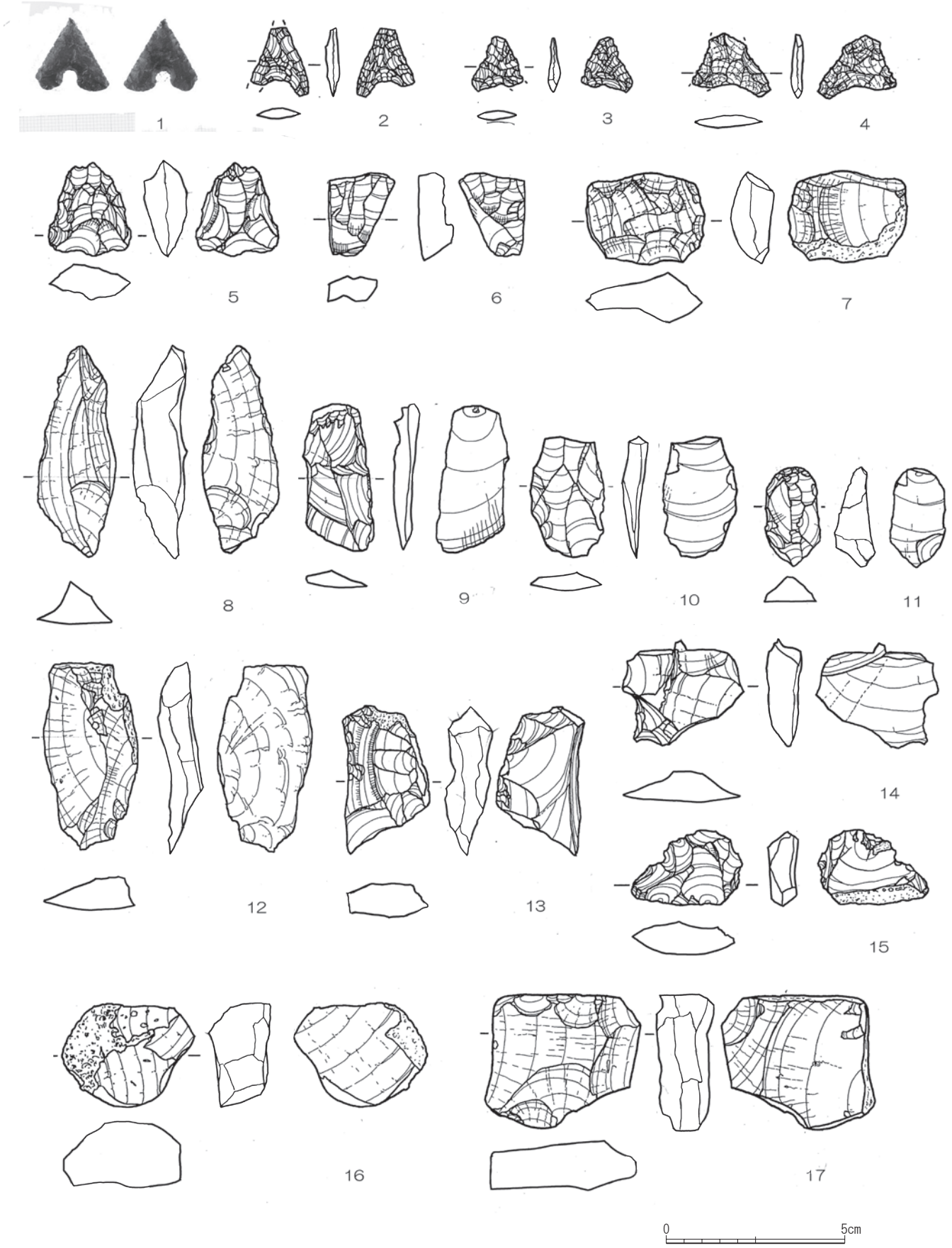


図 11　遺物実測図［縄文・弥生時代石器］(S=2/3)

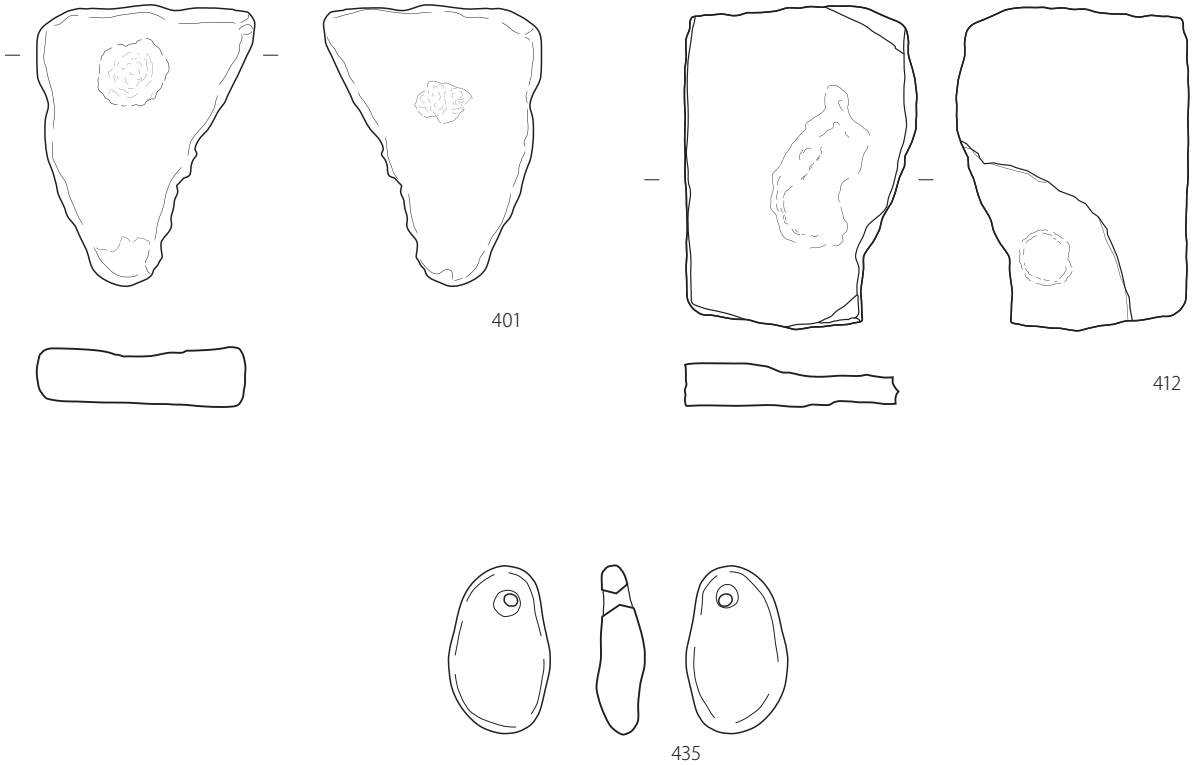


図 12　遺物実測図［弥生時代石器］（S=1/3、435 のみ S=1/1）

（2）土器

包含層や後世の遺構等で多くの弥生土器片が出土している。弥生時代中期初頭から中期後葉にかけての時期におさまる。いずれも北部九州系であり目立った地域色は認められない。城ノ越式から須玖Ⅱ式古段階に相当し、量的には須玖Ⅰ式古段階にピークがある。

型式的な傾向が掴みやすい甕をみると、口縁部が断面三角形あるいは台形を呈するもの（032･033･187 等）や、底部が厚い脚台状を呈し中空ないし上底状であるもの（216･210・067・056 等）が城ノ越式に相当する。口縁部の外面突出がやや伸びはじめるもの（052・211･044･190 等）が須玖Ⅰ式古段階に、口縁部の外面突出が大きく伸び、内面突出が目立ちはじめるもの（194･189 等）が須玖Ⅰ式新段階にあたる。口縁部が下向きになり内面突出が大きいもの（191･193･224 等）が須玖Ⅱ式古段階にあたる。底部では平底のものがあるが（069･066）、須玖Ⅰ式古段階に特徴的な若干上底状を呈するものが多い。ほかに少数の広口壷や鋤先口縁壷の口縁部（023･053･202･230 等）・高坏坏部（275）も出土している。

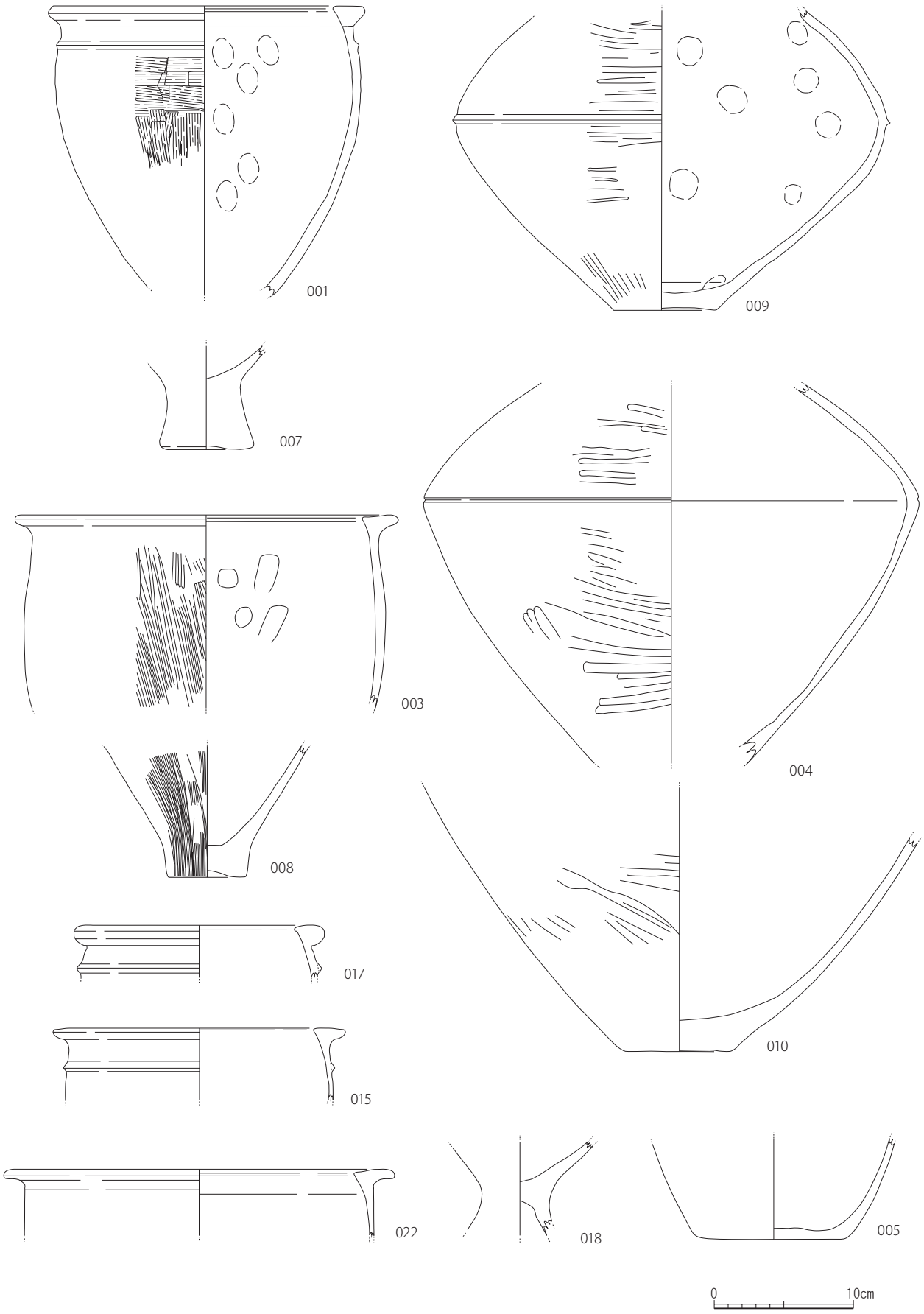


図 13　ST04 出土土器実測図（S=1/4）

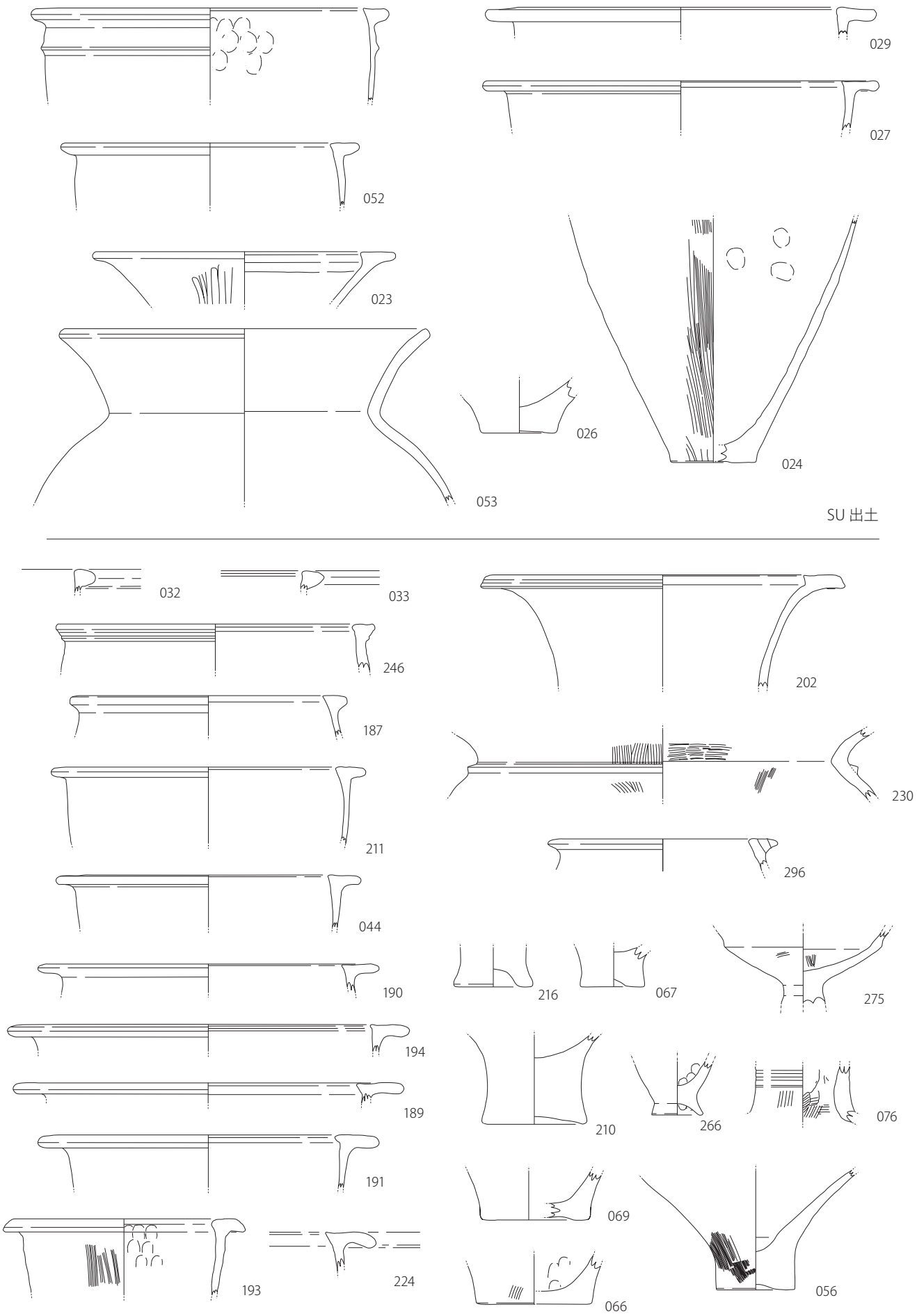


図 14　遺構・包含層出土遺物実測図［弥生土器］（S=1/4）

Ⅴ．古墳時代の遺構と遺物

１．遺構

（１）土器埋設ピット

① ＳＰ８１

調査区南西隅に位置しSP218と近接する。6層削平面で検出された。ピットの平面プランは円形で、長軸34cm・短軸31cm・深さ9cmを測る。ピットの内部では甕の破片と礫が出土しており、甕口縁部片045はSP218出土の破片と接合した。後世の削平時に損壊を受けたとみられ、甕の残存は悪く完形に復元できない。甕045は口縁部が直線的で端部は丸みを帯び、内面にヨコハケが施されている。

② ＳＰ２１８

調査区南西隅に位置しSP81と近接する。6層削平面で検出された。ピットの平面プランは円形で、長軸45cm・短軸41cm・深さ36cmを測る。ピットの内部には壷049が倒置状態で据え置かれたような状態で出土している。SP81と同様に後世の削平時に損壊したとみられ、胴部以下の一部は残るが完形に復元できない。この壷以外に甕口縁部片046～048が出土している。

壷049の口縁部は直線的で上部がわずかに内湾する。端部内側がやや摘み上げられているが面取りはなされず丸みを帯びる。口縁部外面はタテハケ後ヨコナデ､胴部外面は短めのタテハケが施される。甕046～047も壷049と同様で、口縁部が直立するか僅かに内湾し端部は丸みを帯びる。いずれも器壁は厚手で胎土は粗い。肥前地域編年の2B期（TK73併行期）前後にあたる（小松2002)。遺構の年代として古墳時代中期前葉が考えられる。SP81・218ともに遺構の残存状態が悪いこともあり性格は不明だが、何らかを意図した土器埋設である可能性を想定しておく。

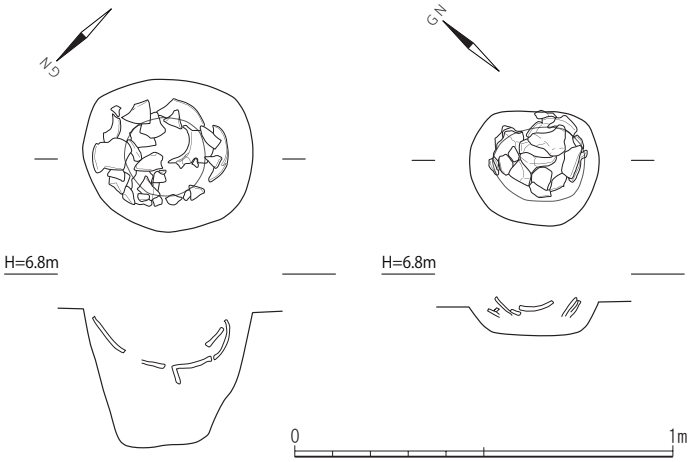


図15　SP81･218実測図（S=1/20）

２．遺物

（１）土師器

① 古式土師器（庄内系碗形高坏、庄内・布留系甕）

166は庄内系碗形高坏で脚裾部は短く口縁部径をやや上回る程度である。126は土師器甕の口縁部片で上端部がやや内湾し端部内側は面取りされやや摘み上げられている。頸部内面は稜をなさず若干の面をもつ。172は土師器甕の口縁部片で端部は面取りされず内側にやや摘み上げられ外側に若干肥厚する。甕はいずれも肩部以下が残存せず、全体的な形態や調整等の技法が不明であるため系統には言及できないが、いずれも古墳時代初頭～前期中葉の所産と考えられる。

② 土師器

167・168の甕は口縁部から肩部にかけての破片で口縁部は大きく外反し肩部はなで肩状を呈する。口縁端部は丸みを帯びるが167は薄く仕上げられている。肥前地域編年の4(B)期（TK47併行期）頃

にあたり（小松 2002）、古墳時代中期後葉の所産と考えられる。205 は口縁部を欠く小型の壷である。体部は球形を呈するが器壁は厚手で器面の凹凸が目立つ。体部外面には長いタテハケが施される。

（２）須恵器

297 は坏蓋片で天井部と口縁端部を欠く。推定口径が 16cm 程度で天井部には回転ケズリは施されない。口縁部との境は明瞭な稜をなす。TK43 型式前後にあたり古墳時代後期後葉の所産と考えられる。285 は坏身受部の小片で返りはごく短い。TK43 ～ 209 型式にあたり古墳時代後期後葉の所産と考えられる。

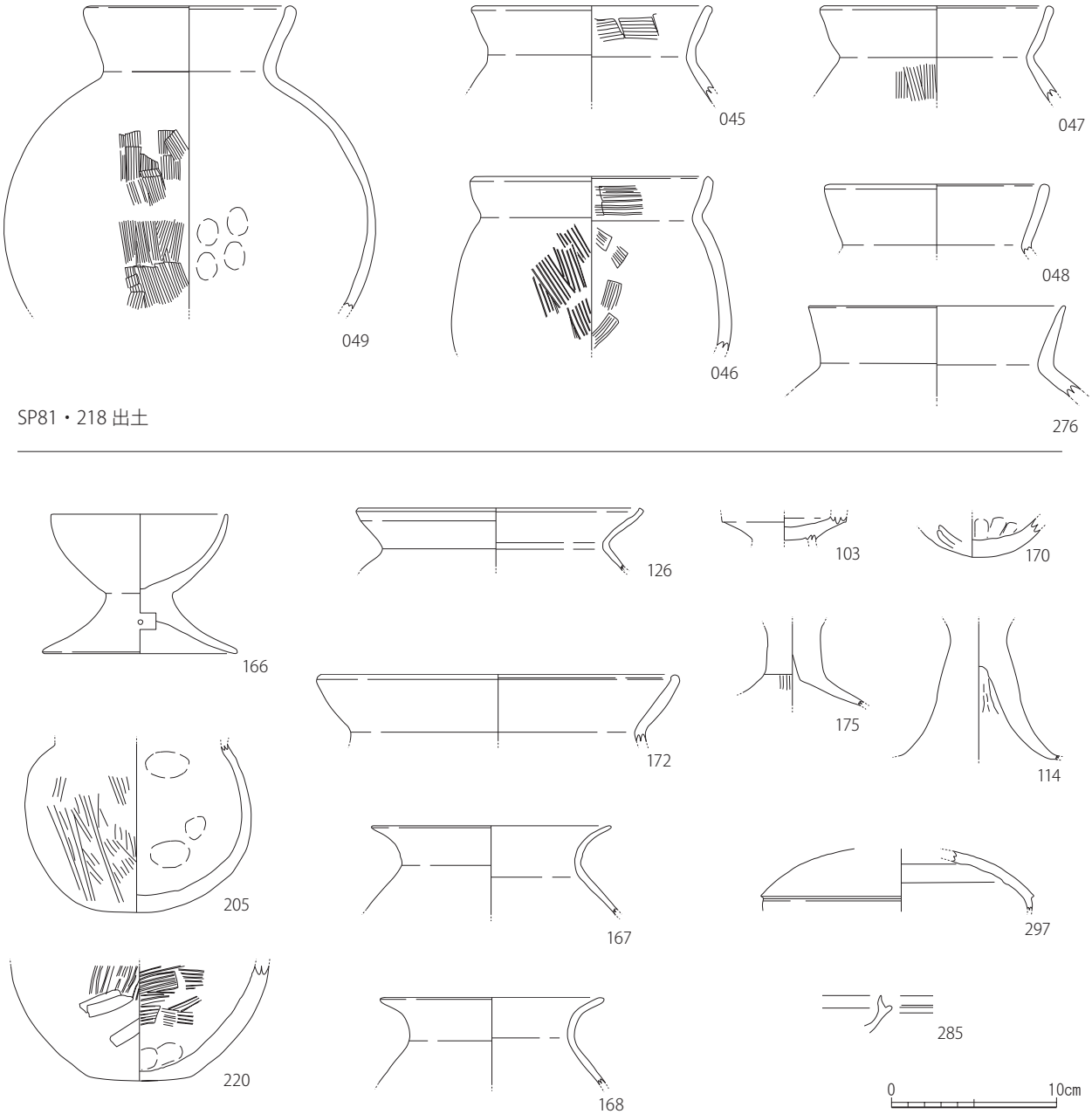


図 16　SP81･218 及び遺構・包含層出土遺物実測図［古墳時代土器］（S=1/4）

Ⅵ. 古代・中世の遺構と遺物

１．遺構

（１）掘立柱建物跡（ＳＢ）

① ＳＢ０３掘立柱建物跡

位置・規模　調査区北半に位置する。4 層削平面で検出された。確認できた建物規模は東西 5 間×南北 3 間以上、南辺の柱穴列は東西を指向し、母屋部分の南辺に庇がつく構造と考えられる。柱穴は平面プランが円形で直径 47 ～ 62cm・深さ 43 ～ 140cm を測る。ほとんどの柱穴は直径で 50 ～ 60cm・深さで 40 ～ 80cm に納まる。調査区外の北側に続くようであったため調査範囲を拡張したが、建物跡の北辺は確認できず、南北規模は 3 間以上の可能性が高い。

柱穴間の芯々距離は、母屋部分では SP233 - SP150 - SP159 間で 239・245cm、SP01 - SP11 - SP20 間で 227・198cm、SP159 - SP137 - SP226 - SP225（ - SP22） 間 で 203・195・204（・202）cm、SP225 - SP63 - SP22 - SP20 間で 108・90・110cm を測る。柱間寸法として 110cm 程度・200cm 程度・240cm 程度の 3 種が採られたと考えられる。

柱穴概観　各柱穴の法量・柱痕跡の有無・埋土類型等の基本的な観察事項は一覧に記載することとし（表 3 ～ 6)、ここでは礎板石及び柱穴や柱痕跡内での遺物等の様相について述べる。

多くの柱穴において 30 ～ 40cm 長で平坦面を持つ割石や亜円礫が出土しており、柱を支える礎板石として用いられていたものと考えられる。これら礎板石の上面は SP01・150 などでは水平をなすが、SP11・159・137・225・22 などでは斜めや縦方向に傾いている。またその出土位置は、柱穴の底面ではなく底面近くや中位以上にあるものが多い。一方で、SP22・225 など柱穴底面に柱当たり痕跡の認められるものが幾つかあった。SP22 では柱穴底面には深さ 10cm ほどの柱当たりが認められながら、その 40cm ほど上で礎板石が出土している。斜めや縦方向の礎板石がみられることや、柱当たりを有しながらその上部に礎板石状の礫がみられることを考え合わせると、礎板石を用いない立柱工法から礎板石を用いる工法での建て替えや、最終的な柱抜き取りが行われた可能性が想定できる。

柱穴内での遺物では弥生土器小片が比較的多く出土している。次いで、建物の時期となる 15 世紀を中心とした中世の土師質土器片多数（099･125 等）と土師器･須恵器、瓦質土器（105)･陶器（109)･天目碗(101)等の破片や掛仏とみられる銅製仏像が出土した。これらの中で､SP225 出土の陶器片(109)は SP226 出土の破片と接合している。

（２）ピット群（ＳＰ）

調査区全体で多数のピットを検出しており分布密度は高いが、建物跡と認定できるような配置は認め難い。例えば南西半 1 グリッドに位置する SP26・56・53・49 や SP36・34・58・66 は列をなしており、芯々距離はそれぞれ 120 ～ 160cm、90 ～ 110cm 程度と同程度の間隔で並ぶ。しかし周辺のピット群をみても建物跡として認定できるような配置は認められない。それでも、柱痕跡や柱当たり・礎板石状の礫を有するなど、柱穴としての特徴を持つピットが幾らか認められており、何らかの構造物を構成していたものと考えられる。例えば､SP03 は柱痕跡を有し内部で黒色土器底部片 127 が出土している。周辺では黒色土器 213 が礫とともに出土している。これらは SB03 より以前の古代の柱穴である可能性がある。

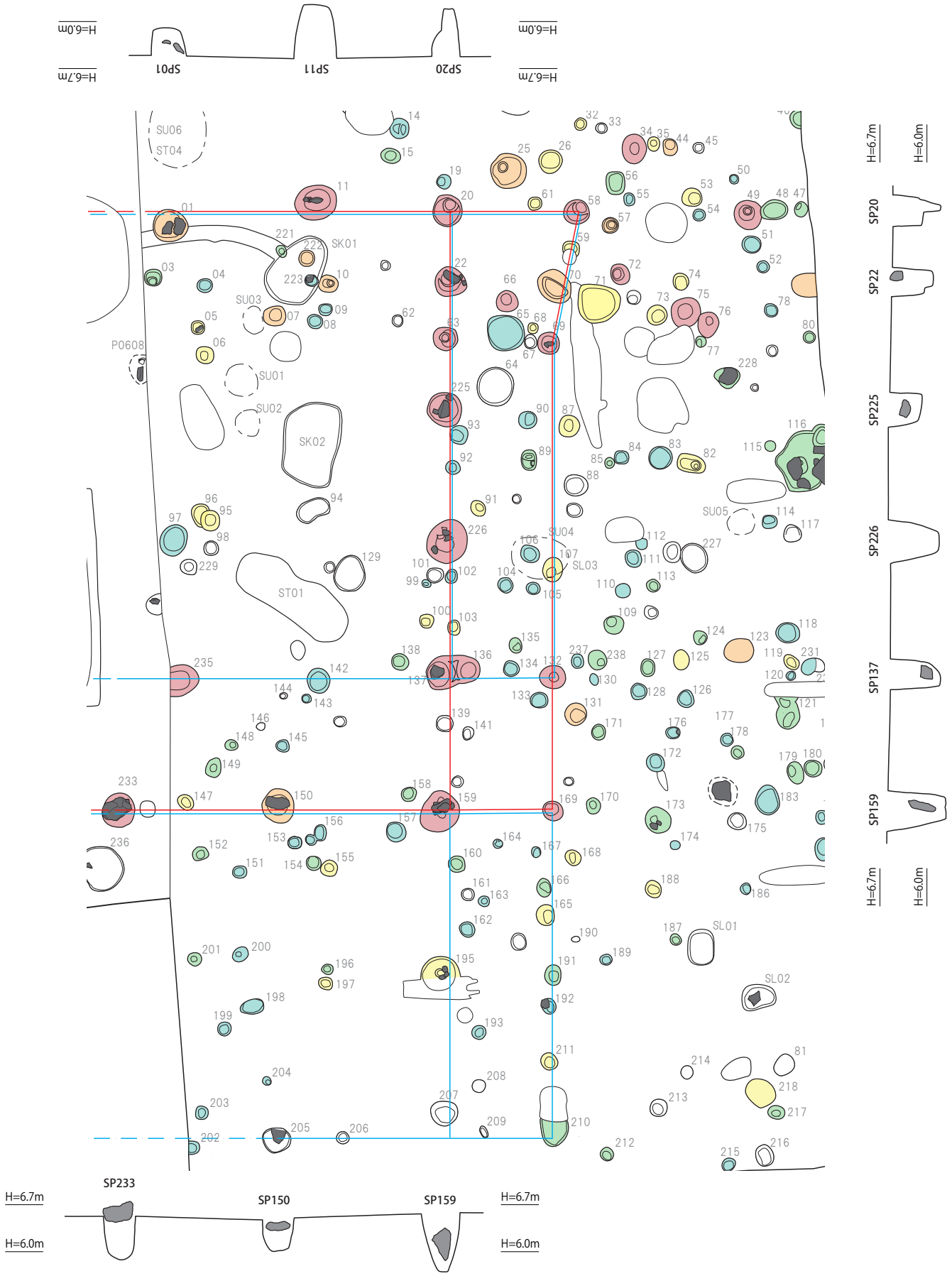


図 17　SB03 実測図（S=1/80）

遺構番号のうちピットの SP は省略してある。また、ピットは深さ毎に色分けしている。○：10cm 未満、●：10cm ～ 20cm 未満、●：20cm ～ 30cm 未満、●：30cm ～ 40cm 未満、●：40cm ～ 50cm 未満、●：50cm 以上。
朱線：SB03、青線：建物認定の別案

また、SP142・235・207、根固め石状の礫を含むSP195、礎盤石状の礫を有するSP205などは、SB03の東西軸や柱穴配置に近しい位置にあり、SB03を構成する柱穴であった可能性もある。一方で建物跡の見方を変えると、SB03の西辺はSP136・142・235のラインで終わり、SP233・150・159・195・207・205ほかで構成される別の建物跡を抽出する案も否定できない。

ほか、SP36･58･66では柱痕跡及び柱当たりが確認されており柱穴であった可能性が高い。SP117では柱穴内全体に炭化物が検出されている。

（３）葬送関連遺構（ＳＴ）

① ＳＴ０１

調査区北半に位置しSP224に切られる。4層削平面で検出された。平面プランは楕円形で長軸187cm・幅71cm・深さ11cmを測り、中央付近が幅58cmとやや狭まる。掘方の四隅に20～30cm長の円礫・亜円礫がほぼ水平に配置されており、それぞれの礫の上面レベルは4～5cmの差がある。これら「棺台石」とみられる礫は[i]、特に南側2点の外側（掘方の立ち上がり側）がやや赤化しており被熱した可能性が考えられる。

遺物は埋土中で弥生土器・土師器・土師質土器の細片が多く出土した。土師質土器は細片のみで詳細な時期は特定できないが中世のものであろう。また、木棺墓等の埋葬遺構である可能性を考え、埋土を回収し乾燥フルイ法で微細遺物の抽出を行った。その結果、5mm程度の骨片1点を検出したが、木棺が存在した傍証となる釘等は検出できなかった。そのほか検出面では、ST01を切るSP224内で須恵器短頸壺片057が1点出土している。

遺構の性格として類似遺構をみると、埋葬施設である「木棺墓・土坑墓」、あるいは埋葬施設ではなく火葬を行う施設である「火葬土坑」とされている。副葬品や木棺の釘等が検出される場合は墓とみなされることが多い。一方、火葬土坑の場合は土坑底面・壁面の被熱痕跡や底面に残る焼土・灰・炭化物等が傍証となるものの、これらが認められない場合もあり火葬土坑の必要条件とはなっていない（中間1991、狭川1999など）。

ST01では微細な骨片を検出したものの埋葬遺構あるいは火葬土坑である確証は得られていない。被熱痕跡のある棺台石から考えて「火葬土坑」である可能性を挙げておく。

（４）土坑（ＳＫ）

① ＳＫ０２

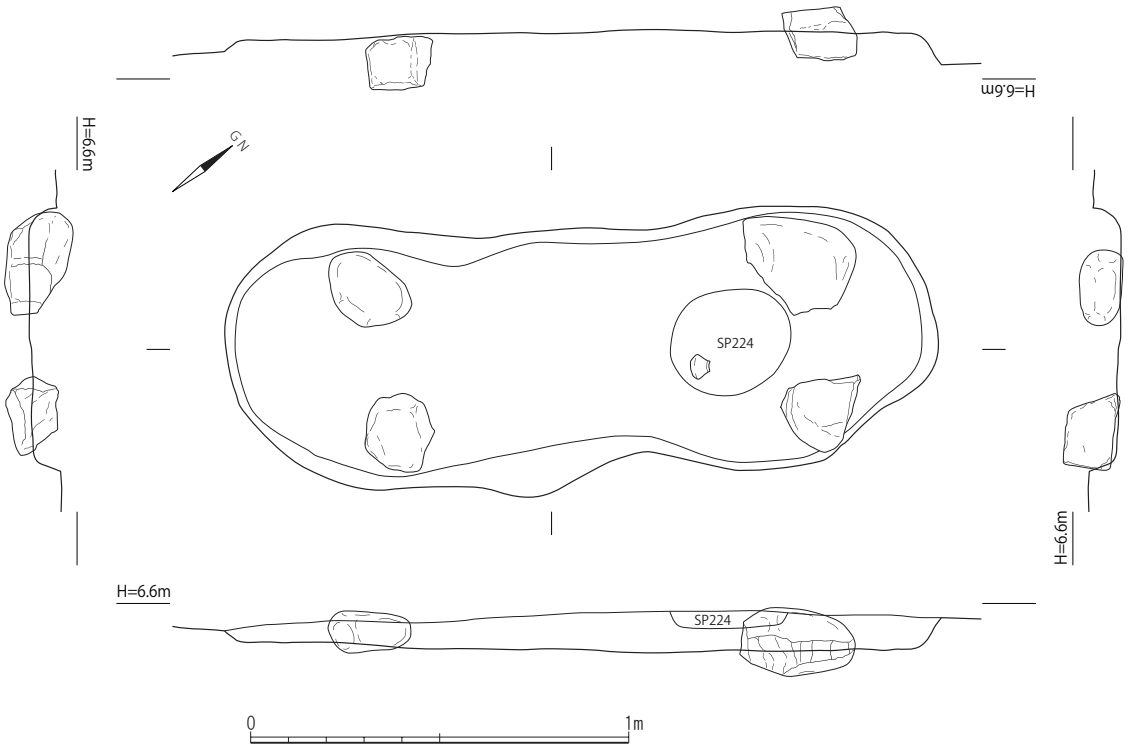
調査区北東半に位置しST01に近接する。4層削平面で検出された。平面プランは隅丸の不定台形で長軸125cm・幅86cm・深さ13cmを測る。底面付近で炭化物・焼土を多く含む層を検出した。層厚は数cm程度で底面に広く堆積していた。その下の掘方底面は被熱によりやや赤化・硬化している。埋土中の遺物では、土師質土器の小片や多量の弥生土器・土師器・土師質土器の細片が出土した。また、5mm程度の骨片1点が出土しており、ST01と同様の葬送関連遺構である可能性がある。

② ＳＫ０３（旧SP116）

調査区南端に位置する。4層削平面で検出された。調査区境界の外側に伸びているため詳細な形状や規模は不明だが、確認できた部分での平面プランは不定形で長さ90cm以上・深さ22cmを測る。また埋土には炭化物・焼土が多く確認でき、炭化材1点について放射性炭素年代測定を行ったところ、

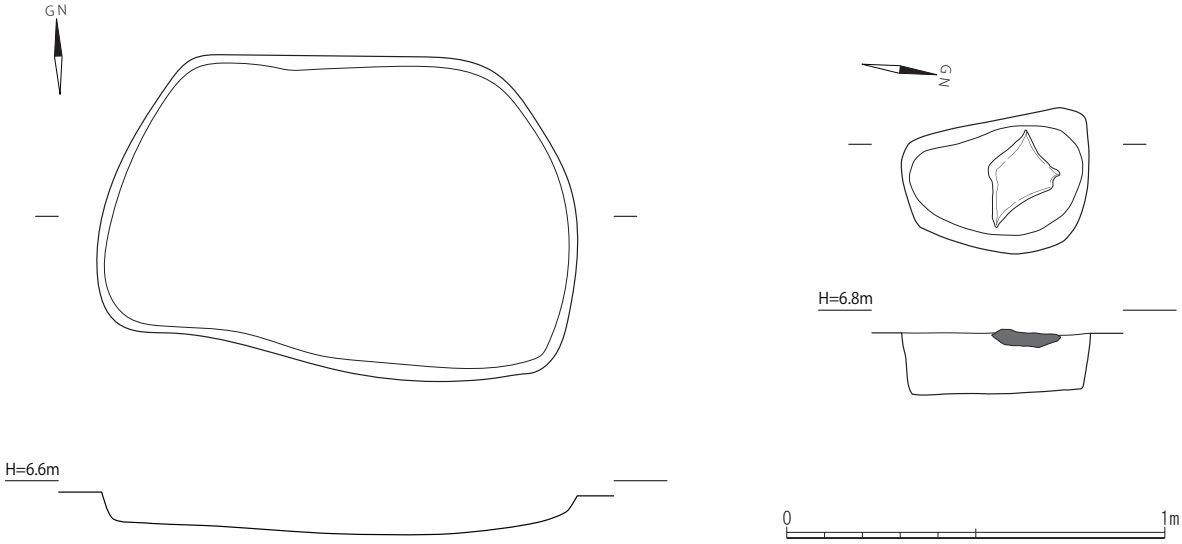
---

i　秀島貞康氏のご教示による。



ST01
黒褐色極細砂質シルト土（10YR2/3）しまりやや強い。粘性やや強い。土器細片を 1%未満含む。

図 18　ST01 実測図（S=1/20）



SK02
暗褐色極細砂質シルト土（10YR3/4）しまりやや強い。粘性やや強い。土器細片を 1%未満含む。径 5 ～ 20mm の小礫を 1%未満含む。底面付近は炭化物が多い。

SL02
黒褐色細粒砂（7.5YR3/2）しまり強い。3cm 未満の焼土ブロックを 1 割未満含む。炭化物粒を含む。

図 19　SK02・SL02 実測図（S=1/20）

13 世紀後半から 14 世紀後半の暦年代が推定されている（分析は第Ⅷ章）。埋土中の遺物は、土師質土器で糸切底の 142 のほか、少量の弥生土器・土師器・土師質土器の小片が出土した。142 の年代として 14 世紀後葉から 15 世紀前葉が考えられ、放射性炭素年代測定の結果と合致する。埋土中から底面付近で 40・60cm 長の比較的扁平な円礫 2 点を検出している。うち 1 点の下からは別のピットが検出された。遺構の全体が把握できないこともあり性格は不明である。

（５）焼土を伴う遺構（ＳＬ）

① ＳＬ０２

調査区南西半に位置する。6 層削平面で検出された。平面プランは楕円形で長軸 50cm・幅 36cm・深さ 14cm を測る。掘方の北寄りに 20cm 長の扁平な角礫が検出された。掘方底面より 12cm ほど浮いているが、平坦に据えられたような状態にある。掘方の南側縁辺に焼土ブロックが多く認められた。埋土中では弥生土器・土師器・土師質土器の小片が比較的多く出土している。

２．遺物

（１）黒色土器

古代の黒色土器椀の底部片が 5 点出土している。内訳は内黒(A 類)が 2 点、両黒(B 類)が 3 点である。いずれも底部のみで体部から口縁部を欠いている。高台径は小さく低く、断面形は台形状で面を持ち貼付部に抉りの入るタイプ（内黒 127・両黒 300）と、舌状の丸みを帯びるタイプ（内黒 213）、直立し内外面に抉りの入るタイプ（両黒 203）がある。細かな型式は不明であるが、高台径の縮小や 203 を除きミガキの施されない粗雑化の傾向が読み取れることから、10 世紀後半～ 11 世紀の年代を想定しておく。

（２）土師質土器

SB03 やその他のピット、包含層でも多量の土師質土器片が出土しているが、完形品はなくほとんどが小片である。小皿に着目すると、器高の低いタイプ（301・083 等）もある中で、体部が立ち気味のタイプ（080・081･082 等）や器高の高いタイプ（111・142・183 等）が多く見受けられる。いずれも底径は小さく、年代的には 14 世紀以降、中でも 15 世紀前後が中心と考えられる。

（３）瓦質土器

掘立柱建物跡 SB03 - SP226 では瓦質土器の火鉢口縁部片が出土している（105）。口縁は直立し端部外面がやや突出する。外面の端部から 2cm ほど下には 1 条の三角突帯が廻っている。突出と突帯の間には菊花文のスタンプが施される。スタンプは陽刻で長三角形の花弁 16 枚を直径 1.3cm の円形に配置し表現されている。突帯の下には薬研彫り状の縦条線が刻まれている。破片のため器形や文様の全容は不明だが、豊前地域の深鉢形 C 類に相当し、15･16 世紀の所産と考えられる。ほか、SP26 で釜の胴部片 130 が出土し SP70 出土のものと接合している。

（４）その他

ST01 を切る SP224 では須恵器の短頸壺片 057 や坏蓋の小片 078 も出土している。057 は 8 世紀代、078 は 8 世紀後葉の所産と考えられる。また、小片ではあるが緑釉陶器片 245 が 4 層で出土している。ほかに貿易陶磁器の小片があり、鎬の緩くなる鎬蓮弁青磁椀Ⅲ類の口縁小片 122 や雷文帯のある 244 等が出土している。それぞれ 13 世紀中葉から 14 世紀初頭、15 世紀前半頃の所産である。

SB03 - SP01 の検出面縁辺では銅製仏像が出土した。台座を含めた高さは 4.49cm・幅 1.48cm・厚み 0.58cm・重量 10.1g を測る。全体的に摩滅したようで詳細な形状は不明だが、フォルムや両裾に垂らした天衣等からみて観音菩薩立像と考えられる。顔や両腕にあたる部分の形状は不明だが腕は欠損した可能性がある。両脚は真ん中を縦に窪ませて表現されており、楕円状の隙間を空け天衣が垂れている。背面は全体的に平坦で首と肩の境を窪ませてある程度だが、左肩から右腰にかけて条帛を表現したとおぼしき 3 条の沈線が施されている。表には右肩から左腰に向け 2 条の沈線が見えるが条帛とは対応しない。摩滅や欠損により本来の造形は判然としないが、背面の平坦さからみて懸仏の一部であったと考えられる。

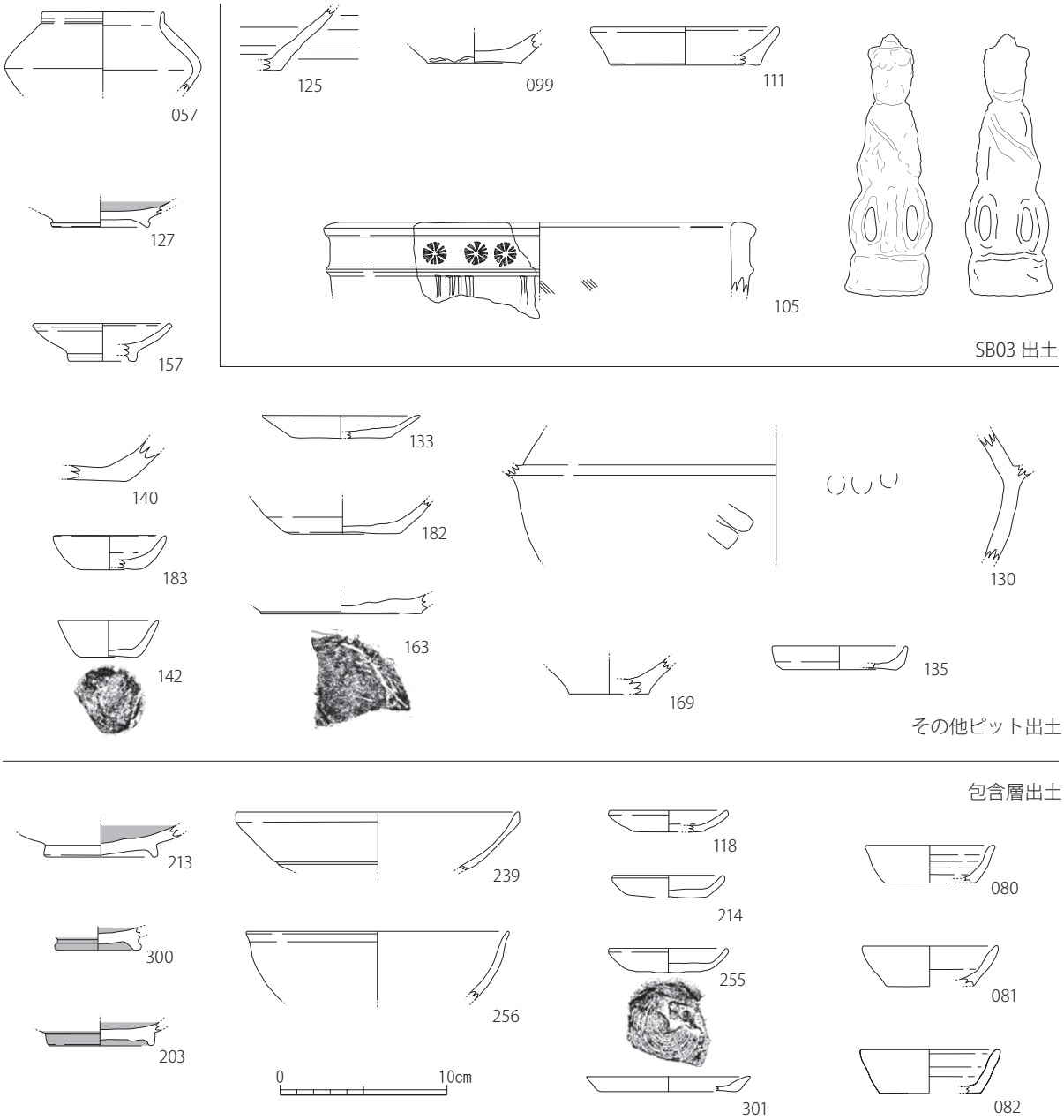


図 20　SB03・その他ピット・遺構・包含層出土遺物実測図［古代・中世土器］(S=1/4)

Ⅷ．その他の遺構と遺物

１．遺構

（１）土坑

① ＳＫ０１

調査区北東半に位置し、先述の中世土坑 SK02 に近接する。平面プランは卵状の楕円形で長軸 112cm・最大幅 76cm・深さ 6cm を測る。溝状の遺構に連なっており切り合い関係は認められなかった。溝状の部分は SP221 を切っている。遺物の出土はなく遺構の年代や性格は不明である。近接する遺構の中世 ST01 や SK02 との関連が想起される。

② ＳＣ０１

調査区北側の拡張部際に位置し調査区外に続く。4 層削平面で検出された。南辺の平面形は隅部が直角をなす方形で 3.2m を測る。埋土は 3 層よりも砂質・灰色味が強い。底面は全体的に平坦で下端は丸みを帯びる。出土遺物は土師質土器 118 や貿易陶磁器 122・123 などの小片が混じるが、近世以降の陶器片などが多い。当初は地下室坑等の遺構である可能性を想定していたが、底面の造作等は特に認められなかった。

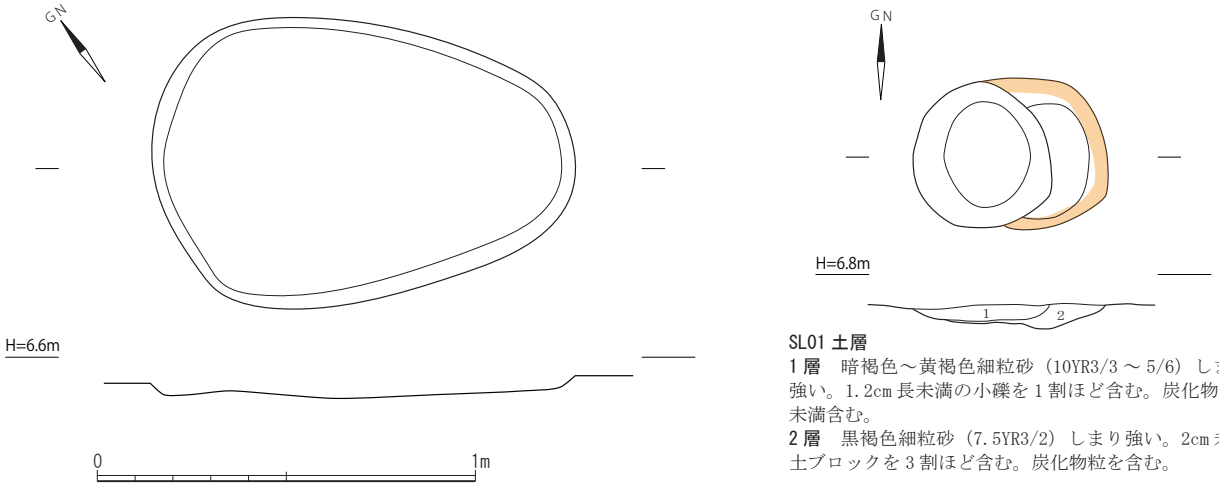
③ 廃棄土坑

その他、明治期の学校用地造成時のゴミ穴とみられる廃棄土坑もあった。土坑の壁面沿いには礫が多く、埋土中では植木鉢や印判手・二彩手の陶磁器等が出土した（277・279・280 等）。

（２）焼土を伴う遺構（ＳＬ）

① ＳＬ０１

調査区南西半に位置し SL02 や土器埋設ピット SP81・218 と近接する。6 層削平面で検出された。平面略円形・径 70cm 程度のピット 2 基が切り合う格好となっており、深さは 8 ～ 12cm を測る。切るピット SL01a の背面側に焼土が多く認められ、SL01b を切る側は 6 層由来の褐色土ブロックを含む土層となっている。切られる SL01b は背面側が被熱し顕著に赤化しており、検出面では焼土の輪郭として明



SL01 土層
1 層　暗褐色～黄褐色細粒砂（10YR3/3 ～ 5/6）しまりやや強い。1.2cm 長未満の小礫を 1 割ほど含む。炭化物粒を 1% 未満含む。
2 層　黒褐色細粒砂（7.5YR3/2）しまり強い。2cm 未満の焼土ブロックを 3 割ほど含む。炭化物粒を含む。

図 21　SK01・SL01 実測図（S=1/20）

瞭に認識できる。この輪郭状の焼土はSL02の検出状況と似る。どちらの埋土も焼土ブロック・炭化物粒を多く含み、底面は被熱により赤化している。焼土の分布からみて、浅いピットを燃焼部とし掻き出しを行うような使用方法が想起される。埋土中では少量の弥生土器・土師器小片が出土している。遺構の年代は推定しづらく、位置や遺物からは古墳時代が考えられるものの、焼土を伴う遺構として近接するSL02との関連が考えられ、中世の遺構である可能性を挙げておきたい。

2．遺物

SC01や包含層で近世以降とみられる遺物が出土している。弥生土器等の土器片の他、不明石器や火打石、土錘やキセル片等があった。

① 小型柱状片刃石斧か

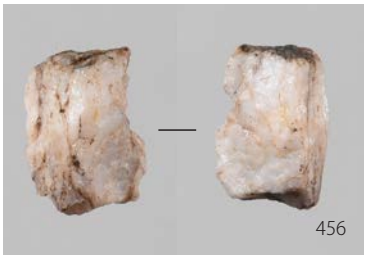
SC01で出土した481は粘板岩製で長さ1.9cm・幅0.9cmの方柱状を呈し、上面及び3側面は研磨されているが1側面は未研磨あるいは破断し、下面は折損したとみられる。弥生時代の小型柱状片刃石斧（ノミ形石斧）の欠損品とも考えたが器種は不明である。

② 火打石

SC01や包含層で火打石と思しき石英片が出土している（456･462･480等）。480は長さ2.9cmの方柱状を呈し2面に礫面を残す。長辺2辺の稜が丸く摩滅している。石材は乳白色で透明感はない。456は長さ2.2cmの三角柱状を呈し3辺とも摩滅している。480に比べ若干の透明感がある。その他、ST01でも1.5cm長の石英片が出土しており、縁辺は摩滅で丸みを帯びている。

③ 三島唐津

拡張区東半の廃棄土坑近くで武雄系の三島唐津皿が出土している（263）。口縁部は溝縁を呈し推定径は27.5cm・器高7.6cm・高台径10.5cmを測る。内面は4種の印花文による象嵌が施され、外面の体部から高台にかけては無釉である。17世紀前半の所産であろう。



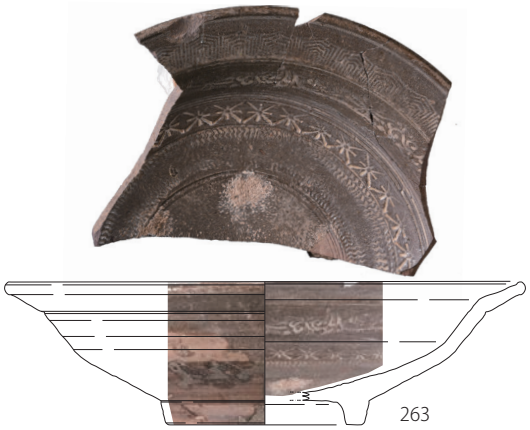


写真11　その他の遺物

表３　ピット一覧１

番号	グリッド	法量(cm)		柱穴属性				遺物	備考
		直径	深さ	埋土	柱痕	柱当	礎板石		
SP01	北東半1	47	43	B			●	弥生・土師器・土師質・銅製仏像	SB03構成ピット
SP11	北東半1	62	89	Ac(B)	●		●	弥生・土師質	SB03構成ピット
SP20	北東半1	48	71	A(Ab)		●	●	弥生・土師質	SB03構成ピット
SP22	北東半1	47	61	Ab		●	●		SB03構成ピット
SP63	北東半1	35	57	A(AB)	●	●		弥生・土師器・土師質・天目	SB03構成ピット
SP136	北西半1	40	62	B				弥生・土師質	SB03構成ピット
SP137	北西半1	55	74	A(Ab)	●	●	●	柱痕】内黒土器片　柱穴】土師質小皿片。弥生・土師質	SB03構成ピット
SP150	北西半1	51	49	A			●	弥生・土師質	SB03構成ピット
SP159	北西半1	62	83	B(A)	●		●		SB03構成ピット
SP225	北東半2	56	52	A(Ab)	●	●	●	弥生・土師質多量	SB03構成ピット
SP226	北東半2	61	73	A(Ab)	●	●		瓦質火鉢・陶器。弥生・土師質多量	SB03構成ピット
SP233	拡張西半	55	65				●	弥生・土師器・土師質多量	SB03構成ピット
SP26	南東半1	34	32	A				弥生・土師質・瓦質羽釜・青磁	SB03構成ピット(庇部) 瓦質羽釜はSP70と接合
SP69	南東半1	32	61	A(Ab)	●			弥生・土師質	SB03構成ピット(庇部)
SP70	南東半1	55	51	Ab				弥生・土師器・瓦質羽釜・土師質	SB03構成ピット(庇部) 瓦質羽釜はSP26と接合
SP107	南東半2	37	31		●			弥生・土師器	SB03構成ピット(庇部)
SP132	南西半1	39	51	B				弥生・土師器・土師質	SB03構成ピット(庇部)
SP165	南西半2	31	33	A				弥生・土師質・瓦質	SB03構成ピット(庇部)
SP166	南西半2	28	26	A				弥生・土師器	SB03構成ピット(庇部)
SP169	南西半1	31	54	B				弥生・土師器	SB03構成ピット(庇部)
SP02	北東半1		0					土師質	
SP03	北東半1	25	24	A		●		弥生・土師器・須恵・両黒・内黒	
SP04	北東半1	23	14	A				弥生・土師質	
SP05	北東半1	20	36	A				弥生	
SP06	北東半2	26	37	A				弥生・土師質	
SP07	北東半1	33	48	A				弥生	
SP08	北東半1	22	14	B				弥生	
SP09	北東半1	20	19	B				弥生	
SP10	北東半1	30	46	A				弥生・土師質	
SP12	北東半1		0	D				弥生	
SP13	北東半1	80	5	Ac				弥生・土師器・土師質	
SP14	北東半1	31	19	A				弥生・土師質	
SP15	北東半1	28	25	A				弥生	
SP16	北東半1	24	40	C					
SP17	北東半1	16	22	A				弥生・土師質	
SP18	北東半1	15	12	A					
SP19	北東半1	21	19	A				土師質	
SP21	北東半1	24	30	A					
SP23	南東半1	80	10					弥生・土師質	
SP24	南東半1		0	B				弥生・土師質	
SP25	南東半1	52	42	Ac(B)		●			
SP27	南東半1	36	33	A				弥生・土師質	
SP28	南東半1		0	A					
SP29	南東半1	16	17	A				弥生・土師質	
SP30	南東半1	35	44	A(B)	●			弥生	
SP31	南東半1	22	12	B				弥生・土師質	

【埋土類型】
A類　黒褐色a(7.5YR2/2)。しまりやや強い。粘性強い。土器細片等の褐色粒を含む。4層由来の土がベースで4層に比べ色調が暗い。
　　5層由来のこなれた褐色土ブロック(径1cm未満)を含む。
B類　暗褐色細砂質シルト土(10YR3/3～3/4)。しまりやや強い～強い。粘性やや弱い。B類に近い。
C類　褐色(10YR4/4)。近現代の撹乱。
D類　黄褐色粘土質シルト土(2.5Y5/～6/)。粘性強い～非常に強い。
b類　ブロック土が多く混じる。
c類　炭化物が多く混じる。

表 4　ピット一覧 2

番号	グリッド	法量(cm)		柱穴属性				遺物	備考
		直径	深さ	埋土	柱痕	柱当	礎板石		
SP32	南東半1	19	30	A					
SP33	南東半1	16	9	A					
SP34	南東半1	44	56	B				弥生・土師器・土師質	
SP35	南東半1	21	33	A				弥生・土師質	
SP36	南東半1	32	49	A	●				
SP37	南東半1		0	C					
SP38	南東半1	22	5					弥生・土師質・瓦質	
SP39	南東半1	22	26	A					
SP40	南東半1	25	26	A				弥生・土師質	
SP41	南東半1	22	27	A					
SP42	南東半1	19	11	C					
SP43	南東半1	37	20	A				土師質	
SP44	南東半1	25	40	A				弥生	
SP45	南東半1	17	9	B					
SP46	南東半1	30	28	A				弥生	
SP47	南東半1	23	26	B					
SP48	南東半1	42	20	A				弥生・土師質	
SP49	南東半1	43	72	B	●	●		弥生	
SP50	南東半1	15	16	A				弥生・土師質・両	
SP51	南東半1	28	11	Ac					
SP52	南東半1	18	15	A				弥生・土師器・土師質	
SP53	南東半1	30	34	A				弥生・土師質	
SP54	南東半1	19	18	B					
SP55	南東半1	20	13	A				土師質	
SP56	南東半1	25	29	A				弥生・土師質	
SP57	南東半1	23	45	A				弥生・土師質	
SP58	南東半1	37	85	A	●	●			
SP59	南東半1	26	33						
SP60	南東半1		0						
SP61	南東半1	19	38	A				弥生・土師質	
SP62	北東半1	18	3					弥生	
SP64	南東半2	56	8	D				弥生・土師質	
SP65	南東半1	54	11	B				弥生	
SP66	南東半1	33	59	Ac(Ab)	●			弥生・土師質	
SP67	南東半2	22	8	A					
SP68	南東半1	16	36	A				弥生・土師質	
SP71	南東半1	55	38	A				弥生・土師質	
SP72	南東半1	31	52	A		●		弥生・土師質	
SP73	南東半1	30	37	A				弥生・土師質	
SP74	南東半1	25	30	A				弥生・土師質	
SP75	南東半1	43	69	A				弥生・土師質	
SP76	南東半1	39	52	A(Ab)	●			弥生・土師質	
SP77	南東半2	16	23	A					
SP78	南東半1	20	13	A				弥生・土師質	
SP79	南東半1	37	44	B				弥生	
SP80	南東半1	18	29	A					
SP81	南西半2	34	9	A				土師器	
SP82	南東半2	41	31	A				弥生・土師質	
SP83	南東半2	34	18	A	●				
SP84	南東半2	22	12	A					
SP85	南東半2	16	25	A					
SP86			0						
SP87	南東半2	33	36	A				弥生・土師質	
SP88	南東半2	36	8	A				弥生	調査時SP88
SP89	南東半2	31	20	A				弥生	
SP90	南東半2	27	13	A				弥生・土師質	
SP91	北東半2	25	32	A					
SP92	北東半2	21	14	A				弥生・土師質	
SP93	北東半2	28	18	A				弥生・土師質	
SP94	北東半2	51	7	A				弥生・土師質	
SP95	北東半2	51	39	B				弥生・土師質	
SP96	北東半2	35	34	A				弥生・土師質	
SP97	北東半2	47	17	A				弥生	
SP98	北東半2	22	6	A					
SP99	北東半2	19	12	A				弥生	
SP100	北西半1	20	30	A				弥生	
SP101	北東半2	26	7	A				弥生・土師器	
SP102	北東半2	22	12	A				弥生・土師質	

表 5　ピット一覧 3

番号	グリッド	法量(cm)		柱穴属性				遺物	備考
		直径	深さ	埋土	柱痕	柱当	礎板石		
SP103	北西半1	23	31	A					
SP104	南東半2	23	18	A				弥生・土師質	
SP105	南東半2	18	19	A				弥生	
SP106	南東半2	27	16	A				弥生・土師質	
SP108	南東半2		0					弥生	
SP109	南西半1	27	26	A				弥生・須恵・土師質	
SP110	南東半2	21	13	A				弥生	
SP111	南東半2	26	12	A				弥生	
SP112	南東半2	16	13	A				弥生	
SP113	南東半2	19	28	A				弥生・土師質	
SP114	南東半2	23	18	A				弥生・土師器	
SP115	南東半2	15	27	A					
SP116	南東半2	91	27					弥生・土師質	
SP117	南東半2	26	8	A					
SP118	南西半1	36	15	B				土師質	
SP119	南西半1	26	32	B(A)				弥生	
SP120	南西半1	14	10	A				弥生	
SP121	南西半1	43	26	Ac				弥生・土師質	
SP122	南西半1		0						
SP123	南西半1	46	41	B	●			弥生・土師器・土師質	
SP124	南西半1	22	20	A				弥生・土師器	
SP125	南西半1	30	35	A					
SP126	南西半1	26	14	B				弥生・土師質	
SP127	南西半1	26	23	B				弥生・土師質	
SP128	南西半1	25	15	A				弥生・土師質	
SP129	北東半2	54	5	B	●			弥生・土師質	
SP130	南西半1	18	13	A					
SP131	南西半1	34	41	A(B)	●			弥生	
SP133	南西半1	26	19	A				弥生・土師質	
SP134	南西半1	24	13	A				弥生・土師質	
SP135	南西半1	23	29	A	●			弥生・土師質	
SP138	北西半1	25	23	B				弥生・土師質	
SP139	北西半1	24	9	A				弥生	
SP140	北西半1		0					弥生	
SP141	北西半1	20	9	A					
SP142	北西半1	36	18	A				弥生・土師質	
SP143	北西半1	13	12	A				弥生・内黒	
SP144	北西半1	10	9	A					
SP145	北西半1	20	16	B					
SP146	北西半1	11	7	A				弥生	
SP147	北西半1	25	33	A				弥生・土師質	
SP148	北西半1	19	26	A					
SP149	北西半1	30	27	A				弥生・土師質	
SP151	北西半1	21	13	A				弥生	
SP152	北西半1	34	27	A				弥生・土師質	
SP153	北西半1	18	15	A					
SP154	北西半1	20	22	A				弥生	
SP155	北西半1	24	32	A				弥生・土師質	
SP156	北西半1	17	13	B					
SP157	北西半1	30	19	B				弥生・須恵・土師質	
SP158	北西半1	20	20	D				弥生	
SP160	北西半1	24	29	A				弥生・土師質	
SP161	北西半2	19	9	A				弥生	
SP162	北西半2	22	15	B				弥生	
SP163	南西半2	16	16	A				弥生	
SP164	南西半1	13	15	A				弥生	
SP167	南西半1	16	12	A					
SP168	南西半1	23	34	A				弥生	
SP170	南西半1	25	24	A				弥生	
SP171	南西半1	23	24					土師質	
SP172	南西半1	28	11	A				弥生・土師質	
SP173	南西半1	38	27	A				弥生・土師質	
SP174	南西半1	15	13	A				弥生	
SP175	南西半1	25	9	A				弥生	
SP176	南西半1	21	12	B					
SP177	南西半1	19	13	A					
SP178	南西半1	20	20	A				弥生	
SP179	南西半1	34	22	B				土師器	

表 6　ピット一覧 4

番号	グリッド	法量(cm)		柱穴属性				遺物	備考
		直径	深さ	埋土	柱痕	柱当	礎板石		
SP180	南西半1	25	23	A				弥生・土師器・土師質	
SP181	南西半1	22	8	A					
SP182	南西半1	18	6	A					
SP183	南西半1	45	13	A				弥生・土師質	
SP184	南西半1	20	14	A					
SP185	南西半1	36	17	B				弥生	
SP186	南西半2	18	12	A				弥生	
SP187	南西半2	17	24	A				弥生・土師質	
SP188	南西半2	25	31	A				弥生	
SP189	南西半2	16	16	B				弥生	
SP190	南西半2	12	4						
SP191	南西半2	30	29	B				弥生・土師質	
SP192	南西半2	24	14	A				弥生・土師質	
SP193	南西半2	21	13	B				弥生	
SP194	北西半2		0	B				弥生・土師質	
SP195	北西半2	55	32	B(Bb)	●		●	弥生・土師器・青磁	
SP196	北西半2	15	27	A					
SP197	北西半2	20	34	A					
SP198	北西半2	35	11	A				弥生・土師質	
SP199	北西半2	20	19	D				弥生	
SP200	北西半2	25	16	A				弥生	
SP201	北西半2	20	27	A				弥生・土師質	
SP202	北西半2	20	11	A				弥生・土師質	
SP203	北西半2	20	17	A				弥生	
SP204	北西半2	12	17	A				弥生	
SP205	北西半2	43	8	B			●	弥生	
SP206	北西半2	18	8	B				弥生	
SP207	北西半2	40	5						
SP208	南西半2	19	4	A				弥生・土師質	
SP209	南西半2	18	6	A				弥生	
SP210	南西半2	40	23	A				弥生・土師器・土師質	
SP211	南西半2	25	39	A				弥生・土師質	
SP212	南西半2	20	24	A					
SP213	南西半2	26	8	B				弥生	
SP214	南西半2	20	4	A				弥生	
SP215	南西半2	20	10	A					
SP216	南西半2	33	9	A				弥生	
SP217	南西半2	26	20	A					
SP218	南西半2	45	37	A				弥生・土師器	
SP219	南西半2	25	23	B					
SP220			0					須恵	
SP221	北東半1	14	27	A				弥生・土師質	
SP222	北東半1	24	40	A					
SP223	北東半1	19	19	B				弥生・土師質	
SP224	北東半2	22	5	A				須恵器短頸壷。弥生	ST01を切る
SP227	南東半2	43	3	A				弥生	
SP228	南東半2	38	29	A			●	弥生・土師質	
SP229	北東半2	22	8	A					
SP230			0					弥生・土師質	
SP231	南西半1	25	19	A				弥生・土師器・土師質	
SP232	南西半1	19	9	B					
SP234	南東半1	16	15	A				弥生・土師質	
SP235	北西半1	47	54	A				弥生・土師器・土師質多量	
SP236	拡張西半	67	655					弥生・土師器・土師質多量	
SP237	南西半1	23	14	A					調査時SP128。重複のため振替
SP238	南西半1	29	26	B					調査時SP129。重複のため振替
SP239	南東半2								調査時SP88。重複のため振替

表 7　遺物一覧 1（土器・陶磁器）

ID	出土位置		種別 器種 型式・時期	部位 残存率	法量（cm）				調整ほか特徴	色調 上段：外面 下段：内面	備考
	遺構等	層位			器高	口径	胴径	底径			
001	ST04		弥生土器 甕 城ノ越	口～底近 2/3	－	22.7	21.8	－	外】肩部ﾖｺﾊｹ、胴部ﾀﾃﾊｹ、口縁ﾖｺﾅﾃﾞ 内】指頭痕、ﾅﾃﾞ、口縁ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄色10YR8/4 浅黄色10YR8/4	内面に口縁部接合痕が顕著に残る
003	ST04		弥生土器 甕 須玖Ⅰ古	口～胴 3/4	－	27.4	26.0	－	外】ﾀﾃﾊｹ、口縁ﾖｺﾅﾃﾞ 内】ﾅﾃﾞ、指頭痕	明赤褐色5YR5/6 暗赤褐色5YR3/4	
004	ST04		弥生土器 広口壷 城～須Ⅰ古	胴～底 1/1	－	－	＞32	－	外】ﾖｺﾐｶﾞｷ 内】指頭痕、風化	褐灰色7.5YR4/1 褐灰色10YR5/1	胴部最大径に沈線
005	ST04		弥生土器 甕 須玖Ⅰ	底 1/1	－	－	－	10.4	外】ﾖｺﾅﾃﾞ･ﾅﾃﾞ 内】指頭痕	にぶい黄橙色10YR7/4 にぶい黄橙色10YR7/4	寸胴甕
006	ST04		弥生土器 壷	頸～底 1/4	－	－	(28.0)	(7.0)	外】ﾖｺﾐｶﾞｷ、底部ﾀﾃ工具ﾅﾃﾞ･風化 内】ﾀﾃ工具ﾅﾃﾞ、指頭痕	橙色7.5YR6/6 にぶい橙色7.5YR7/4	
007	ST04		弥生土器 甕／壷 城ノ越	底	－	－	－	6.8	外】風化、脚台状微上底 内】ﾅﾃﾞ	橙色5YR6/6 にぶい黄橙10YR6/4	微上底
008	ST04		弥生土器 甕 須玖Ⅰ古	底	－	－	－	5.6	外】ﾀﾃﾊｹ、上底 内】風化	橙色5YR6/8 灰色5Y4/1	上底
009	ST04		弥生土器 壷 城～須Ⅰ古	頸～底 1/1	－	－	31.0	7.4	外】ﾖｺﾐｶﾞｷ、胴部突帯1条 内】指頭痕	黒褐色7.5YR3/1 褐灰色7.5YR4/1	胴部最大径に突帯
010	ST04		弥生土器 壷か 須玖Ⅰか	底	－	－	－	7.7	外】ﾖｺ･斜ﾐｶﾞｷ 内】指頭痕	にぶい褐色7.5YR にぶい黄橙色10YR7/2	平底
012	ST04		弥生土器	口							
015	ST04		弥生土器 甕 須玖Ⅰ古	口	－	(21.0)	－	－	外･内】ﾖｺﾅﾃﾞ、突帯1条	明赤褐色7.5YR3/4 明赤褐色5YR5/8	頸部に突帯1条
016	ST04		弥生土器	口							022と同一。003とは別固体
017	ST04		弥生土器 甕 城ノ越	口 1/8	－	18.0	－	－	外･内】ﾖｺﾅﾃﾞ	橙色7.5YR7/6 にぶい黄橙色10YR7/4	
018	ST04		弥生土器 甕 城ノ越	脚台 1/2	－	－	－	－	外】ﾀﾃﾊｹ後ﾅﾃﾞ、くびれ部ﾖｺﾅﾃﾞ 内】ﾅﾃﾞ、指頭痕	橙色2.5YR6/6 橙色5YR6/6	中空脚台
019	ST04		弥生土器	底							平底
020	ST04		弥生土器 高坏	脚柱							
023	SU03		弥生土器 壷 須玖Ⅰ	口 1/8	－	(23.0)	－	－	外】ﾀﾃﾐｶﾞｷ、口縁ﾖｺﾅﾃﾞ 内】ﾅﾃﾞ	にぶい褐色7.5YR5/4 明黄褐色10YR6/6	
024	SU01･SU03	4層	弥生土器 甕 須玖Ⅰ	胴～底 1/8	－	－	－	(19.8)	外】ﾀﾃﾊｹ 内】指頭痕、風化	橙色5YR6/6 橙色5YR6/8	
025	SU01		弥生土器	口							52と同一
026	SU02	4層	弥生土器 壷/甕 須玖Ⅰか	底 1/3	－	－	－	－	外･内】ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色10YR6/4 にぶい黄橙色10YR7/4	54･55と同一か
027	SU03	4層	弥生土器	口	－	－	－	－	外･内】ﾅﾃﾞ、口縁ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄色10YR8/4 にぶい黄橙色10YR7/3	口縁下面がツマミにより薄化
028	SU04		弥生土器 甕 城ノ越	口 1/10	－	－	－	－	外･内】ﾖｺﾅﾃﾞ	灰黄褐色10YR5/2 灰黄褐色10YR5/2	
029	SU04		弥生土器 甕 須玖Ⅰ	口 1/9	－	(28.8)	－	－	外･内】ﾖｺﾅﾃﾞ	橙色5YR7/6 橙色5YR7/6	
032	北東ｻﾌﾞﾄﾚ		弥生土器 甕 城ノ越	口 1/10	－	－	－	－	外･内】ﾖｺﾅﾃﾞ	橙色5YR6/6 橙色5YR6/6	断面楕円口縁（玉縁状）
033	北東ｻﾌﾞﾄﾚ		弥生土器 甕 城ノ越	口 1/10	－	－	－	－	外･内】ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい橙色5YR7/4 橙色2.5Y7/6	断面三角
034	北東ｻﾌﾞﾄﾚ		弥生土器	口	－	－	－	－			断面三角
035	北東ｻﾌﾞﾄﾚ		弥生土器 壷 城ノ越	口 1/10	－	(24.0)	－	－	外･内】ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙色10YR8/3 浅黄橙色10YR8/3	
044	北東ｻﾌﾞﾄﾚ		弥生土器 甕 須玖Ⅰ古	口 1/12	－	(23.2)	－	－	外】ﾅﾃﾞ、口縁ﾖｺﾅﾃﾞ 内】ﾅﾃﾞ、指頭痕	橙色2.5Y6/6 橙色2.5Y6/6	
045	SP218＋ SP81		土師器 甕 古墳中期前葉	口 3/4	－	(14.6)	－	－	外】ﾅﾃﾞ、口縁ﾖｺﾅﾃﾞ 内】口縁ﾖｺﾊｹ、ﾅﾃﾞ	浅黄色2.5Y8/4 浅黄色2.5Y8/4	粗製、口縁直線
046	SP218		土師器 甕 古墳中期前葉	口 1/6	－	(14.6)	(17.0)	－	外】ﾊｹﾒ、口縁ﾖｺﾅﾃﾞ 内】ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	浅黄色2.5Y7/3 褐灰色10YR5/1	粗製、口縁弱内湾、斜ハケ目

表 8　遺物一覧 2（土器・陶磁器）

ID	出土位置 遺構等	出土位置 層位	種別 器種 型式・時期	部位 残存率	法量(cm) 器高	法量(cm) 口径	法量(cm) 胴径	法量(cm) 底径	調整ほか特徴	色調 上段：外面 下段：内面	備考
047	SP218		土師器 甕 古墳中期前葉	口～肩 1/6	－	－	－	－	外】肩部ﾀﾃﾊｹ、口縁ﾖｺﾅﾃﾞ　内】ﾅﾃﾞ、口縁ﾖｺﾅﾃﾞ	淡黄色2.5Y8/4 淡黄色2.5Y8/4	粗製、口縁微弱内湾
048	SP218		土師器 甕 古墳中期前葉	口 1/3	－	(13.6)	－	－	外・内】ﾊｹﾒ後ﾖｺﾅﾃﾞ	淡黄色2.5Y8/4 淡黄色2.5Y8/3	粗製、口縁微弱内湾
049	SP218		土師器 壷 古墳中期前葉	口～胴 1/1	－	13.0	22.5	－	外】ﾀﾃﾊｹ、後口縁ﾖｺﾅﾃﾞ　内】ﾅﾃﾞ、口縁ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙色10YR8/4 浅黄橙色10YR8/4	粗製、口縁上端弱内湾
052	SU01	4層	弥生土器 甕 須玖Ⅰ古	口 1/6	(22.8)	－	－	－	外・内】ﾅﾃﾞ、口縁ﾖｺﾅﾃﾞ	橙色2.5Y6/8 橙色7.5YR7/6	25と同一
053	SU01	4層	弥生土器 壷 須玖Ⅰ	口～肩 1/3	(28.2)	－	－	－	外・内】ﾅﾃﾞ、口縁ﾖｺﾅﾃﾞ	橙色7.5YR7/6 橙色7.5YR7/6	
054	SU02		弥生土器 甕 城～須Ⅰ古	口～頸 1/6	－	－	－	－	外】ﾖｺﾅﾃﾞ、突帯1条　内】ﾅﾃﾞ、指頭痕	橙色2.5YR6/6 橙色7.5YR7/6	55と同一か
055	SU02		弥生土器	口～頸							54と同一か
056	北東ｻﾌﾞﾄﾚ		弥生土器 甕 須玖Ⅰ古	底	－	－	－	6.0	外】ﾀﾃﾊｹ、風化　内】ﾅﾃﾞ、ﾕﾋﾞｵｻｴ	灰黄褐色10YR5/2 褐灰色10YR4/1	弱上底
057	SP224		須恵器 直口壷	口～胴	－	(7.4)	(11.8)	－	外】回転ﾅﾃﾞ・静止ﾅﾃﾞ　内】回転ﾅﾃﾞ	灰白色2.5Y8/1 灰白色2.5Y8/1	
061	北東ｻﾌﾞﾄﾚ		弥生土器 甕 須玖Ⅰ古	口 欠	－	－	－	－	外・内】ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄色10YR8/4 浅黄色7.5YR8/4	
066	北東ｻﾌﾞﾄﾚ		弥生土器 甕か 須玖Ⅰ	底 1/8	－	－	－	－	外】ﾀﾃﾊｹ　内】ﾅﾃﾞ、指頭痕	橙色5YR6/6 褐灰色5YR4/1	
067	北東ｻﾌﾞﾄﾚ		弥生土器 甕 須玖Ⅰ古	底 1/1	－	－	－	4.6	外・内】ﾅﾃﾞ、風化	赤橙色10R6/5 赤橙色10R6/8	脚台状。指頭上底
069	北東ｻﾌﾞﾄﾚ		弥生土器 甕か 須玖Ⅰ古	底 1/4	－	－	－	(8.3)	外】ﾅﾃﾞ、底部ﾕﾋﾞｵｻｴ　内】ﾅﾃﾞ	にぶい橙色5YR7/4 灰白色2.5Y8/2	平底(指頭微上底)
076	北東ｻﾌﾞﾄﾚ		弥生土器 器台か	1/3	－	－	－	－	外】ﾀﾃﾊｹ、沈線、後ﾅﾃﾞ　内】ﾊｹﾒ、ｼﾎﾞﾘ痕	浅黄橙10YR8/4 浅黄色2.5Y8/4	沈線3条(下位の1条はﾅﾃﾞ消される)
080	北東ｻﾌﾞﾄﾚ		土師質土器	口～底	2.3	(7.8)	－	(5.4)			
081	北東ｻﾌﾞﾄﾚ		土師質土器	口～底	2.4	(8.2)	－	(5.2)			
082	北東ｻﾌﾞﾄﾚ		土師質土器	口～底	2.7	(8.4)	－	(6.2)			
083	北東ｻﾌﾞﾄﾚ		土師質土器	口～底	－	－	－	－			
086	北東ｻﾌﾞﾄﾚ		瓦質土器 2次加工石錘	完	－	－	－	－			
099	SP20	SB03	土師質土器 坏	底 1/2	－	－	－	(5.4)	外】回転ﾅﾃﾞ　内】静止ﾅﾃﾞ、指頭痕	にぶい黄橙色10YR7/2 浅黄橙色10YR8/4	糸切
101	SP63	SB03	天目	体	－	－	－	－			
103	SP225	SB03	土師器 小型器台か 古墳初頭	受 1/3	－	－	－	－	外・内】ﾅﾃﾞ	にぶい橙色7.5YR7/4 橙色2.5YR6/6	
105	SP226	SB03	瓦質土器 深鉢形火鉢 15・16C	口 1/10	－	(16.0)	－	－	外】突帯1条、印花文(菊花)、突帯下に薬研彫状の縦条線(4条1単位)　内】斜ﾊｹ後ﾅﾃﾞ	黒褐色10YR3/1 褐灰色10YR4/1	スタンプ菊花文
109	SP226	SB03	陶器	胴	－	－	－	－			104と同一
111	SP137	SB03	土師質土器	口～底 1/8	2.3	(11.29	－	(8.8)	外・内】回転ﾅﾃﾞ	浅黄橙色7.5YR8/6 橙色7.5YR7/6	糸切
114	SP150	SB03	土師器 高坏	脚 1/8	－	－	－	－	外】ﾅﾃﾞ　内】ｼﾎﾞﾘ痕、ﾅﾃﾞ	赤色10R5/6 赤色10R5/6	被熱赤化
118	SC01		土師質土器 小皿	口～底 1/3	1.3	(7.1)	－	(3.8)	外・内】回転ﾅﾃﾞ、口縁面取	浅黄橙色7.5YR8/6 浅黄橙色7.5YR8/6	やや精良
122	SC01		青磁	口	－	－	－	－			鎬連弁
123	SC01		青磁	体	－	－	－	－			
125	SP20	SB03	土師質土器	底 欠	－	－	－	－	外・内】ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色10YR7/4 にぶい黄橙色10YR7/4	
126	北辺ﾄﾚﾝﾁ Ⅳ層、SP03 周辺	4層	土師器 甕 古墳初頭	口 1/8	－	(17.0)	－	－	外・内】回転ﾅﾃﾞ、口縁面取、風化	橙色2.5YR7/6 橙色2.5YR6/6	口縁上端面取・内ツマミ
127	SP03		黒色土器 内黒・椀	底 1/2	－	－	－	5.6	外】回転ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ　内】ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色10YR7/3 暗灰色N3/	内黒
130	SP26＋ SP70		瓦質土器 羽釜か	体 欠	－	－	－	－	外・内】回転ﾅﾃﾞ、指頭痕	暗灰色N3/	
133	SP48-P1		土師質土器	底 1/8	1.9	(9.4)	－	(9.6)	外・内】ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄橙色7.5YR8/4 橙色7.5YR7/6	
135	SP73		土師質土器 小皿	口～底 1/4	(1.4)	(8.0)	－	(7.0)	外・内】ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色10YR7/4 にぶい黄橙色10YR7/4	
136	SP75		土師質土器か	口 1/10	－	(10.6)	－	－	外・内】ﾅﾃﾞ、口縁面取	黒褐色7.5YR3/1 黒褐色7.5YR3/1	体部に沈線

表 9　遺物一覧 3（土器・陶磁器）

ID	出土位置		種別 器種 型式・時期	部位 残存率	法量（cm）				調整ほか特徴	色調 上段：外面 下段：内面	備考
	遺構等	層位			器高	口径	胴径	底径			
140	SP109		須恵器	底 欠	－	－	－	(7.4)	外・内】風化	灰白色10YR8/2 灰白色2.5Y1/8	
142	SP116		土師質土器 小皿	口～胴 3/4	2.2	(6.2)	－	(1.7)	外・内】回転ﾅﾃﾞ、糸切	浅黄橙色7.5YR8/6 浅黄橙色7.5YR8/6	糸切
145	SP123b		土師質土器	底欠	－	－	－	－			
148	SP126		土師質土器 坏か	底 1/6	－	－	－	(9.0)	外・内】ﾅﾃﾞ	浅黄橙色10YR8/4 浅黄橙色10YR8/4	
156	SP149		土師質土器	口 1/10	－	－	－	－	外・内】ﾅﾃﾞ、口縁面取	橙色5YR7/6 浅黄橙色7.5YR8/4	
157	SP165		土師質土器か 小皿	口～底 1/9	2.3	(8.3)	－	(4.2)	外・内】回転ﾅﾃﾞ、口縁面取、高台境ｼｬｰﾌﾟ	灰白色2.5Y8/1 灰白色10YR8/2	被熱変色か
163	SP172		土師質土器	底 1/4	－	－	－	(9.6)	外】糸切　内】静止ﾅﾃﾞ	灰白色10YR8/2 灰白色7.5YR8/2	糸切
166	SP180＋ P20	4層	土師器 椀形高坏 古墳初頭	口～裾 1/2	13.5	10.8	－	11.8	外】坏部ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ、脚部ﾀﾃ工具ﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ　内】ﾅﾃﾞ、風化	橙色5YR7/8 橙色5YR7/8	脚部に穿孔4箇所。 庄内系椀形高坏
167	SP180＋ P20		土師器 甕 古墳中期後葉	口～肩 1/3	－	(14.6)	－	－	外・内】ﾅﾃﾞ	橙色5YR7/8 橙色5YR7/8	
168	SP180		土師器 甕 古墳中期後葉	口～肩 1/4	－	(13.6)	－	－	外】不定ﾅﾃﾞ、口縁回転ﾅﾃﾞ　内】風化	にぶい黄橙色10YR7/4 橙色5YR6/6	
169	SP183		土師質土器	底 1/3	－	－	－	(4.8)	外・内】ﾅﾃﾞ	褐灰色10YR5/1 にぶい黄褐色10YR5/3	
170	SP195	2層	土師器 甕/壷	底 1/1	－	－	－	－	外】工具ﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ　内】ﾕﾋﾞﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色10YR7/3 浅黄橙色10YR8/4	丸底
172	SP218		土師器 甕 古墳初頭	口 1/8	－	(22.0)	－	－	外・内】紗ﾊｹ後回転ﾅﾃﾞ	灰黄褐色10YR6/2 淡黄色2.5Y8/4	弱内湾、内ツマミ
175	SP231		土師器 高坏	脚柱 1/1	－	－	－	－	外】柱部ﾖｺﾅﾃﾞ、裾部ﾀﾃﾊｹ後ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色10YR7/3 橙色5YR7/6	
182	SP234		土師質土器	底 1/3	－	－	－	(6.4)	外・内】ﾅﾃﾞ	明黄褐色10YR7/6 明黄褐色10YR7/6	
183	SP235		土師質土器 小型坏	口～底 1/4	2.1	(6.8)	－	(4.0)	外】回転ﾅﾃﾞ　内】ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾕﾋﾞｵｻｪ	浅黄橙色10YR8/4 橙色2.5YR7/6	精良、赤色粒多
185			陶器	体 欠					外】ﾊｹﾒ　内】擂り目か		
187	P2	4層	弥生土器 甕 城ノ越	口 1/8	－	(21.0)	－	－	外・内】ﾅﾃﾞ、口縁ﾖｺﾅﾃﾞ、口縁ﾖｺﾅﾃﾞ	浅黄登色10YR8/3 灰白色10YR8/2	
189	P12	4層	弥生土器 甕 須玖Ⅰ新	口 1/9	－	(19.8)	－	－	外・内】ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色10YR6/3 にぶい黄橙色10YR6/4	
190	P13	4層	弥生土器 甕 須玖Ⅰ古	口 1/8	－	(26.0)	－	－	外・内】ﾖｺﾅﾃﾞ	橙色7.5YR6/6 橙色5YR7/8	
191	P10	4層	弥生土器 甕 須玖Ⅰ新	口 1/8	－	(26.0)	－	－	外・内】ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色10YR7/3 にぶい黄橙色10YR7/3	
193	P11	4層	弥生土器 甕/壷 須玖Ⅰ	底 1/3	－	－	－	－	外】ﾀﾃﾊｹ、風化　内】ﾅﾃﾞ	橙色5YR6/8 にぶい橙色10YR5/3	190と同質
194	P13	4層	弥生土器 甕 須玖Ⅰ	口 1/9	－	(30.6)	－	－	外・内】ﾖｺﾅﾃﾞ	褐色7.5YR4/3 暗褐色7.5YR3/3	口縁内側突出の境に幅1.5mm程の条線
197	P15	4層	陶器	体 欠	－	－	－	－			
198	P17	4層	陶器 擂鉢	口 欠	－	－	－	－	外】輪積痕、回転ﾖｺﾅﾃﾞ　内】輪積痕、擂り目	浅黄色10YR8/3 浅黄色10YR8/3	
199	P18	4層	弥生土器 甕 城～須Ⅰ古	口 1/6	－	(18.4)	－	－	外】ﾀﾃﾊｹ、ﾅﾃﾞ、口縁ﾖｺﾅﾃﾞ　内】ﾅﾃﾞ、指頭痕	灰色7.5Y5/1 灰色7.5Y5/1	青灰色
202	P25	4層	弥生土器 壷 須玖Ⅰ	口～頸 1/4	－	(28.0)	－	－	外・内】ﾅﾃﾞ、口縁ﾖｺﾅﾃﾞ	橙色5YR6/8 明赤褐色5YR5/6	
203	P22	4層	黒色土器 両黒・椀	底 1/1	－	－	－	6.4	外】回転ﾅﾃﾞ　内】ﾐｶﾞｷ	黒褐色2.5Y3/1 黒褐色2.5Y3/1	両黒
205	P24	4層	土師器 小型広口壷 古墳後期後葉	頸～底 1/1	－	－	13.6	－	外】ﾀﾃﾊｹﾒ　内】指頭痕	にぶい黄橙色10YR7/4 にぶい黄橙色10YR7/4	
210	P33	4層	弥生土器 甕 須玖Ⅰ古	底 1/1	－	－	－	7.8	外】ﾀﾃﾊｹ風化　内】ﾅﾃﾞ	橙色7.5YR7/6 橙色7.5YR7/6	脚台（中空上底） 211と同一か
211	P33	4層	弥生土器 甕 須玖Ⅰ古	口 1/12	－	(24.0)	－	－	外】ﾀﾃﾊｹ後ﾅﾃﾞ、口縁ﾖｺﾅﾃﾞ 内】ﾅﾃﾞ	橙色7.5YR6/6 橙色5YR6/6	脚台（中空上底） 210と同一か
213	拡張東半2 ピットか		黒色土器 内黒・椀	底 1/2	－	－	－	(6.6)	外・内】ﾅﾃﾞ	浅黄橙色10YR8/3 黒色2.5GY2	内黒

表 10　遺物一覧 4（土器・陶磁器）

ID	出土位置		種別 器種 型式・時期	部位 残存率	法量（cm）				調整ほか特徴	色調 上段：外面 下段：内面	備考
	遺構等	層位			器高	口径	胴径	底径			
214	ﾗﾍﾞﾙなし		土師器 小皿	口～底 2/3	1.4	(6.6)	－	(4.4)	外・内】ﾅﾃﾞ、糸切	にぶい黄橙色10YR6/3 にぶい黄橙色10YR6/3	糸切
216	東辺ﾄﾚﾝﾁ	4層	弥生土器 甕 城～須Ⅰ古	底 1/1	－	－	－	5.7	外】ﾅﾃﾞ、底部ﾕﾋﾞｵｻｴ	橙色2.5YR6/6 橙色2.5YR6/6	強上底
220	東辺ﾄﾚﾝﾁ	4層	土師器 甕/壷	底 1/2	－	－	－	(6.4)	外】ﾀﾃﾊｹ、底部工具ﾅﾃﾞ　内】ﾊｹﾒ、指頭痕	にぶい橙色7.5YR7/4 浅黄橙色7.5YR8/4	平丸底
224	北辺ﾄﾚﾝﾁ 西半	4層	弥生土器 甕 須玖Ⅱ新	口 欠	－	－	－	－	外・内】ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色10YR7/3 黄橙色10YR8/6	
230	北辺ﾄﾚﾝﾁ	4層	弥生土器 壷	頸～底 1/8	－	－	－	－	外】ﾀﾃﾊｹ、突帯1条　内】ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	橙色7.5YR7/6 橙色7.5YR7/6	
237	東半（群）	4層	弥生土器	― ―	－	－	－	N1300.9			口、底、頸
239	東半	4層	土師質土器 坏	口～体 1/18	－	(15.2)	－	－	外・内】回転ﾅﾃﾞ、体部沈線		体部に沈線
240	東半（群）	4層	土師質土器	底 欠	－	－	－	－			
243	東半	4層	土師器 壷	口～肩 1/8	－	(17.0)	－	－	外・内】口縁ﾖｺﾅﾃﾞ、風化	橙色5YR6/8 にぶい黄橙色10YR7/4	
244	東半	4層	青磁	口 欠	－	－	－	－			雷文
245	東半	4層	緑釉か	体 欠	－	－	－	－			
246	北東半1	4層	弥生土器 甕 城ノ越	口 欠	－	－	－	－	外】ﾅﾃﾞ、口縁ﾖｺﾅﾃﾞ　内】ﾅﾃﾞ	灰黄褐色10YR6/2 浅黄橙色7.5YR8/4	
253	拡張東半1	3-4層境	土師器 甕/壷	底 欠	－	－	－	－	外・内】ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐色10YR7/4 橙色7.5YR7/6	
255	拡張東半1	3-4層境	土師質土器 小皿	口～底 1/8	1.5	(7.2)	－	(4.6)	外・内】回転ﾅﾃﾞ、糸切	浅黄橙色10YR8/3 橙色5YR7/6	糸切
256	拡張東半1	3-4層境	土師質土器 坏	口～体 1/8	－	(15.8)	－	－	外・内】静止ﾅﾃﾞ、口縁回転ﾅﾃﾞ	浅黄橙色10YR8/3 浅黄橙色10YR8/3	
258	拡張東半1	3-4層境	青磁 碗	口 欠	－	(15.0)	－	－	外】無鎬連弁	灰オリーブ色7.5Y5/2 灰オリーブ7.5Y5/2	
263	拡張東半1	3-4層境	陶器 皿 肥前Ⅱ期	口～肩 1/4	7.6	(27.5)	－	10.5	外】高台無釉　内】溝縁口、象嵌幾何文、砂目積	暗灰黄色2.5Y4/2 にぶい黄褐色10YR5/3	三島唐津（武雄系）
264	拡張東半2	3-4層境	土師器	口 欠	－	(14.4)	－	－	外・内】回転ﾅﾃﾞ、口縁面取・肥厚	橙色5YR7/6 橙色5YR7/6	
265	拡張東半2	3-4層境	弥生土器 甕/壷	底 1/1	－	－	－	(4.8)	外】ﾅﾃﾞ　内】ﾅﾃﾞ、指頭痕	にぶい黄橙色5Y4/1 灰黄色2.5Y7/2	平底・微上底
266	拡張東半2	3-4層境	弥生土器 小型鉢	脚台 1/1	－	－	－	3.9	外・内】ﾕﾋﾞｵｻｴ・ﾅﾃﾞ	橙色7.5YR7/6 橙色7.5YR7/6	手づくね
275	拡張東端	4層	弥生土器 高坏	坏 1/2	－	－	－	－	外】ﾖｺﾊｹ後ﾅﾃﾞ、頸部ｼﾎﾞﾘ　内】ﾊｹ後ﾅﾃﾞ	橙色7.5YR7/6 橙色7.5YR7/6	ｶｸﾗﾝ付近
276	拡張東端	4層	土師器 壷 古墳中期	口～肩 1/5	－	(15.6)	－	－	外・内】回転ﾅﾃﾞ	橙色7.5YR7/6 橙色5YR7/6	
281	西半	5層	弥生土器 壷/甕 須玖Ⅰか	口 1/12	－	－	－	－	外・内】ﾖｺﾅﾃﾞ	明褐色7.5YR5/6 明褐色7.5YR5/6	赤彩
285	西半	3-4層境	須恵器 坏身 TK43	受 1/15	－	－	－	－	外・内】回転ﾅﾃﾞ	黄灰色2.5Y5/1 黄灰色2.5Y5/1	
292	西半	3-4層境	白磁か	口 1/12	－	(13.0)	－	－	外・内】施釉、口端釉剥ぎ取り（口禿）	灰白色5Y7/2 灰白色5Y7/2	口禿
296	北西半1	4-5層境	弥生土器 小型壷	口 1/10	－	(17.4)	－	－	外・内】口縁ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	橙色5YR7/6 橙色5YR6/6	口縁平坦面に蓋綴じ孔2
297	拡張西半1	3-4層境	須恵器 蓋坏 MT10	天 1/6	－	－	－	－	外】回転ﾅﾃﾞ　内】ﾅﾃﾞ	灰色5Y4/1 灰黄褐色10YR6/2	
298	拡張西半1 （群）	3-4層境	須恵器	― ―	－	－	－	－			群登録（坏蓋、甕体部など）
300	拡張西半1	3-4層境	黒色土器 両黒・椀	高台 1/1	－	－	－	(5.2)	外・内】ﾅﾃﾞ	黒褐色2.5Y3/1 黒褐色2.5Y3/1	
301	拡張西半1	3-4層境	土師質土器 小皿	口～底 1/9	0.9	(9.8)	－	(8.2)	外・内】ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色10YR7/4 にぶい黄橙色10YR7/4	

表 11　遺物一覧 5（石器）

掲載番号	ID	出土位置		器種	石材	法量(cm・g)				備考
		遺構等	層位			長さ	幅	厚み	重量	
図11-1	448	不明		石鏃	黒曜石(淀姫系)	2.0	2.1			押型文期
図11-2	409	SU01		石鏃	安山岩	2.0	1.6	4.0	0.8	
図11-3	466	SP233		石鏃	黒曜石(腰岳系)	1.5	1.5	4.0	0.6	
図11-4	465	SP229底面地山		石鏃	安山岩	1.8	2.2	4.0	1.1	
図11-5	473	東辺ﾄﾚﾝﾁ南半	5層	楔形石器か	黒曜石(腰岳系)	2.6	2.3	1.3	5.4	
図11-6	446	SP225		二次加工剝片	黒曜石(腰岳系)	2.3	1.8	1.0	3.8	
図11-7	464	SP26		二次加工剝片	黒曜石(未測定)	2.5	3.4	1.0	12.3	
図11-8	460	西半	4層	二次加工剝片	安山岩	5.9	2.2	1.5	13.4	使用痕
図11-9	417	東半	4層	二次加工剝片	黒曜石(腰岳系)	4.1	2.0	8.0	4.0	使用痕
図11-10	407	ST04中央		二次加工剝片	黒曜石(針尾Ⅲ群)	3.4	1.0	7.0	3.6	
図11-11	444	SP38		剝片	黒曜石(腰岳系)	2.8	1.7	1.2	3.9	
図11-12	410	SU03	4層	剝片	安山岩	5.9	2.6	1.3		
図11-13	408	ST04西側		剝片	黒曜石(腰岳系)	4.2	2.5	1.3	10.7	
図11-14	442	SP06周辺		剝片	黒曜石(腰岳系)	3.0	3.4	0.9		
図11-15	472	拡張東半2	3-4層境	剝片	黒曜石(腰岳系)	2.1	3.1	9.0	4.5	
図11-16	430	S-35	4層	石核様石器	黒曜石(腰岳系)	3.0	3.7	1.7	21.1	
図11-17	437	S-1	4層	石核様石器	安山岩	3.7	4.4	1.6	32.5	
図12	401	ST04	西側	台石	流紋岩	11.2	8.6	2.4	318.1	
図12	402	ST04-7		敲石	流紋岩	12.4	6.7	3.1	278.6	
図12	412	SU06		台石	砂岩	12.9	9.2	1.7	356.0	
図12	435	S-38	4-5層境	垂飾	不明	2.2	1.4	0.6	2.4	
写真11	481	SC01		不明	粘板岩	1.9	0.9	0.8	3.9	小型柱状片刃石斧か
写真11	480	SC01		火打石か	石英	2.9	2.2	1.6	14.3	
写真11	456	北東半1	4層	火打石か	石英	2.5	1.8	1.4	7.6	
図22-1	1064	SP172		剝片	黒曜石(腰岳系)	2.2	1.5	0.5	1.8	
図22-2	1033	ST04		剝片	黒曜石(腰岳系)	2.6	1.9	1.0	4.9	
図22-3	1034	ST04		剝片	黒曜石(腰岳系)	2.4	2.1	0.7	2.3	
図22-4	1007	東辺ﾄﾚﾝﾁ南半	5層	剝片	黒曜石(腰岳系)	3.5	1.7	0.7	4.1	
図22-5	1052	SP73		剝片	黒曜石(腰岳系)	1.5	1.4	0.3	0.8	
図22-6	1047	SP06		剝片	黒曜石(腰岳系)	1.1	1.8	0.5	1.0	
図22-7	1051	SP72		剝片	黒曜石(腰岳系)	1.8	1.9	0.8	1.8	
図22-8	1013	北辺ﾄﾚﾝﾁ		剝片	黒曜石(腰岳系)	2.8	2.0	0.6	3.7	
図22-9	1055	SP106		スクレイパー	黒曜石(腰岳系)	2.0	1.8	0.4	2.2	
図22-10	1059	SP114		剝片	黒曜石(腰岳系)	1.8	1.7	1.0	3.4	
図22-11	1005	西半	5層	剝片	黒曜石(腰岳系)	2.3	1.6	0.7	3.5	
図22-12	1048	SP27		剝片	黒曜石(針尾Ⅰ群)	1.6	1.6	0.8	2.8	
図22-13	1046	SP01		剝片	黒曜石(腰岳系)	1.8	1.3	0.8	1.8	
図22-14	1029	ST01		剝片	黒曜石(腰岳系)	1.5	1.0	0.2	0.4	
図22-15	1009	東辺ﾄﾚﾝﾁ南半	5層	剝片	黒曜石(腰岳系)	1.5	8.0	0.2	0.3	
図22-16	1025	SC01ｻﾌﾞﾄﾚ		剝片	黒曜石(腰岳系)	1.0	1.1	0.2	0.3	
図22-17	1070	SP230		剝片	黒曜石(腰岳系)	1.7	1.5	0.5	1.8	
図22-18	1011	北西半ﾄﾚﾝﾁ	5層	剝片	黒曜石(腰岳系)	1.3	1.8	0.7	2.1	
図22-19	1054	SP106		剝片	黒曜石(腰岳系)	1.5	1.1	0.1	0.4	
図22-20	1071	SP235		剝片	黒曜石(腰岳系)	1.9	1.5	1.3	4.4	
図22-21	1062	SP129		剝片	黒曜石(腰岳系)	1.5	1.5	0.2	0.8	
図22-22	1061	SP129		石鏃未成品か	黒曜石(腰岳系)	2.2	1.4	0.5	1.9	
図22-23	1068	SP201		剝片	黒曜石(腰岳系)	1.6	2.1	0.8	2.8	
図22-24	1012	北西半ﾄﾚﾝﾁ	5層	剝片	黒曜石(針尾Ⅲ群)	1.9	1.0	0.5	1.2	
図22-25	1072	SP235		剝片	黒曜石(腰岳系)	0.9	1.7	0.4	0.9	
図22-26	1063	SP137		剝片	黒曜石(腰岳系)	1.4	1.5	0.4	1.2	
図22-27	1035	ST04		剝片	黒曜石(針尾Ⅰ群)	1.6	0.7	0.2	0.4	
図22-28	1020	SC01ｻﾌﾞﾄﾚ		剝片	黒曜石(腰岳系)	1.1	2.1	0.7	2.3	
図22-29	1053	SP95		剝片	黒曜石(腰岳系)	1.3	1.2	0.6	0.8	
図22-30	1060	SP124		剝片	黒曜石(腰岳系)	1.1	1.8	0.3	0.5	
図22-31	1008	東辺ﾄﾚﾝﾁ南半	5層	剝片	黒曜石(腰岳系)	1.4	1.2	0.6	0.7	
図22-32	1010	東辺ﾄﾚﾝﾁ南半	5層	剝片	黒曜石(淀姫系)	1.7	2.3	0.5	2.3	
図22-33	1021	SC01ｻﾌﾞﾄﾚ		剝片	黒曜石(腰岳系)	1.1	1.6	0.5	0.8	
図22-34	1001	北西半1	5層	剝片	黒曜石(腰岳系)	1.3	1.0	0.3	0.4	
図22-35	1022	SC01ｻﾌﾞﾄﾚ		剝片	黒曜石(腰岳系)	0.8	1.5	0.3	0.5	
図22-36	1030	ST01		剝片	黒曜石(腰岳系)	1.3	1.7	0.5	1.0	
図22-37	1014	SU01周辺		剝片	黒曜石(腰岳系)	0.7	1.6	0.4	0.4	
図22-38	1016	SU01周辺		剝片	黒曜石(腰岳系)	0.9	1.7	0.6	0.8	
図22-39	1002	西半	5層	剝片	黒曜石(腰岳系)	1.5	1.8	0.7	2.4	
図22-40	1015	SU01周辺		剝片	黒曜石(腰岳系)	2.0	1.1	0.4	0.7	
図22-41	1004	西半	5層	剝片	黒曜石(腰岳系)	1.6	1.1	0.5	0.7	
図22-42	1028	ST01		剝片	黒曜石(腰岳系)	1.7	1.9	0.8	2.3	
図22-43	1050	SP72		剝片	黒曜石(腰岳系)	1.1	1.8	0.4	1.1	
図22-44	1006	北西半1	4-5層境	剝片	黒曜石(腰岳系)	1.2	1.6	0.8	1.8	

Ⅸ. 自然科学分析（放射性炭素年代測定）

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤　茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・黒沼保子

1. はじめに

諫早農業高校遺跡から出土した炭化材 6 点について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、SP20 と SP25、SP66、SP58、SP116、SP117 から出土した炭化材である。SP58 出土の炭化材は丸木で最終形成年輪が残存していた。それ以外の 5 点はいずれも破片で、最終形成年輪は残存しておらず、部位不明であった。形状の確認は実体顕微鏡下で行った。

測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表1　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-34999	遺構：SP20 試料No.1	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-35000	遺構：SP25 試料No.2	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-35001	遺構：SP66 試料No.3	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-35002	遺構：SP58 試料No.4	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-35003	遺構：SP116 試料No.5	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-35004	遺構：SP117 試料No.6	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）

3.　結果

表 2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、図 1 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ±40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.3（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表2　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-34999 試料No.1	-27.73±0.13	437±22	435±20	1435-1456 cal AD (68.2%)	1426-1476 cal AD (95.4%)
PLD-35000 試料No.2	-26.59±0.20	519±22	520±20	1409-1429 cal AD (68.2%)	1331-1339 cal AD (2.2%) 1397-1440 cal AD (93.2%)
PLD-35001 試料No.3	-29.02±0.20	443±23	445±25	1434-1453 cal AD (68.2%)	1424-1470 cal AD (95.4%)
PLD-35002 試料No.4	-27.99±0.11	636±22	635±20	1295-1314 cal AD (25.5%) 1357-1388 cal AD (42.7%)	1287-1325 cal AD (38.9%) 1344-1395 cal AD (56.5%)
PLD-35003 試料No.5	-27.42±0.23	667±22	665±20	1285-1300 cal AD (39.6%) 1369-1381 cal AD (28.6%)	1278-1313 cal AD (52.6%) 1357-1389 cal AD (42.8%)
PLD-35004 試料No.6	-28.71±0.22	424±22	425±20	1440-1465 cal AD (68.2%)	1432-1487 cal AD (95.4%)

4.　考察

SP20 出土の炭化材（試料 No.1：PLD-34999）は、1426-1476 cal AD (95.4%)で、15 世紀前半～後半の暦年代範囲であった。これは室町時代に相当する。

SP25 出土の炭化材（試料 No.2：PLD-35000）は、1331-1339 cal AD (2.2%)および 1397-1440 cal AD (93.2%)で、14 世紀前半および 14 世紀末～15 世紀前半の暦年代範囲であった。これは鎌倉時代末～室町時代に相当する。

SP66 出土の炭化材（試料 No.3：PLD-35001）は、1424-1470 cal AD（95.4%）で、15 世紀前半～後半の暦年代範囲であった。これは室町時代に相当する。

SP58 出土の炭化材（試料 No.4：PLD-35002）は、1287-1325 cal AD（38.9%）および 1344-1395 cal AD（56.5%）で、13 世紀後半～14 世紀末の暦年代範囲であった。これは鎌倉時代～室町時代に相当する。

SP116 出土の炭化材（試料 No.5：PLD-35003）は、1278-1313 cal AD（52.6%）および 1357-1389 cal AD（42.8%）で、13 世紀後半～14 世紀後半の暦年代範囲であった。これは鎌倉時代～室町時代に相当する。

SP117 出土の炭化材（試料 No.6：PLD-35004）は、1432-1487 cal AD（95.4%）で、15 世紀前半～後半の暦年代範囲であった。これは室町時代に相当する。

木材は最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。SP58 出土の炭化材は最終形成年輪が残存しており、得られた最終形成年輪の年代は、枯死もしくは木材が伐採された年代を示していると考えられる。SP20 と SP25、SP66、SP116、SP117 出土の炭化材は、いずれも最終形成年輪を欠く部位不明の炭化材であり、年代測定の結果が古木効果の影響を受けて、木材が枯死もしくは伐採された年代よりもやや古い年代を示している可能性がある。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」：3-20，日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

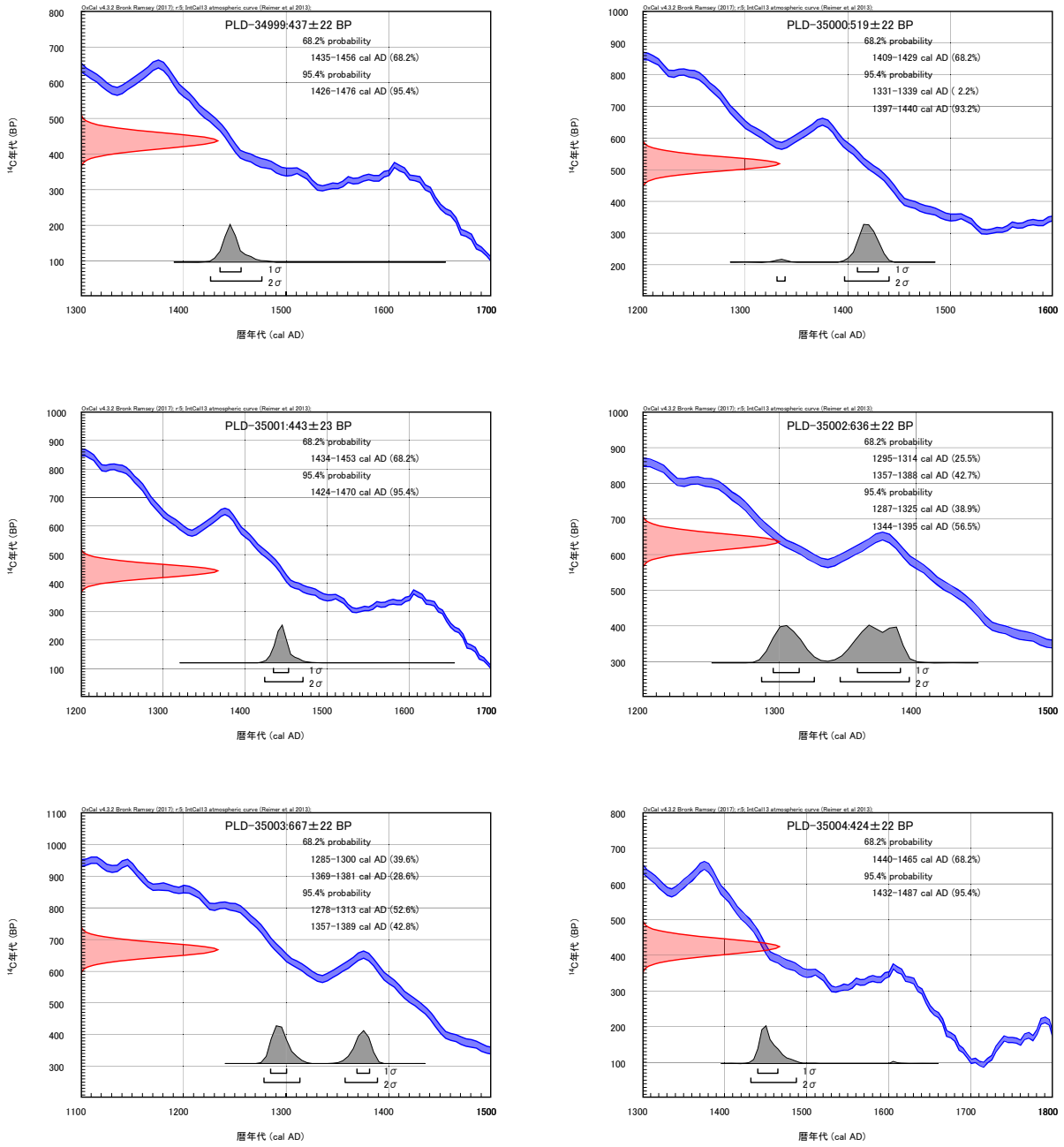

OxCal v4.3.2 Bronk Ramsey (2017); r:5; IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013);
PLD-34999:437±22 BP
68.2% probability
1435–1456 cal AD (68.2%)
95.4% probability
1426–1476 cal AD (95.4%)
PLD-35000:519±22 BP
68.2% probability
1409–1429 cal AD (68.2%)
95.4% probability
1331–1339 cal AD (2.2%)
1397–1440 cal AD (93.2%)
PLD-35001:443±23 BP
68.2% probability
1434–1453 cal AD (68.2%)
95.4% probability
1424–1470 cal AD (95.4%)
PLD-35002:636±22 BP
68.2% probability
1295–1314 cal AD (25.5%)
1357–1388 cal AD (42.7%)
95.4% probability
1287–1325 cal AD (38.9%)
1344–1395 cal AD (56.5%)
PLD-35003:667±22 BP
68.2% probability
1285–1300 cal AD (39.6%)
1369–1381 cal AD (28.6%)
95.4% probability
1278–1313 cal AD (52.6%)
1357–1389 cal AD (42.8%)
PLD-35004:424±22 BP
68.2% probability
1440–1465 cal AD (68.2%)
95.4% probability
1432–1487 cal AD (95.4%)
14C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)
1σ
2σ

図１　暦年較正結果

Ⅹ．総括

１．石器

（１）黒曜石製剥片石器群の分析

諫早農業高校遺跡からは包含層を主体に数多くの安山岩、黒曜石を素材とする石器が出土している。ここでは黒曜石を素材とした剥片石器について考察する。

第４層下部から第５層上部から出土した主な石器（図 22）を示す。石器と考えられる資料は少ない。９は右側縁に刃部調整加工が施された小形のスクレイパーである。22 は石鏃の未成品の可能性がある。以上の２点を除けば他は剥片および砕片である。剥片のうち縦長になるものは１・３・４・８・11 と 24 で量的には少ない。４を除けばいずれも縦横比が２：１から１：１に近くなる寸詰まりの剥片である。これに対し横長剥片は９・18・23・30・32・33・36 のように幅広の形態になるものが主体を占める。３・４・８など割と大きめな剥片類は石鏃あるいは削器等の素材の可能性がある。
原礫面を残置する剥片類が多くみられ、そのあり方から平坦な礫面を有する角礫になるものがほとんどを占めていることがわかる。例外的なものは 12・20・28 で、12・20 は小形の亜角礫で針尾系、28 は爪跡状の礫面が特徴的な松浦系の黒曜石と思われる。剥片剥離技術の観点からみると、打面を平坦な礫面とするもの（１～４・９・18・23 など）が多い特徴が見られる。また表裏で打点を 90 度転移させるもの（１・４・７など）も多い。

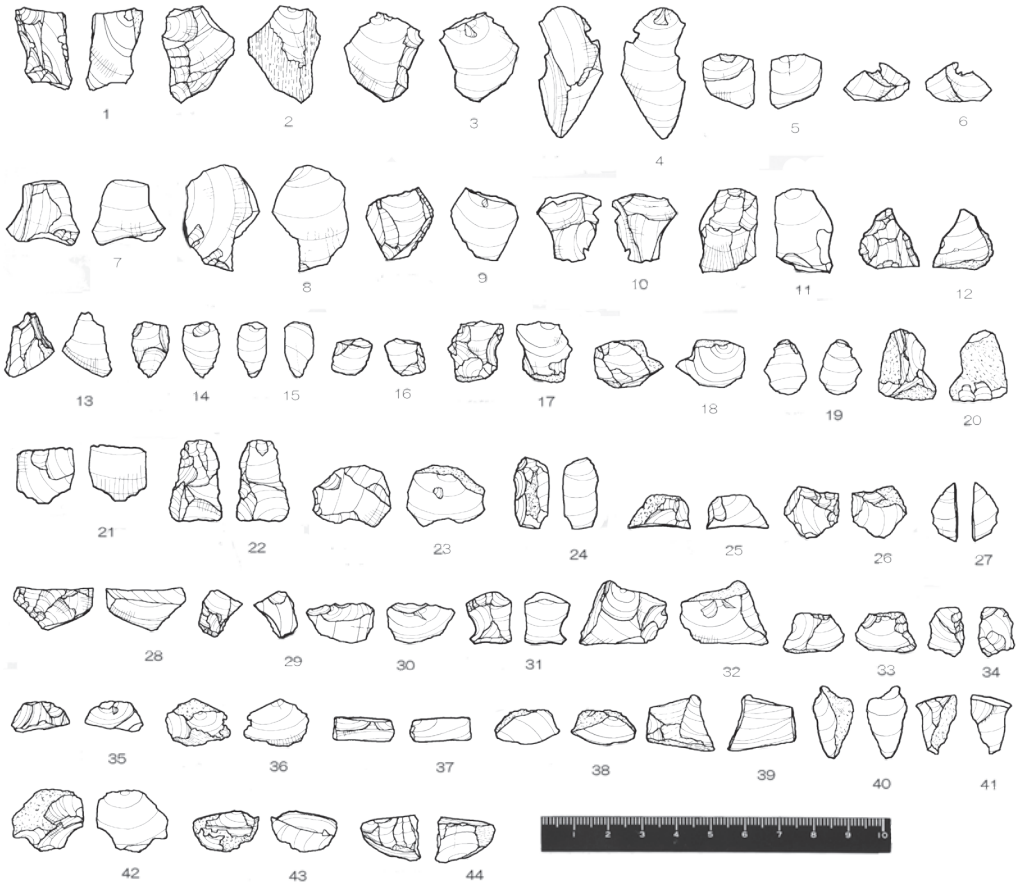


図 22　黒曜石製剥片石器（蛍光Ｘ線分析測定資料）

（２）黒曜石製剥片石器群の位置づけ

本遺跡から出土した弥生時代以前の遺物からは次のようなことが指摘できる。

①　時期決定の目安となる土器が弥生時代中期初頭～同前葉に限定されており、縄文時代の土器は全く出土していない。

②　石器に関しては出土状態が不明な縄文時代早期の押型文土器に伴う石鏃（図 11- １）を除くと明確に時期決定できるものはない。

③　第４層は、中世に形成されたと考えられるが、層下位は弥生時代中期初頭～同前葉の土器とともに多くの剥片石器が出土した。石器は第５層の上部からも出土した。

④　剥片の多くが、平坦な礫面を打面としており、さらに表裏で打点を 90 度転移するという特徴が認められる。

北部九州の弥生時代中期の剥片石器研究は吉留秀敏を白眉とする（吉留 2002、13)。それによれば福岡平野の弥生時代中期の剥片石器群は、「石鏃、掻器、削器、石錐、楔形石器」などからなり‥中略‥石鏃は資料数が少ないが抉りの浅い三角鏃を基調」とする（吉留 2002）らしい。剥片剥離技術については弥生時代前期にみられる打面転移や礫面を打面とする傾向（小畑 1991）を踏襲しながら円盤状を呈するものが現れるとし技術的後退と評価している（吉留 2002)。

こうしたことから諫早農業高校遺跡の剥片石器群を弥生時代中期初頭から前葉に位置づけることは十分に可能と思われる。その石器群を図 23 に示す。石錐や石核などは不在であるが福岡平野と共通する要素が非常に強い。長崎県では剥片石器が弥生時代まで使用されることは周知の事実であるが、良好な石器群に恵まれずその実態は不明であった。本資料は剥片石器の終焉を示すものとして重要であろう。

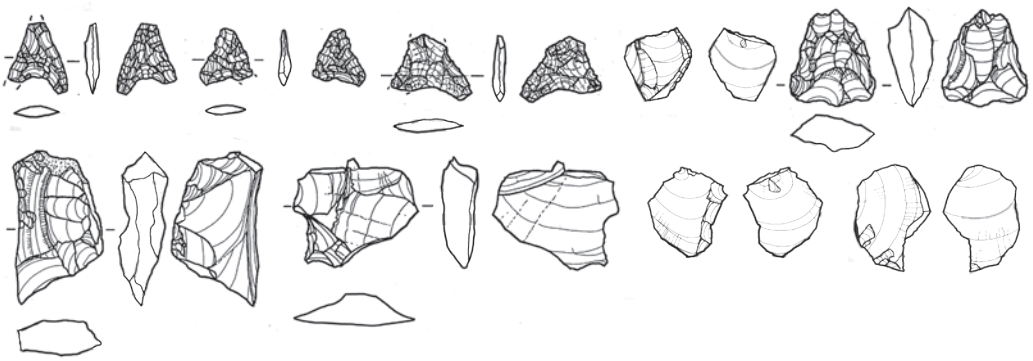


図 23　弥生時代中期前半の黒曜石製剥片石器群

［引用・参考文献］

小畑弘己 1991「第 26 次調査地点」『比恵遺跡群（10)』福岡市文化財調査報告書第 235 集、福岡市教育委員会。

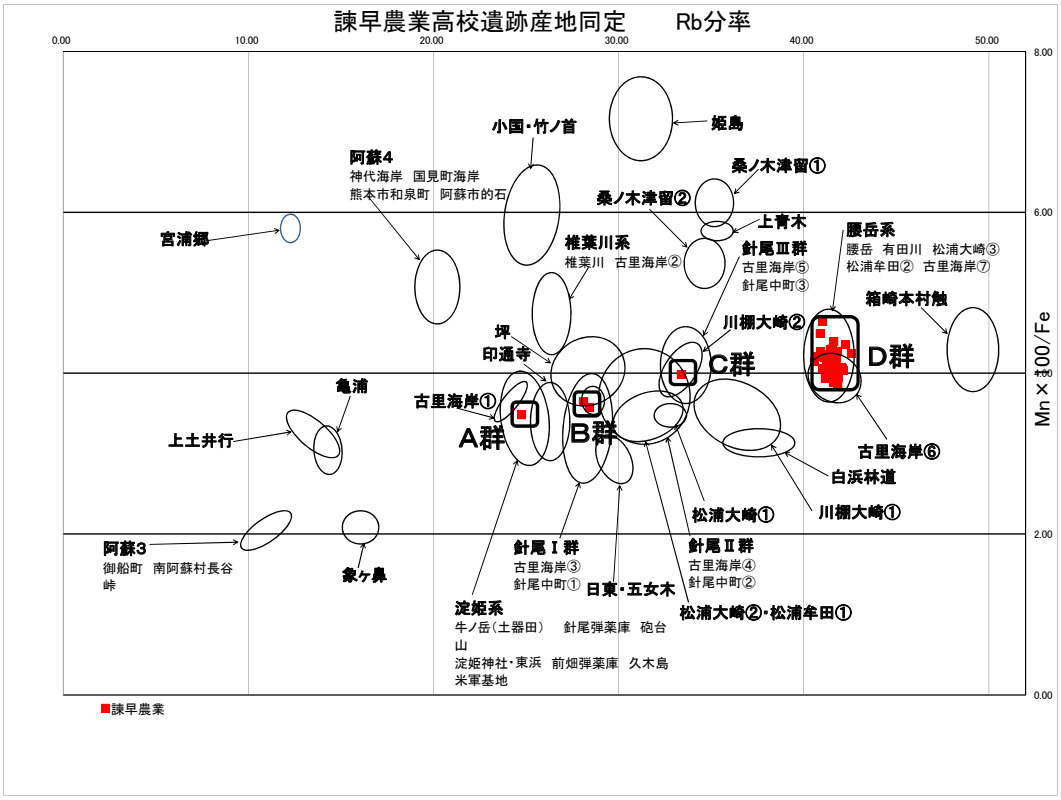
山崎頼人 2013「弥生時代北部九州の剥片石器石材の流通」『考古学ジャーナル』No.638、10-14 頁、ニューサイエンス社。

吉留秀敏 2002「北部九州弥生時代中期の剥片石器」『究班』Ⅱ、埋蔵文化財研究会 25 周年記念論文集、117-124 頁、埋蔵文化財研究会。

吉留秀敏 2012「筑後南部地域における弥生時代剥片石器の研究－八女地域における弥生時代剥片石器の様相－」『九州考古学』第 87 号、47-65 頁、九州考古学会。

（３）蛍光Ｘ線分析による原産地分析

弥生時代の黒曜石製石器の蛍光Ｘ線分析の事例は九州地方ではほとんど行なわれていない現状である。長崎県埋蔵文化財センターでは近年九州地方の黒曜石原産地の蛍光Ｘ線分析を実施しており判別図もより充実したものとなりつつある。



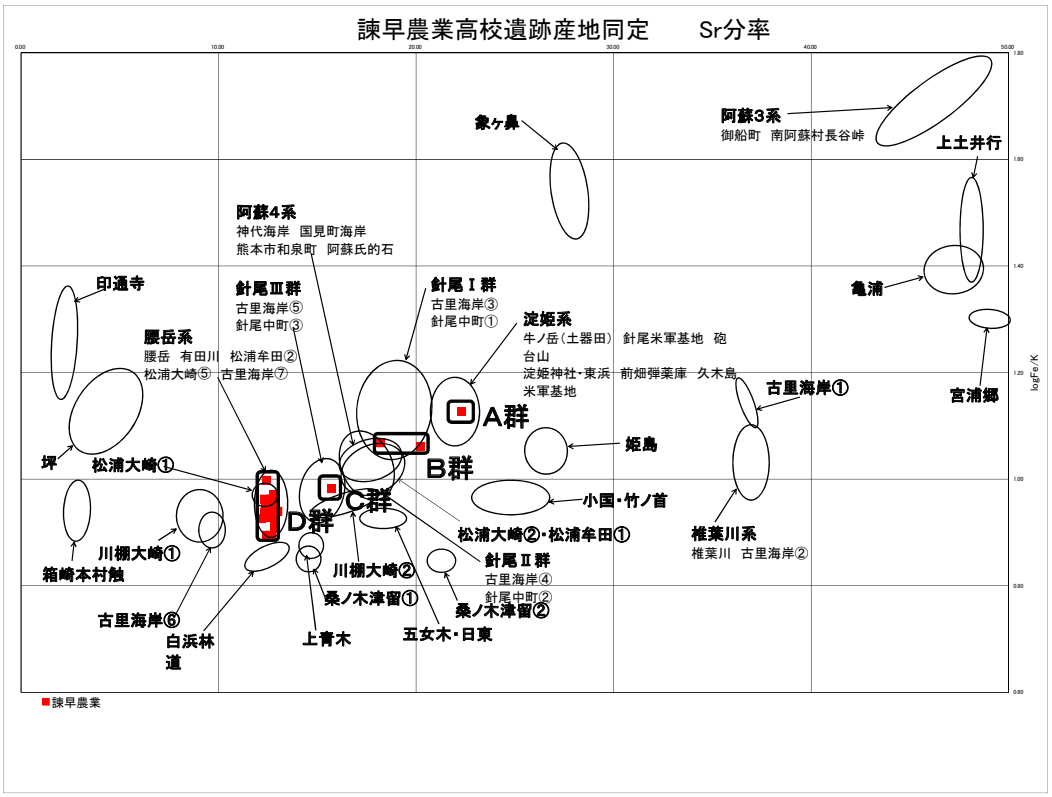


図 24　九州黒曜石原産地判別図

諫早農業高校遺跡から出土した黒曜石製石器（図 22）の蛍光Ｘ線分析の結果、Ａ～Ｄの４群に分けることができた。

Ａ群：32 の１点が該当する。風化面が青灰色を呈する淀姫系黒曜石である。

Ｂ群：12・27 が該当する。ややガラス質に乏しい黒色を呈する針尾Ｉ群である。

Ｃ群：24 が該当する。透明感のない黒色黒曜石で針尾Ⅲ群にあたる。

Ｄ群：本石器群の主体となる石材で、良質の漆黒色を呈する腰岳系黒曜石である。

結果は従来の肉眼観察と同様で腰岳系が圧倒的に多いものの僅少ではあるが針尾島周辺の黒曜石も使用していることが判明した。

定住生活に移行したとされる弥生時代にあって、こうした遠隔地の石材獲得が如何なるものであったか今後の研究の進展が望まれる。

表 12　黒曜石蛍光Ｘ線分析資料一覧

掲載番号	ID	K	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb分率	Mn×100/Fe	Sr分率	logFe/K	原産地
図22-1	1064	72.51	25.25	616.41	320.29	96.54	130.24	219.91	41.76	4.10	12.59	0.93	腰岳系
図22-2	1033	66.88	24.69	577.48	306.84	91.79	124.07	211.23	41.81	4.28	12.51	0.94	腰岳系
図22-3	1034	61.63	22.73	532.35	297.85	92.55	125.74	212.21	40.89	4.27	12.71	0.94	腰岳系
図22-4	1007	69.62	23.68	594.90	315.01	97.44	129.89	219.07	41.37	3.98	12.80	0.93	腰岳系
図22-5	1052	66.90	24.46	589.76	324.65	100.51	132.43	223.13	41.58	4.15	12.87	0.95	腰岳系
図22-6	1047	66.22	22.41	534.46	296.86	92.43	123.82	208.39	41.14	4.19	12.81	0.91	腰岳系
図22-7	1051	58.95	20.98	505.72	283.49	87.98	121.91	205.02	40.59	4.15	12.60	0.93	腰岳系
図22-8	1013	63.98	23.70	538.94	304.69	89.17	126.31	211.61	41.64	4.40	12.19	0.93	腰岳系
図22-9	1055	64.56	24.13	575.43	317.65	94.97	130.89	219.80	41.61	4.19	12.44	0.95	腰岳系
図22-10	1059	61.83	22.40	551.92	290.51	90.53	121.10	206.03	41.02	4.06	12.78	0.95	腰岳系
図22-11	1005	70.23	24.48	610.06	326.82	100.15	132.78	224.36	41.68	4.01	12.77	0.94	腰岳系
図22-12	1048	66.17	27.25	761.37	259.45	184.42	111.59	357.17	28.43	3.58	20.21	1.06	針尾Ｉ群
図22-13	1046	69.46	25.84	620.18	325.07	97.84	134.75	220.78	41.76	4.17	12.57	0.95	腰岳系
図22-14	1029	62.59	24.25	574.68	306.73	93.74	127.97	211.16	41.47	4.22	12.67	0.96	腰岳系
図22-15	1009	77.18	27.15	673.04	359.85	109.77	145.79	238.47	42.14	4.03	12.86	0.94	腰岳系
図22-16	1025	68.34	24.07	593.40	322.46	97.81	130.41	219.58	41.86	4.06	12.70	0.94	腰岳系
図22-17	1070	73.55	25.86	623.62	327.52	99.98	134.66	222.28	41.75	4.15	12.75	0.93	腰岳系
図22-18	1011	60.78	21.97	536.53	300.25	89.99	125.71	211.91	41.25	4.10	12.36	0.95	腰岳系
図22-19	1054	83.94	27.94	658.01	351.42	104.44	140.68	228.58	42.59	4.25	12.66	0.89	腰岳系
図22-20	1071	63.49	25.65	570.86	296.87	93.00	126.10	210.32	40.87	4.49	12.81	0.95	腰岳系
図22-21	1062	70.59	25.82	614.95	333.44	104.15	135.99	228.26	41.58	4.20	12.99	0.94	腰岳系
図22-22	1061	65.72	23.42	556.80	303.52	92.20	125.87	208.47	41.57	4.21	12.63	0.93	腰岳系
図22-23	1068	60.02	21.37	542.30	294.78	89.75	122.73	208.94	41.16	3.94	12.53	0.96	腰岳系
図22-24	1012	67.57	25.84	648.03	258.35	121.57	107.20	287.00	33.37	3.99	15.70	0.98	針尾Ⅲ群
図22-25	1072	66.06	24.04	589.72	321.66	97.74	132.93	226.49	41.30	4.08	12.55	0.95	腰岳系
図22-26	1063	65.94	24.31	565.33	310.57	94.60	126.57	217.29	41.46	4.30	12.63	0.93	腰岳系
図22-27	1035	64.53	27.57	754.91	251.65	162.96	107.85	373.03	28.10	3.65	18.20	1.07	針尾Ｉ群
図22-28	1020	66.51	23.77	575.64	304.43	91.17	126.48	208.37	41.68	4.13	12.48	0.94	腰岳系
図22-29	1053	70.95	25.50	664.22	327.24	99.87	133.40	221.46	41.85	3.84	12.77	0.97	腰岳系
図22-30	1006	74.83	26.35	649.71	335.29	98.70	136.49	226.03	42.10	4.06	12.39	0.94	腰岳系
図22-31	1008	69.08	25.01	633.86	327.44	98.62	131.95	223.76	41.88	3.95	12.61	0.96	腰岳系
図22-32	1010	60.06	28.04	805.08	225.72	203.21	103.54	379.47	24.75	3.48	22.28	1.13	淀姫系
図22-33	1021	66.31	24.42	588.80	311.64	96.18	129.28	216.67	41.34	4.15	12.76	0.95	腰岳系
図22-34	1022	63.34	25.47	630.98	313.57	93.93	130.71	218.28	41.45	4.04	12.42	1.00	腰岳系
図22-35	1030	64.11	23.75	556.10	300.31	89.03	123.03	209.74	41.59	4.27	12.33	0.94	腰岳系
図22-36	1014	78.40	28.74	705.45	362.91	107.80	147.18	245.11	42.05	4.07	12.49	0.95	腰岳系
図22-37	1016	67.57	23.08	582.25	318.69	97.08	131.49	216.93	41.70	3.96	12.70	0.94	腰岳系
図22-38	1002	68.59	24.32	593.59	317.54	96.81	129.83	217.78	41.67	4.10	12.71	0.94	腰岳系
図22-39	1015	72.50	27.60	652.32	336.47	101.95	141.55	233.88	41.34	4.23	12.53	0.95	腰岳系
図22-40	1001	67.30	23.99	617.88	317.77	93.99	132.32	219.67	41.61	3.88	12.31	0.96	腰岳系
図22-41	1028	71.43	25.62	595.79	327.92	101.27	134.22	225.91	41.54	4.30	12.83	0.92	腰岳系
図22-42	1050	65.94	23.53	559.08	303.75	94.43	129.73	218.65	40.69	4.21	12.65	0.93	腰岳系
図22-43	1004	67.19	26.94	580.09	320.44	99.26	133.85	227.51	41.03	4.64	12.71	0.94	腰岳系
図22-44	1060	73.33	25.12	576.10	316.49	92.93	128.25	211.30	42.26	4.36	12.41	0.90	腰岳系

２．甕棺墓と集落

第Ⅱ章で触れたように当遺跡で本調査が実施されるのは初めてであり、伝聞のみであった甕棺墓の存在を確認でき、かつ今も残る細型銅剣と同時期であったことは一定の意義が見出せる。検出した中期前葉の甕棺墓は後の損壊を受けた複数の小児棺であったが、微小な骨片と焼土粒が検出された点はやや特異であった。発掘調査面積は小規模で当該期の集落の様相に言及することは難しいが、少なくとも今回の調査区周辺には青銅器が副葬されるような成人棺は存在せず、密集墓域でもないだろうことは指摘できよう。逆に当遺跡の中でも標高の高い学校校舎部分が、より階層の高い特定墓域が広がるような立地であったと想起される。

遺跡の年代として、細型銅剣や今回出土した土器の様相からは中期初頭～中期中葉の限られた年代幅が考えられる。一方で、範囲確認調査では後期後葉以降に有明海沿岸地域で成立・展開する肥前型器台片が出土している。また今回調査では古墳時代初頭の土器をはじめ、少量ながら古墳時代の土器が出土している。県本土域の拠点集落の一つである当遺跡が、中期から後期あるいは古墳時代にかけて、どのような盛衰を辿ったのか興味深いところである。

３．中世

（１）掘立柱建物跡

今回調査で主体を占めた中世の遺構・遺物は 15 世紀を中心とした時期のものと考えられる。掘立柱建物跡は柱穴の状況や出土遺物からみて、建て替えが行われながら 16 世紀には廃絶していたとみられる。柱穴の出土遺物の中で注目されるのは、懸仏と天目碗片、スタンプ文を有する瓦質の深鉢形火鉢片であろう。

瓦質火鉢は豊前地域の深鉢形 C 類に相当するタイプである。豊前地域では奈良火鉢の系譜から 14 世紀前半以降に出現する（佐藤 2006）。特に C 類は大和ではほとんど出土せず豊前地域の在地産と考えられている。さらに、14 世紀代の奈良火鉢模倣品は寺社関連遺跡や居館跡に出土分布が限られ、調度品や荘厳具の一部として搬入されるという。14 世紀後半以降はこうした特殊空間での限定的使用から、暖房機能を第一義に使用階層が広がるとされる。

長崎県域でのスタンプ文を有する深鉢形火鉢に目を転じると 15・16 世紀の城館跡に目立って出土している。諫早氏に先立つ西郷氏の居館跡とも目される諫早家御屋敷跡の溝状遺構（16 世紀後半）や、大村純忠終焉の居館跡とされる坂口館跡（15 世紀後葉

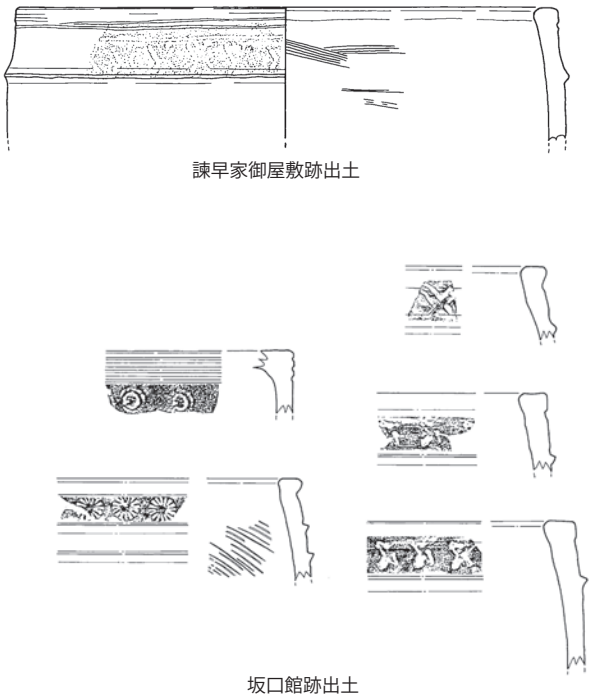


図 25　スタンプ文瓦質火鉢の類例（S=1/4）

～16 世紀末)、雲仙市筏 B 遺跡の区画溝（15 世紀代）などが挙げられる。今回調査の出土事例も合わせ考えると、使用階層の広がる 15・16 世紀においてなお限定的な階層で保有され、少なくとも一般集落での保有は未だ少ない段階とも考えうる状況である。

掘立柱建物跡やその他のピット群は、出土遺物の年代観や出土炭化材の年代測定結果から、14 世紀後半から 15 世紀前後を主とした遺構群と考えられる。時代背景としては室町時代南北朝期から戦国期にかけての時期にあたる。伊佐早氏船越城期から西郷氏との争いを経て西郷氏の一支城となっていた時期であろう。そもそも遺跡を切り抜くような小規模調査で居館や船越城を語ることは至難だが、当該期の城館及びその周辺施設を考える上で一つの定点になるものと考えられる。

（２）火葬土坑

掘立柱建物跡とともに中世の調査で大きな成果となったのが火葬土坑の可能性のある ST01 である。長楕円形の掘方の四隅に配置された棺台石が特徴的で、当初は木棺墓の可能性を考えていたが、副葬品及び釘が出土しない点や棺台石に被熱の痕跡が認められる点、また類例の参照から火葬土坑の可能性を挙げた。棺台石を有する火葬土坑や墓について九州内の中世墓資料集成を概観すると（狭川編 2004)、福岡県域に数多く見受けられるが、長崎や大分・熊本・九州南部ではほとんど見当たらない。

福岡県糸島市前原の奈良尾遺跡では今宿バイパス関連の発掘調査で、低山地の急斜面で多数の火葬土坑や土坑墓が検出されている（中間 1991)。棺台石を掘方の両端に各 1 点配置するものや両端と中央に各 2 点の計 6 点配置するものなど多様である（図 25)。青磁碗や土師質坏等の供献品が出土するものが多く、釘の残存する例もある。中間氏は冒頭で火葬墓と火葬土坑を峻別する必要性に触れ、残存しやすい焼骨が残る中で歯が全く検出できない場合は集骨が行われており墓とは見做し得ないとしている。氏はまた、報告書中で福岡県域の主要な火葬土坑を集成しその変遷を明らかにしている。14 世紀後半から 16 世紀前半にかけて、掘方の長さが 2m 弱から 1m 弱にまで小型化し、伸展状から屈臥状へという葬法自体の変容を指摘する。さらに 16 世紀後半以降、踞坐の姿勢で桶棺を使用する土葬が出現するが、過渡期には踞坐状の火葬土坑が併存したという。

一方で同様の棺台石を有する遺構に木棺墓も存在する。大宰府条坊跡 50 次調査 ST320 では、棺台石 6 点が配置された掘方内部で青磁碗や土師質小皿等の供献品が出土している。さらに埋土中に木棺痕跡が検出されるとともに、掘方底面では木棺の形状を如実に示すように大量の釘が出土している。鳥栖市の田代公園遺跡では、6 点の棺台石を配する掘方内部で供献品の青磁碗が出土し、釘が認められないとしながらも木棺墓の可能性を挙げている。

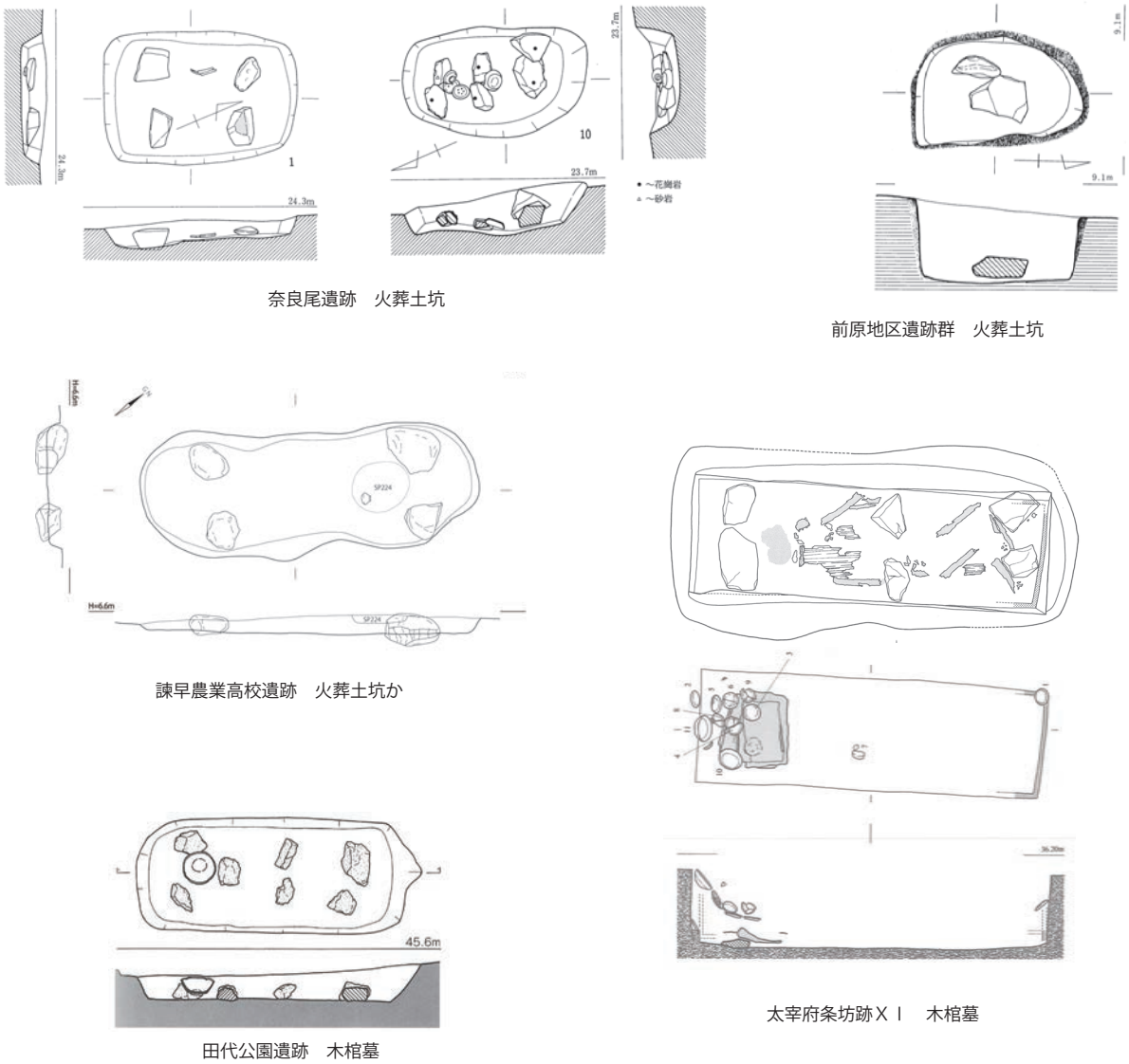
当遺跡の事例について今一度考えると、やはり釘が検出されていない点で木棺墓の可能性は低いと考えられる。掘方底面より上は削平を受けているため壁面の被熱痕跡には言及できない。灰や炭化物は検出されていないが、被熱痕跡のある棺台石を根拠に火葬土坑としておきたい。隣接する SK02 では掘方底面の被熱痕跡や焼土・炭化物粒が認められている。やや離れた SL02 では顕著な焼土が形成されており台石状の礫が据え置かれている。ST01 と同様に火葬に関連する遺構であるのかもしれない。

ところでこれら遺構の年代観について出土遺物からは詳細な年代を特定できないが、ST01 や SK02 は掘立柱建物跡 SB03 と重複するため SB03 の前後の時期のものであろう。地域は異なるものの奈良尾遺跡の変遷観を当てはめると、ST01 の掘方は 187cm と長く伸展状であると言えそうである。火葬土

坑としては古手の 14 世紀後半が想定でき、おそらくは SB03 より以前に存在したと考えられる。

（３）小結

中世の遺構群について考えうる評価を試みた。火葬土坑に関しては県内で類例が知られておらず中世の葬送を考える際の一資料となろう。掘立柱建物跡を含め、年代的には伊佐早氏や西郷氏が利用したであろう船越城の時代と重なる。城館や集落研究、当地域をはじめとした中世史を考える上で活用されれば幸いである。



奈良尾遺跡　火葬土坑

前原地区遺跡群　火葬土坑

諫早農業高校遺跡　火葬土坑か

太宰府条坊跡ＸＩ　木棺墓

田代公園遺跡　木棺墓

図 26　火葬土坑・木棺墓類例（S=1/40）

引用・参考文献

【遺跡の環境】
諫早市 2014「Ⅲ沿革」『市政概要 2014』
諫早市文化振興課 2016「小栗 C 地点遺跡」『諫早市文化財調査年報Ⅱ』諫早市教育委員会
片多雅樹・吉井康史・白石渓冴 2014「三次元計測器および 3D プリンターを用いた銅剣の復元～諫早農業高校遺跡出土銅剣の例～」『長崎県埋埋蔵文化財センター研究紀要』第 4 号　長崎県埋蔵文化財センター
川瀬雄一 2008『貝津横島 B 遺跡』諫早市教育委員会
木下良 1994「彼杵郡と高来郡の古代駅路」『諫早史談』26　諫早史談会
木本雅康 2011『古代官道の歴史地理』同成社
九州地方土木地質図編纂委員会 1985『九州地方土木地質図解説書』
産業技術総合研究所 地質調査総合センター・ウェブサイト「20 万分の 1 日本シームレス地質図 V2」
正林護 1971「諫早市出土の銅剣」『九州考古学』
田川肇 1985「小栗 B 遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅷ』長崎県教育委員会
秀島貞康 1983『林ノ辻遺跡』諫早市教育委員会
秀島貞康編 2009『上野町遺跡 1127、1159 地点』諫早市教育委員会
秀島貞康 1992『小栗遺跡 C 地点』諫早市教育委員会
宮﨑貴夫 2015「長崎県本土地域の状況について」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会
【弥生土器】
平美典 2004「北部九州における中期～後期前半の土器と併行関係」『弥生中期土器の併行関係』第 53 回埋蔵文化財研究集会
【古式土師器】
蒲原宏行 2017「佐賀・唐津平野」『九州島における古式土師器』第 19 回九州前方後円墳研究会長崎大会発表要旨集・基本資料集
小松護 2002「肥前地域における古墳時代中・後期土師器の編年」『古墳時代中・後期の土師器』第 5 回九州前方後円墳研究会佐賀大会発表要旨資料
【中世墓】
瓜生秀文 1993『前原地区遺跡群Ⅲ』前原市教育委員会
狭川真一編 1999『大宰府条坊跡ＸⅠ』太宰府市教育委員会
狭川真一編 2004『中世墓資料集成 - 九州・沖縄編（1）・（2）- 』中世墓資料集成研究会
徳永貞昭 2002「田代公園遺跡」『柚比遺跡群 2』佐賀県教育委員会
中島恒次郎 2009「九州の中世墓」『日本の中世墓』高志書院
中間研志 1991『奈良尾遺跡』福岡県教育委員会
【中世土器】
佐藤浩司 1991「旧豊前国における古代末から中世前期の土器様相」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』
佐藤浩司 2006「スタンプ文を有する瓦質土器の展開」『陶磁器の社会史－吉岡康暢先生古希記念論集－』
立石堅志・鍬柄俊夫「瓦質土器」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
徳永貞紹 1990「肥前における中世後期の在地土器」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』
中島恒次郎 1992「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』
林隆広 2011『諫早家御屋敷跡』長崎県教育委員会
宮﨑貴夫 1991「坂口館跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅷ』長崎県教育委員会
村子晴奈 2015「雲仙市国見町筏 B 遺跡」『平成 26 年度長崎県考古学会総会発表要旨』
森隆 1995「黒色土器」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
【その他】
九州国立博物館 2013『江戸のモダニズム　古武雄　まぼろしの九州のやきもの』
藤木聡 2007「長崎発・火打石事情」『西海考古』第 7 号
盛峰雄 2000「陶器の編年 1．碗・皿」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会

写真 12　平成 27 年度範囲確認調査トレンチ土層断面状況（東から）

写真 13　表土掘削状況（西から）

写真 14　遺構調査状況（西から。金比羅岳方面を望む）

写真 15　北東半 1 遺構検出状況（南から）

写真 16　北東半 2 遺構検出状況（南から）

写真 17　北西半 1 遺構検出状況（南から）

写真 18　南東半 1 遺構検出状況（北から）

写真 19　南東半 2 遺構検出状況（北から）

写真 20　南西半 2 遺構検出状況（北から）

写真 21　SU06(ST04) 検出状況（西から）

写真 22　ST04 骨片・焼土粒検出状況（西から）

写真 23　ST04 完掘状況（北から）

写真 24　SU03 検出状況（南から）

写真 25　SU04 検出状況（南から）　※焼土範囲が SL03

写真 26　遺物出土状況（南東から）　※奥の竹串が垂飾

写真 27　SL03 断割状況（西から）

写真 28　SP218 半裁状況（南から）

写真 29　ST01 検出状況（東から）

写真 30　ST01 半裁状況（南東から）

写真 31　SK02 半裁状況（南から）

写真 32　SK02 底面検出状況（南から）

写真 33　SK01 完掘状況（南から）

写真 34　SK03 検出状況（北から）

写真 35　SL01 検出状況（北から）

写真 36　SL01 断割状況（南から）

写真 37　SL02 検出状況（北から）

写真 38　SL02 半裁状況（東から）

写真 39　SP01(SB03) 半裁状況（南から）

写真 40　SP150(SB03) 半裁状況（西から）

写真 41　SP150(SB03) 完掘状況（北から）

写真 42　SP11(SB03) 半裁状況（東から）

写真 43　SP159(SB03) 半裁状況（西から）

写真 44　SP159(SB03) 礎板石出土状況（北西から）

写真 45　SP137(SB03) 礎板石出土状況（東から）

写真 46　SP226(SB03) 半裁状況（南から）

写真 47　SP226(SB03) 遺物出土状況（南から）

写真 48　SP226(SB03) 完掘状況（北から）

写真 49　SP225(SB03) 礎板石出土状況（北から）

写真 50　SP225(SB03) 完掘状況（北から）

写真 51　SP63(SB03) 半裁状況（南から）

写真 52　SP22(SB03) 礎板石出土状況（北西から）

写真 53　SP107(SB03 庇) 半裁状況（南から）

写真 54　SP69(SB03 庇) 半裁状況（南から）

写真 55　SP48 遺物出土状況（南から）

写真 56　SP03 遺物出土状況（南から）

写真 57　SP195 半裁状況（西から）

写真 58　SP117 半裁状況（北から）

写真 59　甕棺墓 ST04 出土土器 1

写真 60　甕棺墓 ST04 出土土器 2

写真 61　土器集中・包含層出土土器（弥生時代）

写真 62　SP81・218 出土土器、包含層出土土器（古墳時代）

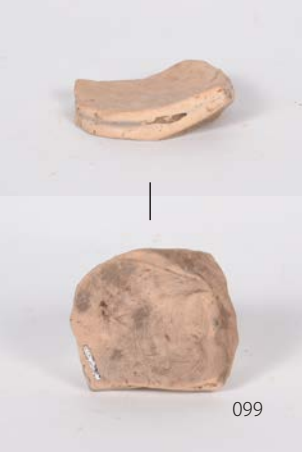


写真 63　SB03 出土土器・陶磁器（中世）

写真 64　ピット SP 出土土器（古代・中世）

写真 65　包含層出土土器・陶磁器（古代・中世）1

写真 66　包含層出土土器・陶磁器（古代・中世）2

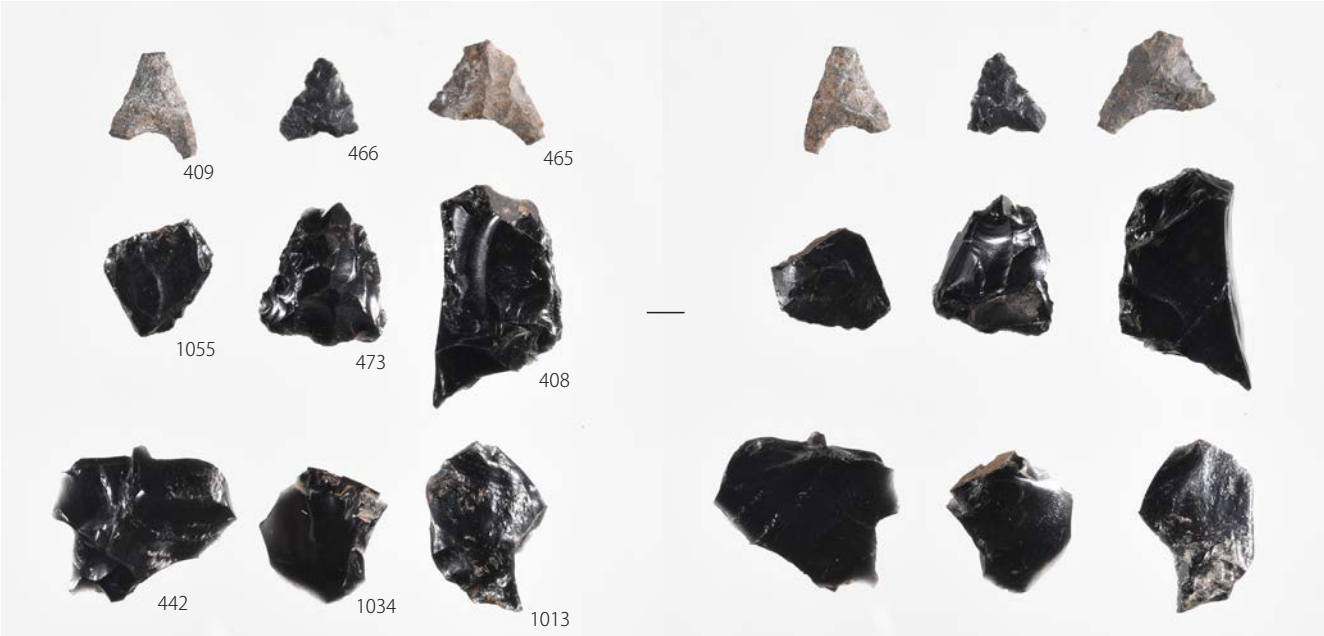


写真 67　遺構・包含層出土石器（弥生時代）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	いさはやのうぎょうこうこういせき
書 名	諫早農業高校遺跡
副 書 名	平成 29 年度諫早農業高校草花管理室・収納室改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シ リ ー ズ 名	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号名	第 24 集
編 著 者 名	松元一浩
編 集 機 関	長崎県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒 811 － 5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触 515 番地１　電話 0920（45）4080
発 行 年 月 日	西暦 2018 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いさはやのうぎょうこうこういせき 諫早農業高校遺跡	ながさきけんいさはやし 長崎県諫早市 たていしちょう 立石町	42204	90-29	32° 50′ 15″	130° 3′ 38″	本調査 2017.5.8 ～ 2017.6.9	200 ㎡	学校建設

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
諫早農業高校遺跡	墳墓 遺物包含地	弥生時代	甕棺墓 1（小児棺） 焼土遺構 1	弥生土器 台石 剥片（黒曜石・安山岩製）	城ノ越式～須玖Ⅰ式
		古墳時代	土器埋設ピット 2	土師器 須恵器	古式土師器 庄内系椀形高坏
		古代・中世	掘立柱建物跡 1 ピット群 火葬土坑 1（あるいは木棺墓か） 土坑 2 焼土遺構 1	緑釉陶器 黒色土器 土師質土器 瓦質土器（火鉢・羽釜） 国産陶器 貿易陶磁（青磁） 銅製仏像（掛仏）	室町時代（南北朝期～戦国期）

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第 24 集

諫早農業高校遺跡

2018（平成 30）年 3 月 31 日

発行　長崎県教育委員会
　　長崎市江戸町 2 番 13 号

印刷　株式会社 昭和堂